岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 234

南　方　遺　跡

岡山法務総合庁舎新営に伴う発掘調査

２０１２

岡 山 県 教 育 委 員 会

１　１区全景（東から）

２　２区全景（東から）

巻頭図版２

１　『岡山伊勢宮絵図』における調査地位置（枠線内）
『岡山伊勢宮絵図』（宝永五年ごろ）＜部分拡大および加筆＞岡山大学付属図書館蔵

２　『備前岡山地理家宅一枚図』における調査地位置（枠線内）
『備前岡山地理家宅一枚図』（文久元年）＜部分拡大および加筆＞岡山大学付属図書館蔵

1

7

10

18

17

21

42

41

38

86

78

88

89

83

91

99

井戸１・土壙２・土壙 11 出土陶磁器

巻頭図版 4

土壙 11・15・18・19・25・溝 1 出土陶磁器・金属器

序

岡山市北区の南方遺跡は、岡山県三大河川の一つ旭川の下流平野に位置する県下有数の複合遺跡として知られています。なかでも、弥生時代前期から中期にかけて岡山県を代表する集落遺跡として有名です。これまでに数多くの調査が実施されていますが、岡山市教育委員会が平成５～７年度に実施した発掘調査では、遺跡の中を流れる旧河道から弥生時代中期を中心とする時期の多数の木器・木製品が見つかり、その質・量と保存状態の良さは全国的に注目されることとなりました。

このたび、岡山法務総合庁舎が新営されることになりましたが、建設予定地が周知の南方遺跡の範囲内に当たるため、岡山県教育委員会では関係機関と協議を行った結果、平成20年度に確認調査を実施し、平成22年度に本発掘調査を実施することとしました。

発掘調査では、弥生時代後期の土壙、古墳時代前期の井戸とともに江戸時代後半の武家屋敷に伴う遺構を検出しました。特に、石垣を伴う溝と「三谷様」とヘラ書きのある焜炉を出土した土壙の位置が、文久元（1861）年の岡山城下の絵図『備前岡山地理家宅一枚図』と照合すると、そこに描かれた水路および「三谷」家の屋敷地と一致することが判明しました。

この報告書が埋蔵文化財の保護・保存のため活用され、地域の歴史を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては、埋蔵文化財専門委員の先生から有益な御指導・御助言を賜りました。また、岡山地方検察庁をはじめ関係各位、さらに地元の方々から御理解と多大なる御助力を賜りました。ここに記して厚くお礼を申し上げます。

平成24年２月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　平井　泰男

例　　言

1　本書は、岡山法務総合庁舎新営に伴い、岡山県教育委員会が岡山地方検察庁の依頼を受け、法務省から支出委任を受けた国土交通省（中国地方整備局岡山営繕事務所）と岡山県の委託契約により、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した、南方（みなみかた）遺跡の発掘調査報告書である。

2　南方遺跡は、岡山県岡山市北区南方1丁目8－42ほかに所在する。

3　確認調査は、平成20年４月24日～５月２日に和田剛が担当して実施した。調査面積は60㎡である。本発掘調査は、平成22年10月１日～平成23年３月31日に柴田英樹・氏平昭則・小嶋善邦・三輪宜生（平成22年10月～12月）が担当して実施した。調査面積は2,161㎡である。

4　発掘調査にあたっては、埋蔵文化財専門委員から御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。

　埋蔵文化財専門委員　　稲田孝司（岡山大学名誉教授）

5　本書の作成は、平成23年４月１日～９月30日に、氏平が担当して実施した。

6　本書の執筆は発掘担当者などが行い、文責はそれぞれ文末に示した。全体の編集は氏平が行った。

7　動物遺存体の同定については、富岡直人（岡山理科大学）氏に依頼し、有益な御教示を得た。記して厚くお礼を申し上げる。

8　樹種・種実同定は株式会社古環境研究所に、花粉・植物珪酸体分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ委託し、報告文を掲載した。鉄滓等の分析は、株式会社九州テクノリサーチに委託し、大澤正己氏による報告文を掲載した。

9　遺物写真の撮影については、江尻泰幸の協力と援助を得た。

10　本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1　本報告書に用いた高度値は海抜高である。

2　本報告書に用いた方位・座標は、平面直角座標第Ⅴ系（世界測地系）の座標北および数値である。

3　本報告書の遺構及び遺物実測図の縮尺率は、図示または明記している。基本的には以下の通りである。

遺構　井戸：1/30　土壙：1/80・1/60・1/30　　杭列：1/100

遺物　土器・瓦：1/6・1/5・1/4　　木器・木製品：1/8・1/4

石器・石製品・金属製品・土製品：1/3・1/2

4　本報告書の遺構配置図において、遺構名を省略する場合は、次に示す略号を用いた。

井戸：井　土壙：土　杭列：杭

5　遺物掲載番号のうち土器以外については、その材質にしたがって番号の頭に次の略号を付した。

石器・石製品：S　木器・木製品：W　金属製品：M　土製品：C

ガラス製品：G　貝製品：B

6　掲載した土器のうち中軸線の両側に白抜きのあるものは、小片のため径が不確実なものである。

7　土層断面図・遺物等に使用した土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠している。陶磁器の釉色等一部には『新版　色の手帖』（永田泰弘監修　小学館　1986）を使用した。

8　本報告書第２図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図の「岡山北部」・「岡山南部」を複製し、加筆したものである。

9　本報告書の時代・時期区分は、一般的な政治史区分に準拠し、室町時代以降は主に世紀を使用している。

目　　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次
第１章　遺跡の位置と環境……1
第２章　調査の経緯……3
　第１節　発掘調査の経緯と経過……3
　　１　発掘調査の経緯……3
　　２　確認調査……4
　　３　本発掘調査の経過……4
　第２節　報告書作成の経過……5
　第３節　日誌抄……5
　第４節　発掘調査および報告書作成の体制……5
第３章　発掘調査の成果……7
　第１節　調査区の概要……7
　第２節　江戸時代の遺構と遺物……8
　　１　概要……8
　　２　井戸……9
　　３　土壙……11
　　４　溝……30
　　５　杭列……37
　　６　包含層出土遺物……37
　第３節　中世以前の遺構と遺物……39
　　１　概要……39
　　２　井戸……40
　　３　土壙……40
　　４　溝・たわみ……41
　　５　包含層出土遺物……42
第４章　総括……44
付載
　１　南方遺跡出土鍛冶関連遺物の分析……48
　２　南方遺跡土壌の花粉・植物珪酸体分析……54
　３　南方遺跡の種実・樹種同定結果……56
　４　南方遺跡出土動物遺体属性表……58
遺構一覧表……59
遺物観察表……60
図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　遺跡位置図（1/1,500,000）…… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 2
第３図　調査区位置図（1/2,000）…… 3
第４図　Ｔ２（1/150）…… 4
第５図　Ｔ３（1/150）…… 4
第６図　検出遺構全体図と土層柱状図
（1/600・高さ1/100）…… 7
第７図　江戸時代遺構全体図（1/300）…… 8
第８図　井戸１（1/30）・出土遺物１（1/4）…… 9
第９図　井戸１出土遺物２（1/4）…… 10
第10図　井戸１出土遺物３（1/4・1/3）…… 11
第11図　井戸２（1/30）…… 11

第12図　土壙１（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 12
第13図　土壙２（1/80）・出土遺物１（1/4）…… 12
第14図　土壙２出土遺物２（1/4）…… 13
第15図　土壙３・４（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）…… 13
第16図　土壙５（1/60）・出土遺物（1/4）…… 14
第17図　土壙６（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）…… 14
第18図　土壙７（1/80）…… 14
第19図　土壙７出土遺物（1/6・1/4・1/3）…… 15
第20図　土壙８（1/60）…… 16
第21図　土壙９（1/80）・出土遺物（1/4）…… 16
第22図　土壙10（1/60）・出土遺物（1/5・1/4）…… 16
第23図　土壙11（1/60）・出土遺物１（1/4）…… 17
第24図　土壙11出土遺物２（1/4）…… 18
第25図　土壙11出土遺物３（1/4）…… 19
第26図　土壙11出土遺物４（1/6・1/5・1/4・1/3）…… 20
第27図　土壙12（1/80）・出土遺物（1/4）…… 21
第28図　土壙13（1/80）・出土遺物（1/4）…… 22
第29図　土壙14（1/60）…… 22
第30図　土壙15・16（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 23
第31図　土壙17・18（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 23
第32図　土壙19（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 24
第33図　土壙20（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 25
第34図　土壙21（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）…… 26
第35図　土壙22（1/80）・出土遺物（1/4）…… 26
第36図　土壙23（1/60）・出土遺物（1/4）…… 26
第37図　土壙24（1/60）・出土遺物（1/4）…… 27
第38図　土壙25（1/80）・出土遺物（1/6・1/4）…… 27
第39図　土壙26（1/60）・出土遺物（1/4）…… 28
第40図　土壙27（1/60）…… 28
第41図　土壙28（1/80）・出土遺物（1/4）…… 29
第42図　土壙29（1/60）・出土遺物（1/4）…… 29
第43図　溝１断面図（1/60）…… 30
第44図　溝１Ａ・溝１Ｂ①（1/100）…… 31
第45図　溝１Ｂ②・③（1/100）…… 32
第46図　溝1Ｃ（1/100）…… 33
第47図　溝１出土遺物１（1/4・1/3）…… 34
第48図　溝１出土遺物２（1/3・1/2）…… 35
第49図　溝１出土遺物３（1/4）…… 36
第50図　溝２（1/30）…… 36
第51図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）…… 36
第52図　溝４（1/30）…… 36
第53図　杭列１（1/100）…… 37
第54図　杭列２（1/100）…… 37
第55図　江戸時代以降包含層出土遺物（1/4・1/3）…… 38
第56図　中世以前遺構全体図（1/300）…… 39
第57図　井戸３（1/30）・出土遺物（1/8・1/4）…… 40
第58図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）…… 41
第59図　土壙31（1/30）…… 41
第60図　溝５～８・たわみ１・２（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）…… 42
第61図　中世以前包含層出土遺物（1/4・1/2）…… 43
第62図　弥生～古墳時代の調査区周辺（1/3,000）…… 44
第63図　『岡山伊勢宮絵図』［1708（宝永５）年ごろ］と遺構配置図（1/1,000）…… 45
第64図　『備前岡山地理家宅一枚図』［1861（文久元）年］と遺構配置図（1/1,000）…… 46

写真目次

写真１　溝１Ｂ①作業風景（西から）…… 31
写真２　１区作業風景（北西から）…… 43
写真３　２区作業風景（南西から）…… 43
写真４　現地説明会の様子１（平成23年２月19日）…… 43
写真５　現地説明会の様子２（平成23年２月19日）…… 43

図版目次

巻頭図版１　１　１区全景（東から）
　　２　２区全景（東から）
巻頭図版２　１　『岡山伊勢宮絵図』における調査地位置（枠線内）
　　２　『備前岡山地理家宅一枚図』における調査地位置（枠線内）
巻頭図版３　井戸１・土壙２・土壙11出土陶磁器
巻頭図版４　土壙11・15・18・19・25・溝１出土陶磁器・金属器
図版１　１　井戸１平面（北から）・断面（南から）
　　２　土壙４・５・６・杭列１（東から）
　　３　土壙７～12・溝３（北から）
図版２　１　土壙19・20・22・23（北から）
　　２　土壙19・22（東から）
図版３　１　土壙25～28・溝３（北から）
　　２　溝１北側（北から）
図版４　溝１（北から）
図版５　１　溝１南側（北から）
　　２　溝１北隅部分（南東から）
　　３　溝１北側断面（北から）
　　４　杭列２（西から）
　　５　井戸３（北から）
図版６　井戸１・土壙１・２・４・６・７・９・11出土遺物
図版７　土壙11・15・18出土遺物
図版８　土壙19・20・21・22・24・29・溝１出土遺物
図版９　溝１・江戸時代以降包含層出土遺物
図版10　井戸３・包含層出土遺物

第１章　遺跡の位置と環境

南方遺跡は岡山平野北西部に位置する集落遺跡で、岡山市北区南方一帯に広がっている。岡山平野北西部は、西を標高が70ｍの京山、北を標高150ｍ前後の半田山山塊、東を岡山県３大河川の一つ旭川で囲まれている。この中には、北東から南西に細長い微高地が多数形成されている。

旭川と西から注ぎ込む笹ヶ瀬川の堆積が進み、縄文時代後期には津島岡大遺跡の北東部に竪穴住居が認められていた[1]が、晩期には津島遺跡まで生活圏が南進している。伊福定国前遺跡の珪藻分析では、弥生時代前期に河口干潟から後背湿地への変化が推定され[2]、平野は急速に拡大したことがわかる。弥生時代前期から中期では、微高地縁辺に水田、微高地上に集落と墓域が位置する状況が復元されている。津島遺跡では低位部で水田関連遺構が確認されている[3]。南方遺跡では、前期後葉から中期後葉にかけての土壙墓群が検出され、その１基からは細型銅剣の先端片が出土した[4]。昭和54年度の発掘調査では、中期中葉の竪穴住居を確認している[5]。弥生時代中期後葉から古墳時代前半にかけて、鹿田遺跡[6]・伊福定国前遺跡などで新規の集落が確認できる。南方遺跡では古墳時代初頭の竪穴住居を６棟確認している[5]。弥生時代後期から古墳時代前半には、京山・半田山山塊を中心に墳墓が造営され、旭川西岸地域の首長系列を追うことができる。中でも４世紀後半～５世紀に位置づけられる神宮寺山古墳は、平地にある全長150ｍの前方後円墳で旭川西岸最大の規模を誇る。古墳時代後半の集落は、北方下沼遺跡で確認されているが、半田山丘陵南側・京山周辺で横穴式石室は皆無である。古代から中世は伊福定国前遺跡[7]、鹿田遺跡、大供本町遺跡[8]で集落が見られる。津島江道遺跡[9]では官衙的施設が想定され、鹿田遺跡は鹿田荘との関連が指摘されている。

近世は、慶長２（1597）年の宇喜多秀家の岡山城築城以降備前国の中心部となり、その後城下町の拡張が行われた。南方遺跡の範囲は外堀と西川に挟まれ、南部は一部が侍屋敷、北側は南方村で田畑が広がる景観であった。明治８（1875）年に外堀が埋められてからは市街化が進んでいく。　（氏平）

註

（１）「津島岡大遺跡16」-第17・22次調査-[環境理工学部棟新営]『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第21冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　2005

（２）「伊福定国前遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』188　岡山県教育委員会　2005

（３）「津島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』151　岡山県教育委員会　2000

（４）第2図の文献Ａ

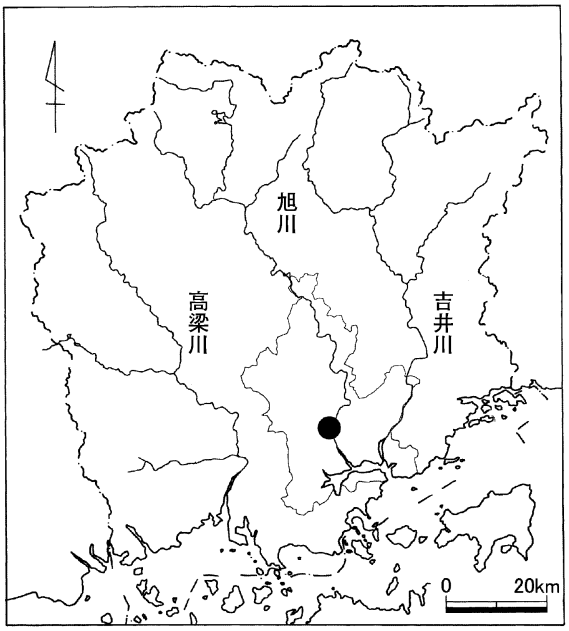
（５）第2図の文献Ｂ

（６）「鹿田遺跡Ｉ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』３　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1988

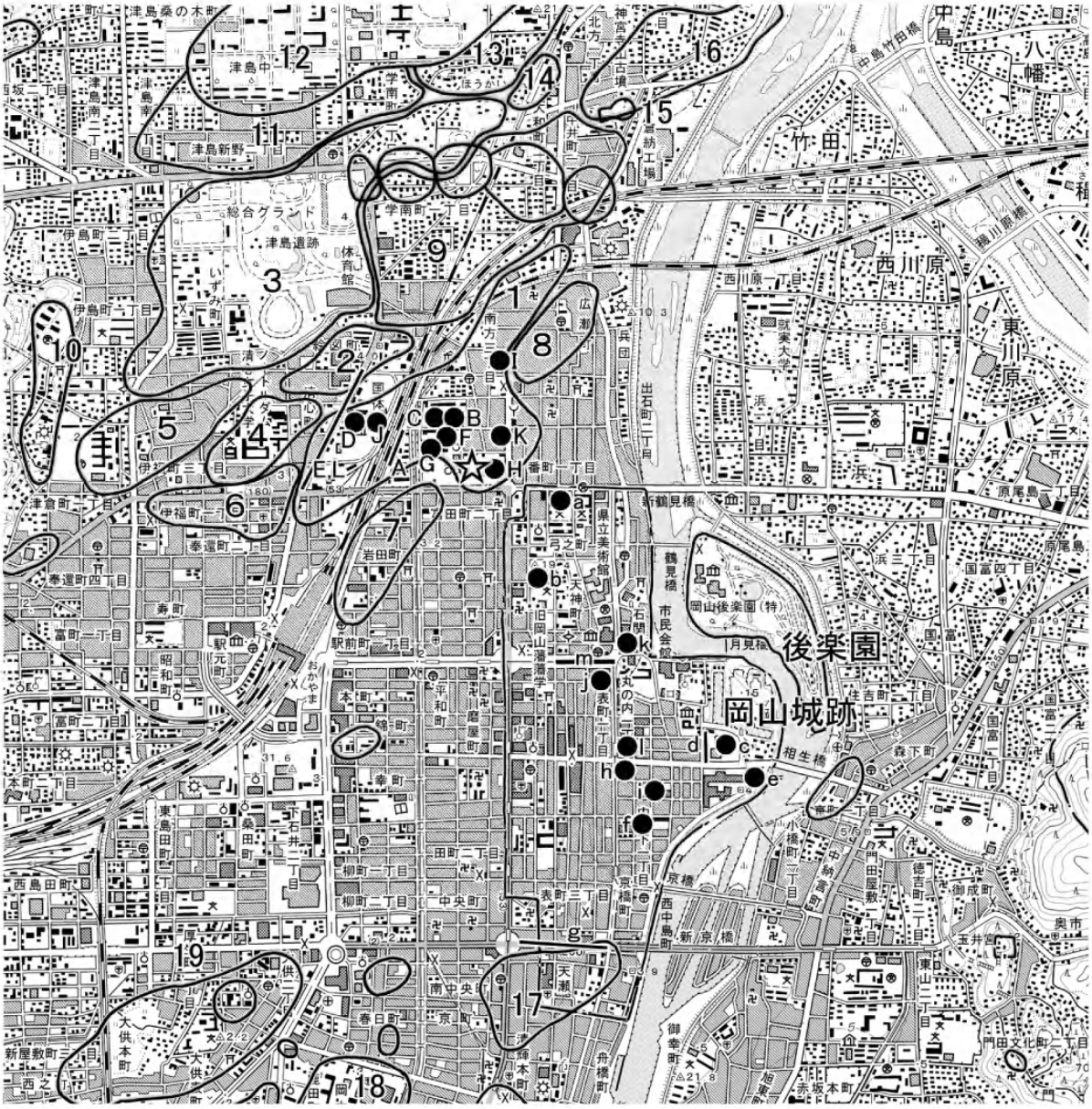
（７）「伊福定国前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』224　岡山県教育委員会　2010

（８）「大供本町遺跡」『岡山市埋蔵文化財センター年報』８　岡山市教育委員会　2009

（９）「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18　1988



第１図　遺跡位置図　（1/1,500,000）



1 南方遺跡　2 絵図遺跡　3 津島遺跡　4 上伊福遺跡　5 上伊福・伊福定国前遺跡　6 上伊福（立花）遺跡　7（集落・弥生）　8 広瀬遺跡　9 北方上沼・横田・中溝・地蔵・薮ノ内遺跡　10 上伊福西・尾針神社南遺跡　11 津島新野遺跡　12 津島岡大遺跡　13 津島江道遺跡　14 散布地　15 神宮寺山古墳　16 北方長田遺跡　17 天瀬遺跡　18 鹿田遺跡　19（散布地）

南方遺跡内の主な発掘調査地点　事業名 掲載元,調査年度

A 新幹線敷設による市道移転工事『南方遺跡発掘調査概報』, 1969・70　B 国立病院地方循環器病センター『県報告』40, 1979　同看護婦宿舎『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』, 1980　C 総合福祉・ボランティア・NPO会館『県報告』196, 2004　D 病院建設（南方蓮田調査区）『市概要』, 1994・1995・『市埋文セ年報』6, 2005　E 国道53号キャブシステム『県報告』110, 1994　F 子育て支援センター『市埋文セ年報』9, 2008　G 後楽館中高校『市埋文セ年報』9, 2008・現地説明会資料, 2009　H 広島高裁・岡山地家簡裁庁舎建て替え『県報告』200, 2004　I 福武書店本社建設（南方釜田遺跡）同現地説明会資料, 1986～1989　J マンション建設（南方（国体開発）遺跡）同現地説明会資料, 1992　K 共同住宅建設（南方（岡山牛乳）遺跡）『市概要』, 1995　L 電線地中化（南方（中電）遺跡）『市概要』, 1995

岡山城下の主な発掘調査地点　事業名 掲載元,調査年度

a 旧弘西小（三ノ外曲輪）『市埋文セ年報』3・4, 2003・2004　b 中央中（三ノ外曲輪）『市埋文セ年報』4・5・7・8・『岡山城三之外曲輪跡 旧岡山藩藩学校跡』, 2003・2004・2006・2007　c 県立図書館（二ノ丸）『県報告』175, 1999　d 市道丸の内16号線（二ノ丸）『市埋文セ年報』4, 2003　e 県庁舎増設（二ノ丸）『県報告』78,1989　f 中電変電所（二ノ丸）同建設事業埋文調査委員会調査報告, 1994・『市概要』, 1996　g 国道２号共同溝（外堀）『県報告』154, 1992 1996 1998　h 宇野自動車（二ノ丸）『市概要』, 1997　i 携帯基地局（二ノ丸）『市埋文セ年報』8, 2007　j 音楽ホール建設（三ノ曲輪）『岡山城三之外曲輪』, 1989　k ホテル建設（三ノ曲輪）『岡山城内堀』, 1989　l 中国銀行本店建設（二ノ丸）, 1990　m 地下駐車場建設（中堀・内堀）『岡山県埋蔵文化財報告』19・20, 1989・1990

※『県報告』=岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、『市概要』=岡山市埋蔵文化財調査の概要、『市埋文セ年報』=岡山市埋蔵文化財センター年報の略

第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

第２章　調査の経緯

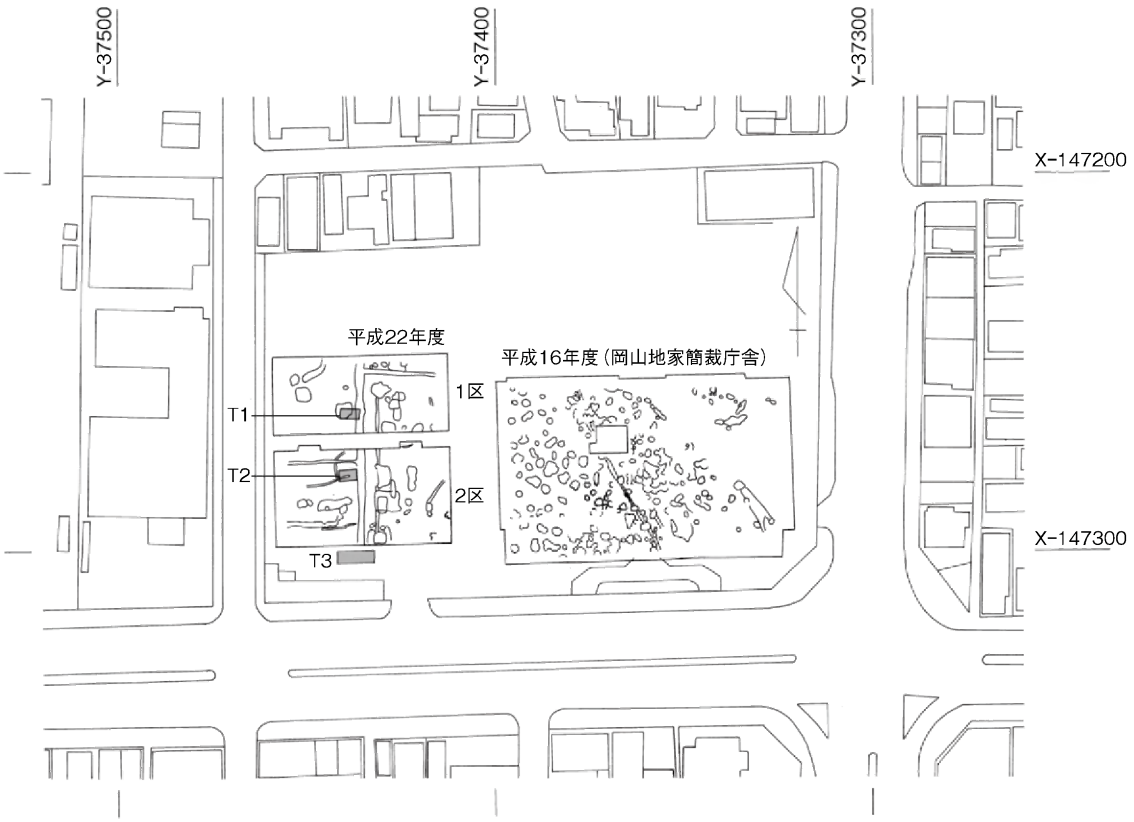
第１節　発掘調査の経緯と経過

１　発掘調査の経緯

平成19年６月、岡山地方検察庁から岡山県教育庁文化財課に対して、南方遺跡として周知されている岡山市北区南方１丁目８-42ほかにおいて、法務総合庁舎を建設したい旨の協議がなされた。文化財課では、東隣で平成16年に実施した発掘調査成果から、協議対象地にも弥生時代の微高地が想定されたため、遺構面の海抜高、遺構の密度等を把握するための確認調査を実施することとした。

平成20年４～５月に実施した確認調査の結果は次項に詳しいが、海抜1.4～1.5ｍと、想定に反してやや低い位置で、遺構密度は希薄であるが、弥生時代の微高地が続くことを確認した。

この確認調査成果に基づいて、文化財課は、文化財保護法第94条の規定による岡山地方検察庁からの埋蔵文化財発掘通知に対して、平成20年10月１日付けで発掘調査の実施を勧告した。発掘調査については、法務省から支出委任を受けた国土交通省（中国地方整備局岡山営繕事務所）と岡山県の委託契約により、岡山県古代吉備文化財センターが平成22年度に実施した。　（光永真一）

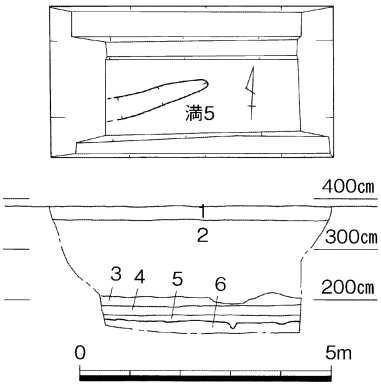


第３図　調査区位置図（1/2,000）

２　確認調査

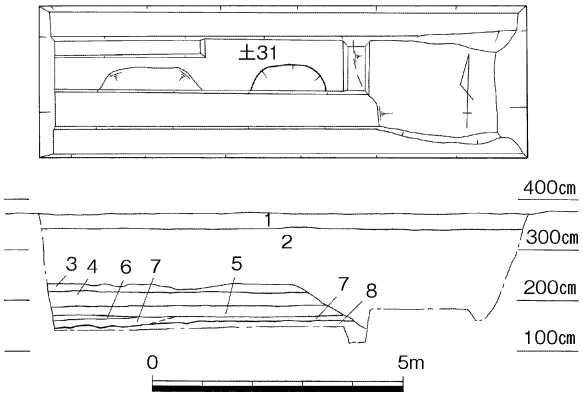
平成20年４月24日から５月２日にかけて、遺跡の内容把握を目的として、Ｔ１～Ｔ３の３本のトレンチを設定し、確認調査を実施した。調査の結果、全トレンチで近現代の造成・攪乱土が地表下1.6ｍ付近まで存在し、その下層に砂層、粘土層の水平堆積を確認した。粘土層の下半については、検出高や土層の特徴から、平成16年度発掘調査時の中世水田層と同じと考えた。この水田層の下層に灰色粘土層が存在する。さらにその下層、海抜1.4ｍ～1.5ｍで黄褐色の微高地基盤層を確認した。Ｔ１では現代撹乱が基盤層まで達していて遺構の有無を確認できなかったが、Ｔ２では溝（本書掲載溝５）を、Ｔ３では袋状土壙（本書掲載土壙31）を基盤層上面において検出した。

各トレンチの基盤層上面は、平成16年度調査区のそれより20㎝ほど低く、調査地内でもＴ１からＴ３へ向かって10㎝程度下がる。しかし、Ｔ２・Ｔ３で遺構を確認したことから、調査区全体が微高地であると予想した。　（氏平）



1　砂利
2　造成・攪乱土
3　オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質細砂
4　オリーブ灰色（5GY5/1）粘質細砂　中世水田層か
5　灰色（N5/）粘質微砂
6　灰オリーブ色（5Y6/1）粘質微砂　基盤層

第４図　Ｔ２（1/150）



1　砂利
2　造成・攪乱土
3　オリーブ灰色（10Y5/2）粗砂
4　オリーブ灰色（2.5GY6/1）細砂
5　オリーブ灰色（5GY5/1）粘質微砂
6　灰色（N6/）粘質微砂
7　暗灰色（N3/）粘質微砂
8　灰オリーブ色（5Y6/2）微砂　基盤層

第５図　Ｔ３（1/150）

３　本発掘調査の経過

発掘調査は、計画された建物の平面構造に従い南北２つの調査区にわけて実施した。北側の１区は951㎡、南側の２区は1,210㎡を測り、調査総面積は2,161㎡である。排出土置き場が十分に確保できないため１区を先行して調査を行い、２区の排出土に備えた。ただし２区西端については遺構確認や重機進入のため、１区とあわせて調査を実施した。調査期間は、既存建物の解体撤去完了後の平成22年10月から翌年３月までの６か月である。調査員は10～12月に４名、１～３月に３名が担当した。調査開始間もなく、江戸時代の遺構が残存することが判明し、絵図との照合可能な侍町の一角が確認できた。一方で調査の進行に伴い、隣接地（現裁判所）と比べて弥生時代の遺構が少ないことも明らかとなった。平成23年１月には埋蔵文化財専門委員　稲田孝司氏に現地指導をいただいた。同年２月に調査成果を公開するために現地説明会を開催した。現地での記録保存終了後に埋め戻しを行い、３月にすべての調査を完了した。　（柴田）

第２節　報告書作成の経過

平成23年４月から、発掘調査担当者１名が岡山県古代吉備文化財センターにおいて報告書作成作業を実施した。出土遺物の洗浄・注記は現場事務所で終了していたので、センターでは出土遺物の接合・復元及び遺物の抽出と実測を行った。遺物実測図の浄書、遺構図面の整理・下図作成・浄書は調査員が行った。遺物の掲載については、土壙出土で、その中で最も新しい遺物を中心に掲載している。溝１の陶磁器については、古い時期の溝（溝１Ａ・Ｂ）埋土出土と断定できた遺物を中心に掲載した。最も新しい溝（溝１Ｃ）埋土とその上層の造成土から陶磁器が多数出土しているが、そのほとんどは包含層出土遺物として扱っている。（氏平）

第３節　日誌抄

平成20年度（確認調査）

平成20年

４月24日（金）　発掘資材搬入、調査開始

５月２日（金）　調査終了

平成22年度（本発掘調査）

平成22年

10月１日（金）　発掘調査事業開始

10月６日（水）　発掘資材搬入、１区及び２区西調査開始

12月７日（火）　１区遺構全景写真撮影、２区西調査終了

12月10日（金）　２区調査開始

平成23年

１月26日（水）　埋蔵文化財専門委員現地指導

２月３日（木）　２区近世遺構面全景写真撮影

２月19日（土）　現地説明会開催

３月４日（金）　１区調査終了

３月10日（木）　２区調査終了

３月31日（水）　発掘調査事業終了

平成23年度（報告書作成）

４月１日（金）　報告書作成事業開始

９月30日（金）　報告書作成事業終了

第４節　発掘調査および報告書作成の体制

平成20年度

岡山県教育委員会

教育長　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　岡野　健一

文化財課

課　長　三村　修

参　事　木山　潤郎

参　事　田村　啓介

総括副参事（埋蔵文化財班長）　光永　真一

主　任　小嶋　善邦

主　事　平井　利尚

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　藤川　洋二

次　長（総務課長事務取扱）　小林　勝

参　事　岡田　博

＜総務課＞

総括副参事（総務班長）　若林　一憲

主　任　福池　光修

主　任　中島　忍

＜調査第一課＞

課　長　中野　雅美

総括副参事（第一班長）　宇垣　匡雅

主　事　和田　剛

（確認調査担当）

平成22年度

岡山県教育委員会

教 育 長　門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長　増本　好孝

文化財課

課　　長　田村　啓介
参　　事　光永　真一
総括副参事（埋蔵文化財班長）　宇垣　匡雅
主　　任　米田　克彦
主　　事　一色　　武

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　児仁井克一
次　　長（総務課長事務取扱）　片山　淳司
参　　事　中野　雅美
＜総務課＞
総括副参事（総務班長）　上田　利弘
主　　任　植木寿美子
主　　任　越野　　忍
主　　任　行守　智和
＜調査第三課＞
課　　長　大橋　雅也
総括主幹（第二班長）　柴田　英樹
（発掘調査担当）
主　　幹　氏平　昭則
（発掘調査担当）
主　　任　小嶋　善邦
（発掘調査担当）
主　　事　三輪　宜生
（発掘調査担当）

平成23年度

岡山県教育委員会

教 育 長　竹井　千庫

岡山県教育庁

教育次長　阿部　淳二

文化財課

課　　長　村木　生久
参　　事　光永　真一
総括副参事（埋蔵文化財班長）　宇垣　匡雅
主　　任　石田　爲成
主　　任　一色　　武

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　平井　泰男
次　　長（総務課長事務取扱）　片山　淳司
参　　事　中野　雅美
＜総務課＞
総括副参事（総務班長）　上田　利弘
主　　任　植木寿美子
主　　任　行守　智和
＜調査第二課＞
課　　長　弘田　和司
総括主幹（第一班長）　渡邉恵里子
主　　幹　氏平　昭則
（報告書作成担当）

文化財保護法に基づく提出書類一覧

埋蔵文化財試掘・確認調査の報告

文書番号 日　付	周知・ 周知外	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	包蔵地 の有無	報告者	担当者	期間
岡吉調 第 13 号 H20.5.12	周知	集落跡 南方遺跡	岡山市北区南方１ 丁目 8-42 ほか	60	その他建物 (岡山法務総合庁舎)	有	岡山県古代吉備 文化財センター 所長　藤川洋二	和田　剛	H20.4.24 ～ H20.5.2

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条）

岡山県文書 番号 日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	目的	通知者	期間	主な勧告事項
教文埋 第 450 号 H22.7.15	集落跡 南方遺跡	岡山市北区南方１ 丁目 8-123	5,340.91	その他建物 (岡山法務総合庁舎)	国土交通省中国地方整備局 岡山営繕事務所 所長　綿本香法	H24.1 頃～ 未定	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

岡山県文書 番号　日付	種類および名称	所在地	面積 (㎡)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第 74 号 H22.10.1	集落跡 南方遺跡	岡山市北区南方１ 丁目 8-42 ほか	2,050	その他建物 (岡山法務総合庁舎)	岡山県古代吉備 文化財センター 所長　児仁井克一	柴田英樹 氏平昭則 小嶋善邦 三輪宜生	H22.10.1 ～ H23.3.31

埋蔵文化財発見通知（法第100条第２項）

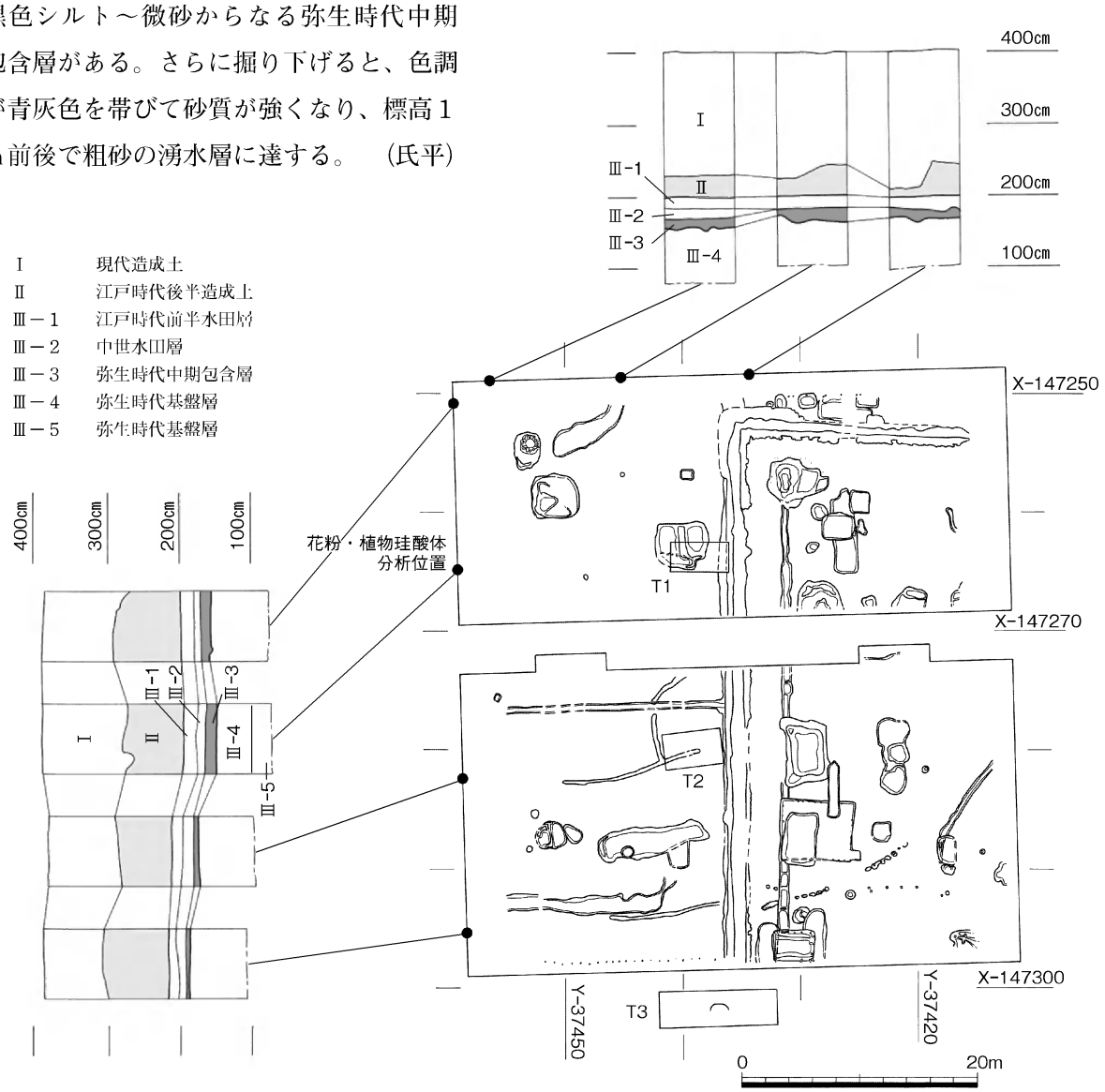
岡山県文書 番号　日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第 203 号 H20.5.2	弥生土器・陶磁器　計整理 箱１箱	岡山市北区南方１ 丁目 8-42 ほか 南方遺跡	H20.4.24 ～ H20.5.2	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	岡山地方裁判所 長　一宮和夫	岡山県古代吉備 文化財センター
教文埋 第 1362 号 H23.3.11	土器・陶磁器・金属器・石器・ 木器・土製品・ガラス製品等 計整理箱 75 箱	岡山市北区南方１ 丁目 8-42 ほか 南方遺跡	H22.10. 1 ～ H23.3.11	岡山県教育委員会 教育長　門野八洲雄	東京都千代田区 霞ヶ関 1-1-1 法務省	岡山県古代吉備 文化財センター

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査区の概要

調査区は、建物建築部分に設定し、渡り廊下でつながる南北棟間約４ｍの帯状部分を挟む形である。確認調査Ｔ３付近は確認調査以降に設計が変更になり、調査対象外となった。

調査区の土層は、地表から深さ１～1.8ｍまで第Ⅰ層の戦後と現代の造成土が存在する。その下に第Ⅱ層の江戸時代後半の武家屋敷に伴う造成土が存在する。調査区西壁で厚さ0.9ｍと顕著だが、確認調査トレンチより東はほとんど残っていない。その下標高1.7～２ｍに、第Ⅲ－１、２層の灰色シルト～微砂層が存在する。中世～江戸時代前半の包含層で、水田層の可能性が高い。その下に第Ⅲ－３層の黒色シルト～微砂からなる弥生時代中期包含層がある。さらに掘り下げると、色調が青灰色を帯びて砂質が強くなり、標高１ｍ前後で粗砂の湧水層に達する。　（氏平）

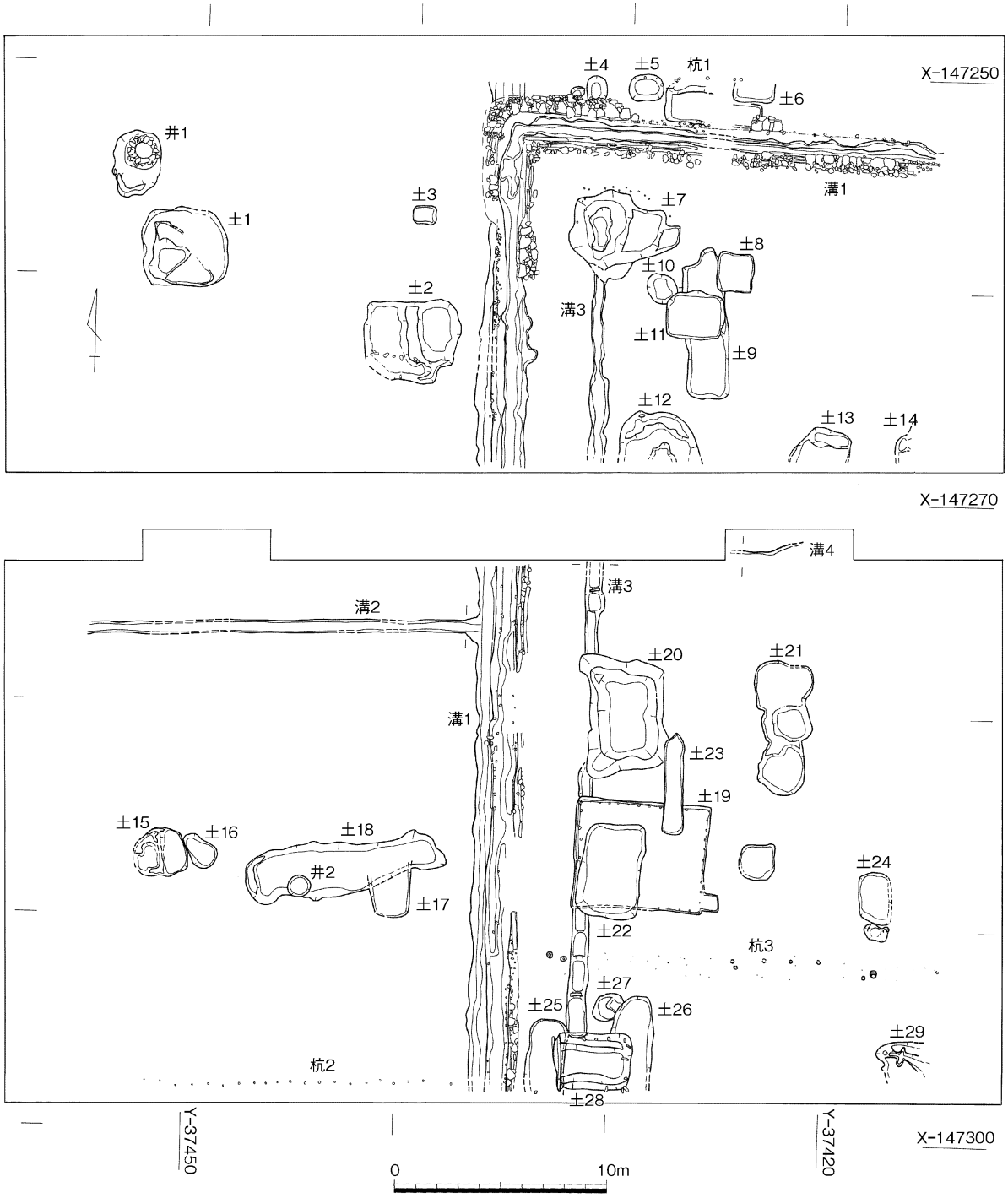


第６図　検出遺構全体図と土層柱状図（1/600・高さ1/100）

第２節　江戸時代の遺構と遺物

１　概要

江戸時代の遺構は、井戸２基、土壙34基（内本文記載は29基）、溝３条、杭列３基である。溝１は改修により大きく３時期に区分できる。最も古い溝１Ａは２区から１区へ直線に南北に延びるが、次



第７図　江戸時代遺構全体図（1/300）

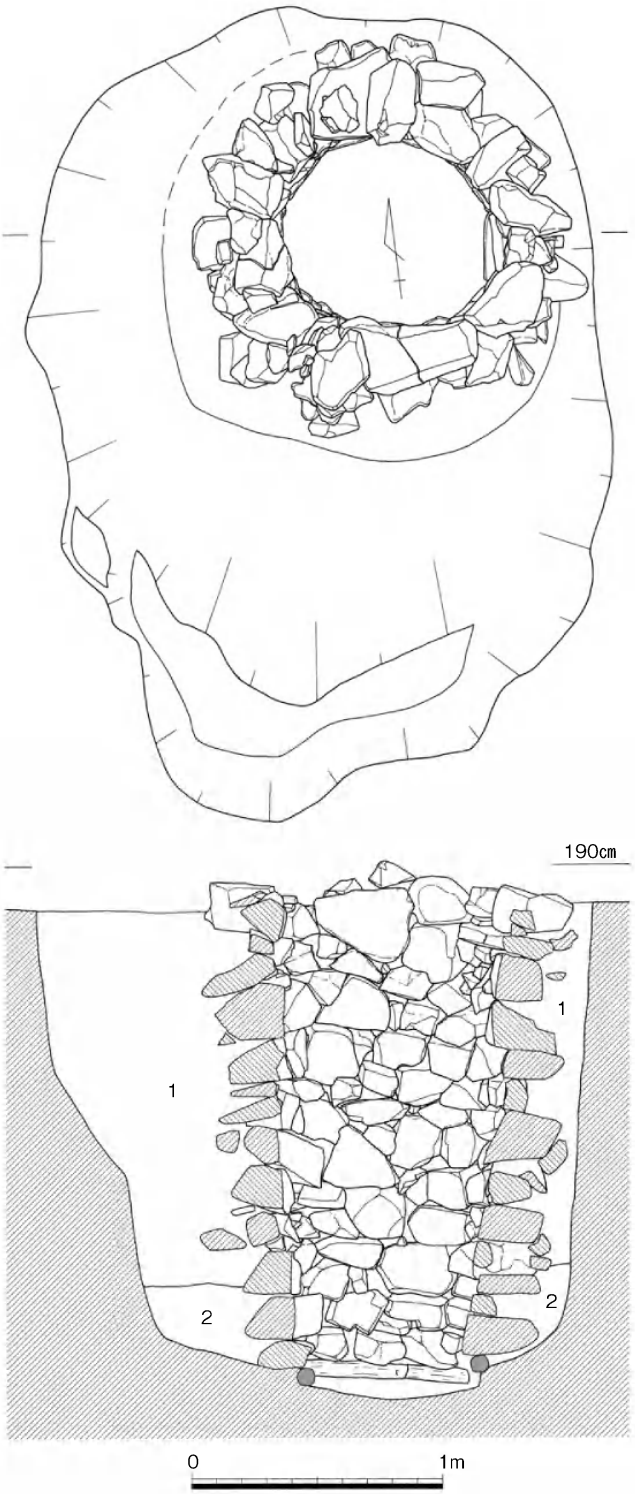
の石垣を伴う溝１Ｂからは１区北端で東に折れる。２区の溝２は溝１に直交して合流し、溝３は溝１の東側に並行する。杭列は１区北端に杭列１、２区南西端に杭列２、２区東側に杭列３といずれも東西方向である。溝４は溝３と同様東西方向の溝であろう。土壙は１区東の土壙４～６が溝１Ｂより古く、残りは溝１の東西に位置する。（氏平）

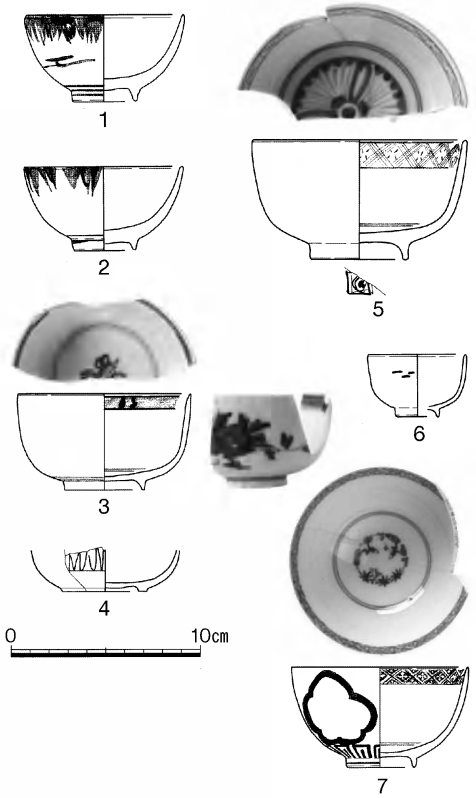
２　井戸

井戸１（第７～10図、巻頭図版３、図版１・６）

１区北西部に位置している石組みの井戸である。内法は長軸80㎝、短軸72㎝の円形を呈し、検出面からの深さは約210㎝を測る。井戸底には主に２～３㎝大の河原石が約20～30㎝の厚さで敷き詰められていた。この敷石層から上層は、井戸廃棄時の埋め土であり、遺物の多くはこの埋め土中から出土している。

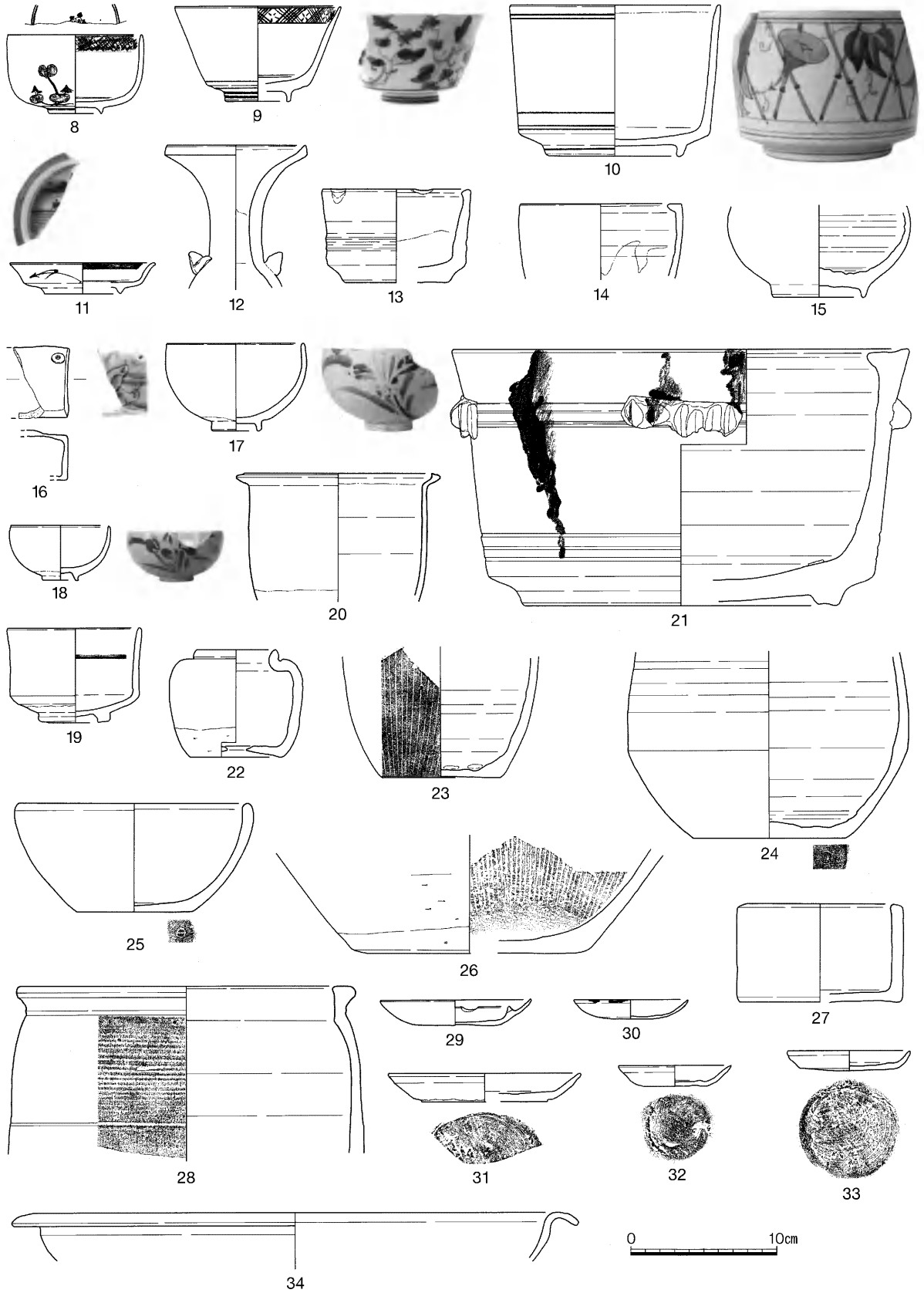
井戸掘削地点の土層堆積状況は、検出





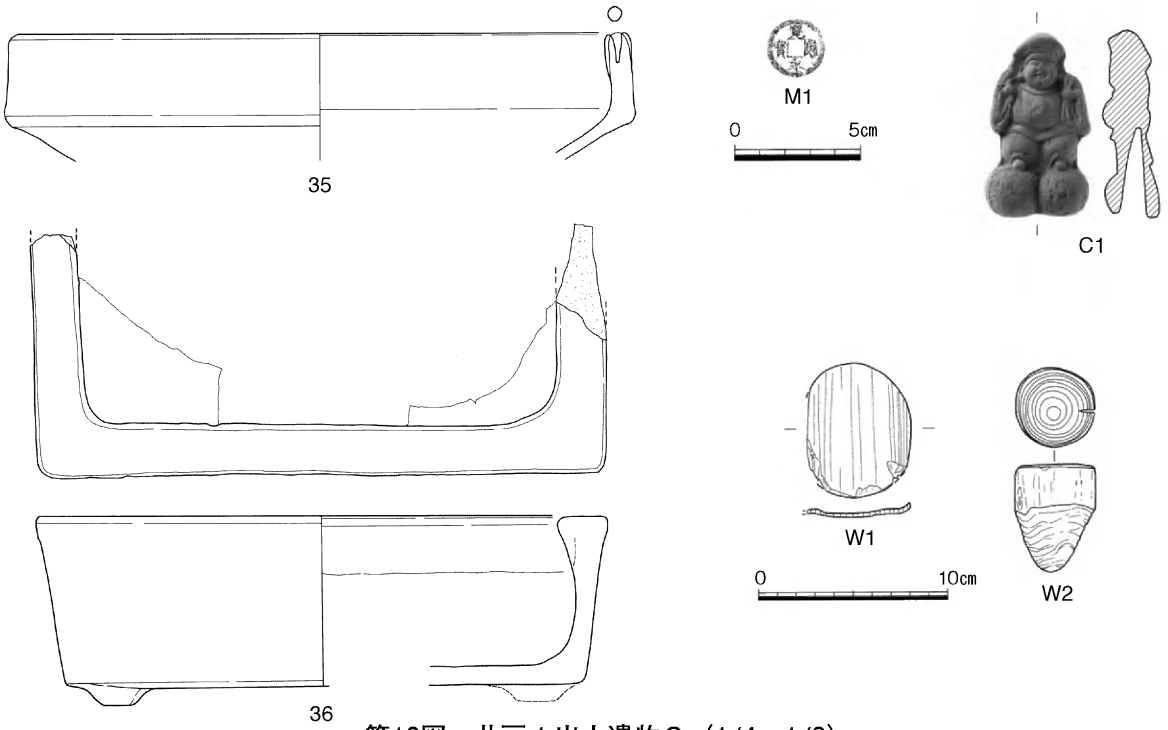
1　黒褐色（10YR4/2）粘質微砂
　黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂等のブロック土混
2　２～３㎝大の河原石と粗砂の層

第８図　井戸１（1/30）・出土遺物１（1/4）



第９図　井戸１出土遺物２（1/4）

面から標高0.4ｍ付近までが粘質土であり、それより下層が細～粗砂であった。この砂層中の標高0.1ｍ付近から湧水が認められる。井戸掘り方は長軸321㎝、短軸225㎝の長楕円形を呈している。南側にテ



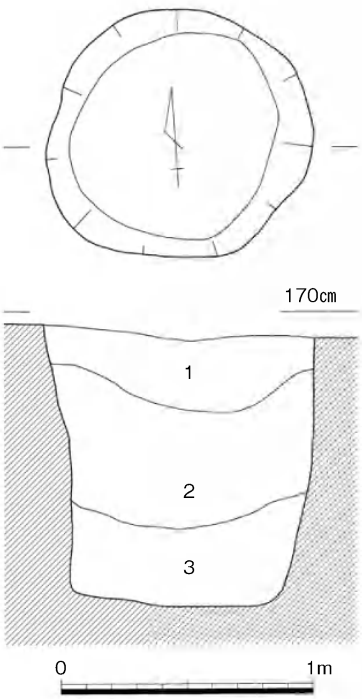
第10図　井戸１出土遺物３（1/4・1/3）

ラス面があり、そこから標高約－0.1ｍまで急角度で掘削されている。石組みは井戸掘り方底面に径約10㎝、長さ約50㎝の丸太材を五角形に組み、その上に最下段の石を据えて作られている。なお、丸太材は石積みの自重で地山内に沈み込んでいた。石組みの裏込めは、最下段から２～３段目付近、つまり周囲が砂層である高さまでは２～３㎝大の河原石で行い、それより上層は井戸掘り方掘削時の排土を使用しているようである。裏込め土からは遺物の出土がほぼ皆無であった。出土遺物から、井戸の廃棄時期は18世紀末～19世紀と考えられる。

（小嶋）

井戸２（第７・11図）

２区西側で、土壙18と重複する。当初土壙18の一部と考えていたが、掘り進めていく段階で土壙18と埋土が異なり、より新しい遺構と認識した。埋土は第２・３層が基盤と似た土であった。掘り方の底面は砂層に達し、掘削後は湧水があった。出土遺物は染付猪口、備前焼陶版など少量である。この井戸は、土壙18の後、19世紀半ば以降に埋没したと考える。　（氏平）



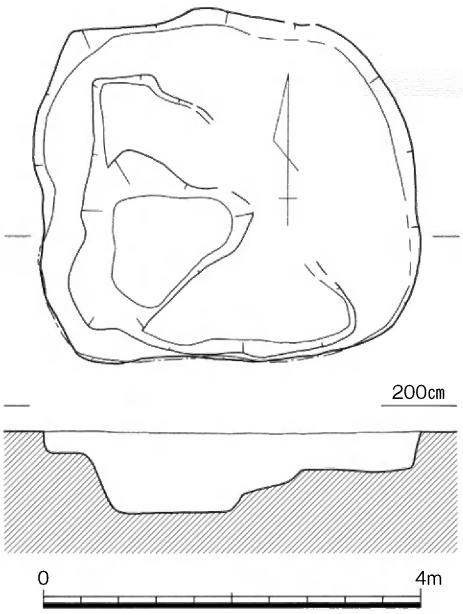
1　にぶい黄褐色（10YR5/3）細～粗砂
2　灰黄褐色（10YR5/2）粘質細砂
3　灰色（2.5Y4/1）粘質細～粗砂

第11図　井戸２（1/30）

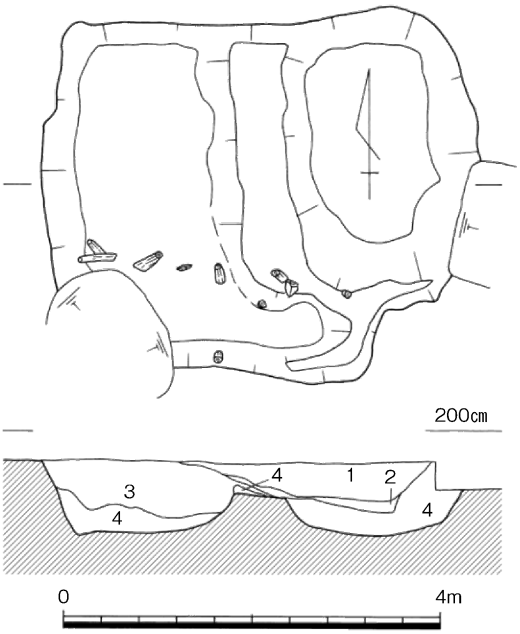
３　土壙

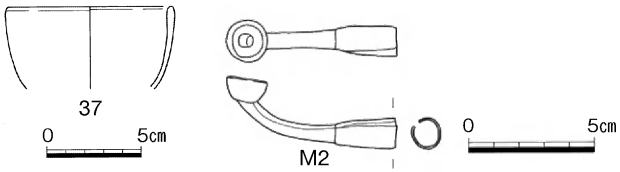
土壙１（第７・12図、図版６）

１区西端で検出した土壙で、井戸1の南東に近接する。遺構内の北東部分はコンクリートパイルによって損壊している。検出面での掘り方平面形は隅丸方形を呈し、一辺400㎝を測る。北東部分の検出面下40㎝に平坦面が形成され、南西部分には平面



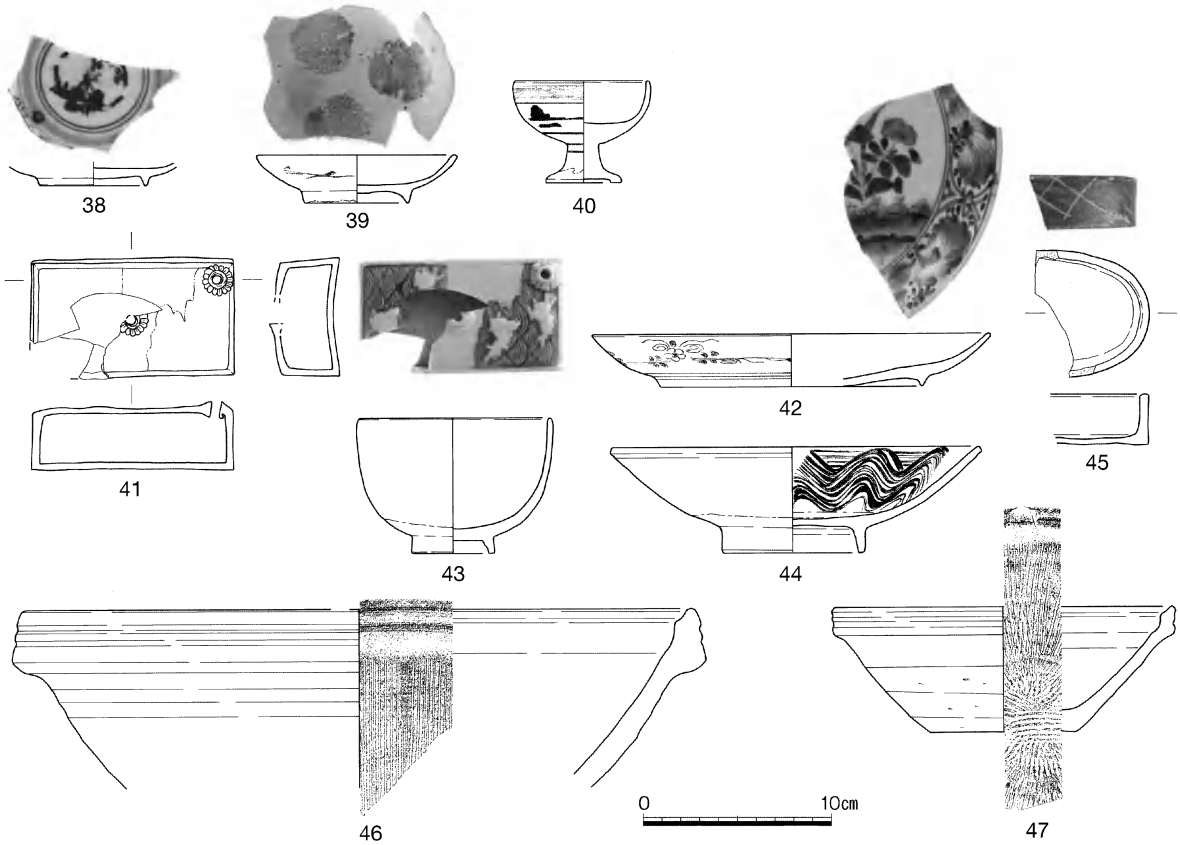
オリーブ灰色（2.5G5/1）粗砂　基盤層粘土ブロック含む



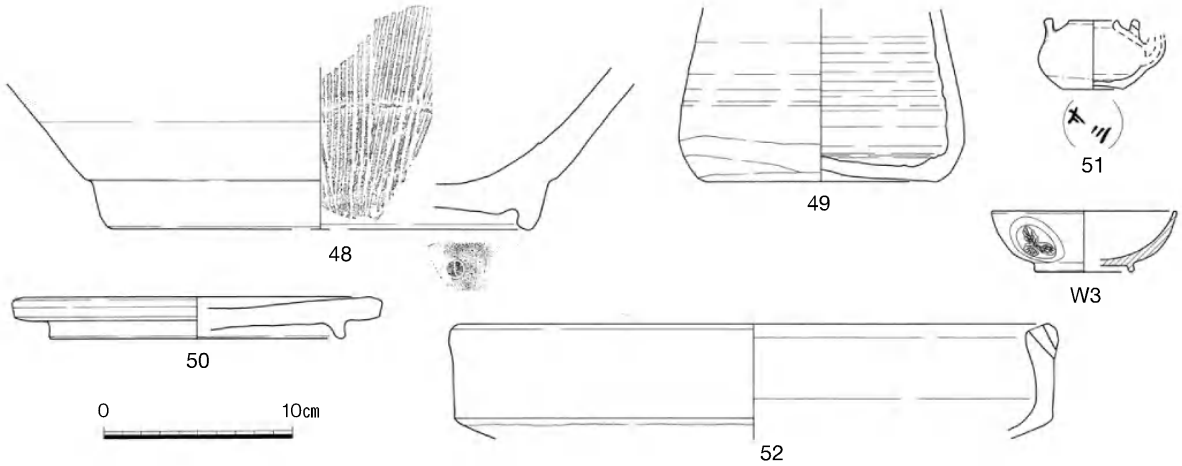


第12図　土壙１（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質細～粗砂　腐植土含む
2　灰色（7.5Y4/1）シルト～微砂
3　灰色（7.5Y5/1）細～粗砂
4　灰色（7.5Y5/1）シルト～粘土



第13図　土壙２（1/80）・出土遺物１（1/4）



第14図　土壙２出土遺物２（1/4）

不整形を呈する深くなる部分があり、検出面からの深さは86㎝を測る。遺構内の埋土は粗砂で、出土遺物は少量であった。37は陶器椀、Ｍ２は真鍮製の煙管である。遺構の時期は18世紀後半～19世紀前半と考える。（柴田）

土壙２（第７・13・14図、巻頭図版３、図版６）

１区中央で検出した土壙である。土壙１の東７ｍに位置し溝１の西に近接する。検出面での掘り方平面形は東西方向に長い長方形を呈し、長辺463㎝、短辺383㎝を測る。２基の土壙が並列するような形態であり、検出面下26㎝の中央部分が土手状になる。東西の底面は平坦で検出面からの深さは77㎝を測る。南東隅から西への延長線上には長さ150㎝の杭列が施されている。

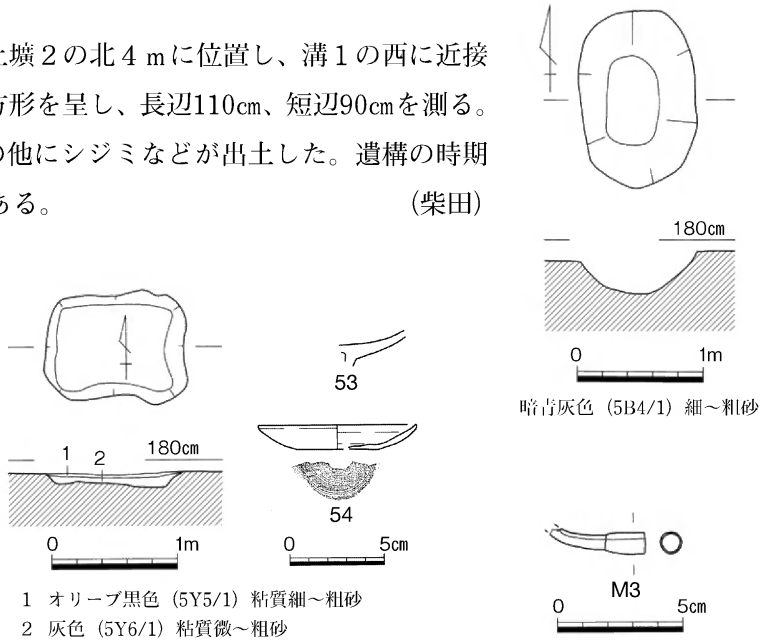
磁器では皿38・42、輪花皿39、仏飯器40、水滴41、陶器では椀43、鉢44、皿45、擂鉢46～48、壺49、蓋50、土師器では関西系の焙烙52を図示した。41は青海波の上を跳ねる兎の意匠が施され、底部内面には布目が残る。土瓶51は玩具で底部外面には墨書が認められる。内面朱塗りの漆椀Ｗ３の外面には丸に三つ柏の家紋が銀泥で施される。遺構の時期は19世紀代と考える。（柴田）

土壙３（第７・15図）

１区中央で検出した土壙である。土壙２の北４ｍに位置し、溝１の西に近接する。検出面での掘り方平面形は長方形を呈し、長辺110㎝、短辺90㎝を測る。埋土中からは陶器皿53、土師器皿54の他にシジミなどが出土した。遺構の時期は18世紀後半～19世紀代の可能性がある。（柴田）

土壙４（第７・第15図、図版１・６）

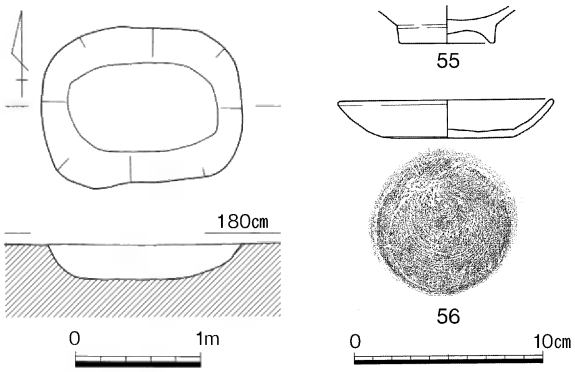
１区東側で、溝１Ｂ構築時の造成土で埋められていた。埋土は基盤層よりかなり砂質が強い土の単層である。土壙５・６など周辺の土壙と一連で、時期もあまり変わらないと考える。出土遺物はＭ３の煙管雁首だけで、その形状は17世紀後半～18世紀初頭に位置づけられる。（氏平）



第15図　土壙３・４（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙５（第７・第16図、図版１）

１区東側で、溝１Ｂ構築時の造成土で埋められていた。埋土は土壙４・６と類似する土であり、それらと一連で、時期もほぼ同じと考える。出土遺物はごく少量で、陶器椀55とほぼ完形の56土師器皿がある。55は全面施釉で畳付に三か所の砂目があり、17世紀前半の唐津焼であろう。　（氏平）

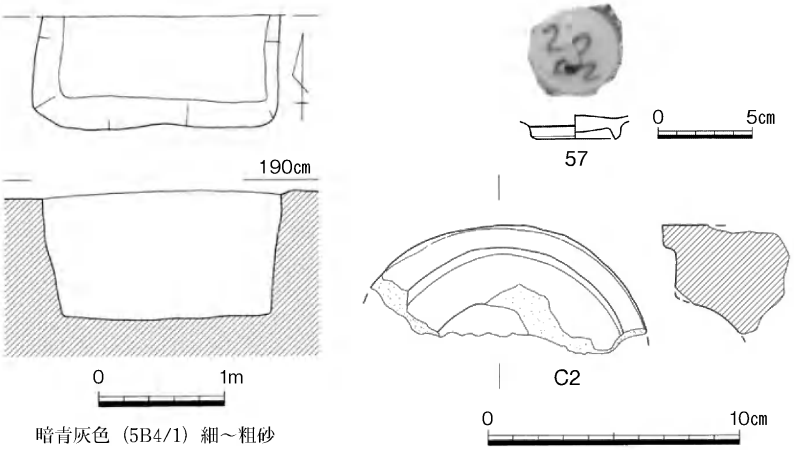


暗青灰色（5B4/1）細～粗砂

第16図　土壙５（1/60）・出土遺物（1/4）

土壙６（第７・第17図、図版１・６）

１区東側で、溝１より古い。埋土は土壙４・５と類似する。方形の掘り方で、壁面も垂直に近い。北側は調査区外になる。土壙４・５など周辺の土壙と一連で、時期も同じと考える。出土遺物は少量で、染付・陶磁器片、丸瓦などがある。Ｃ２は土製鋳型で、溝１Ｃ25の土製鋳型と組み合うが、内型部分の大きさは異なる。内型、つまり製品の形や大きさは異なるが鋳型の大きさは同じことが想定できる。　（氏平）



暗青灰色（5B4/1）細～粗砂

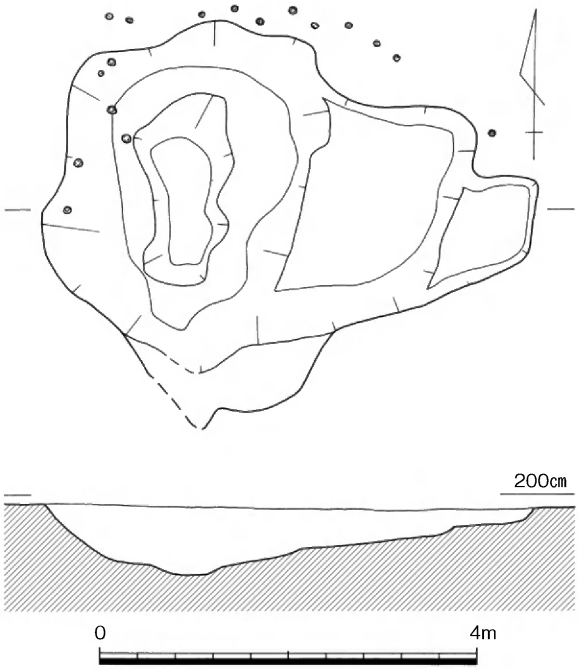
第17図　土壙６（1/60）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙７（第７・18・19図、図版１・６）

１区中央で検出した土壙で、溝３を切っている。土壙３の東７ｍに位置し、溝１の東に近接する。検出面での掘り方平面形は不整楕円形を呈し、長辺520㎝、短辺428㎝を測る。

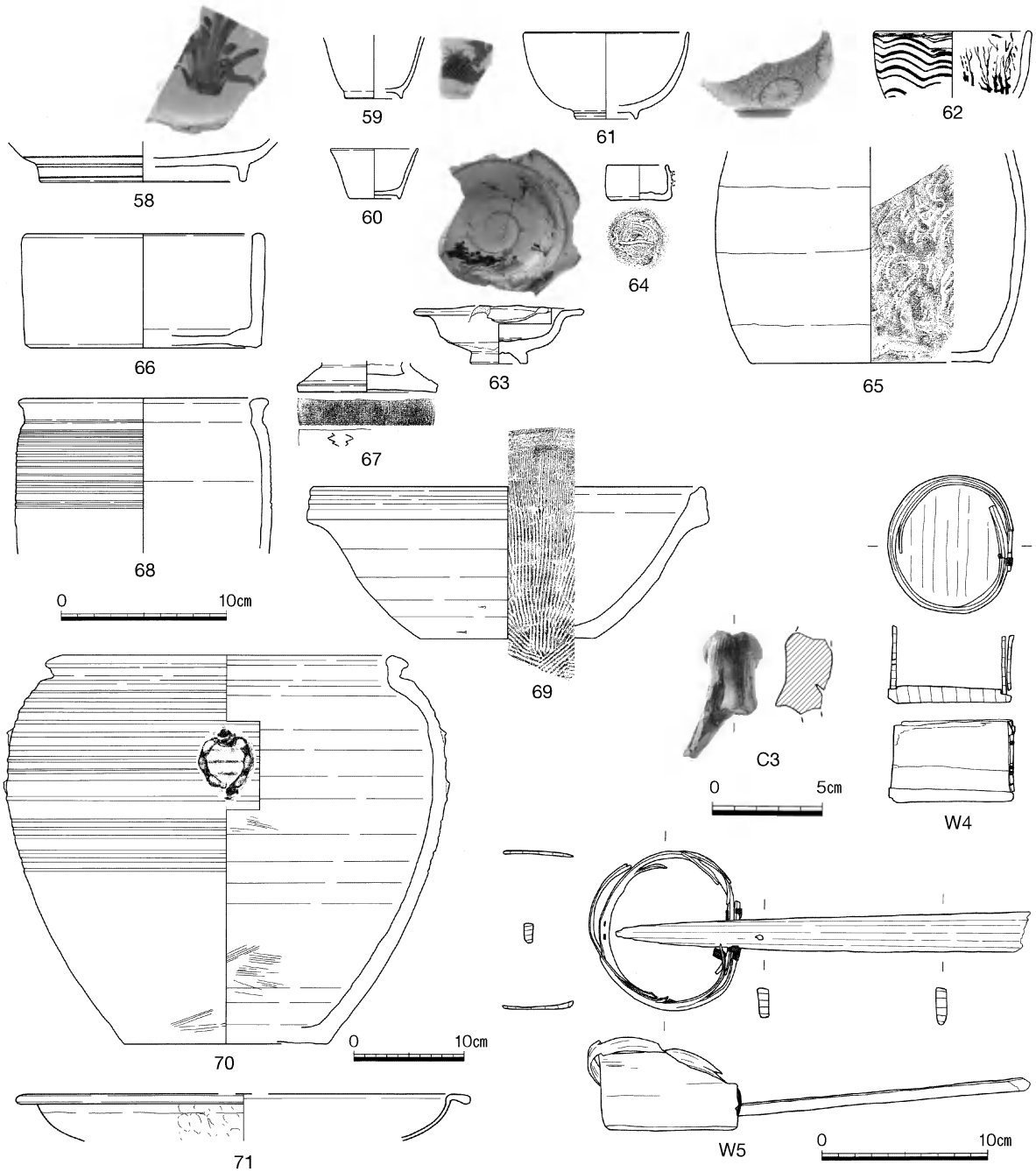
掘り方断面は西側ですり鉢状を呈し、検出面からの深さは72㎝を測る。底面は東に向かって緩やかな傾斜を持ちながら階段状に浅くなり、上端の幅も東に向かって段階的に狭くなる。掘り方の北縁と西縁には、沿うようにＬ字形に杭列が施される。

磁器では皿58、猪口59・60、椀61、陶器では椀62、皿63、餌入れ64、瓶65、備前焼では匣鉢66、花立67、甕68、擂鉢69、甕70、土師器では焙烙71を図示した。60は体部から口縁部がまっすぐにのびる。62は刷毛目文様が認められる。65は灰釉がかかり、内面には同心円文の当



暗灰色（N3/0）粘質土

第18図　土壙７（1/80）



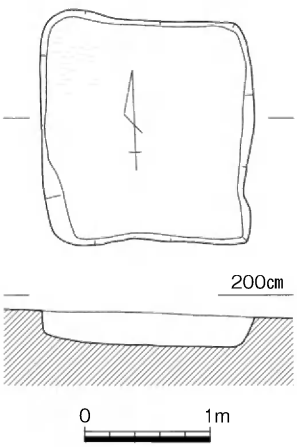
第19図　土壙７出土遺物（1/6・1/4・1/3）

て具痕跡が認められる。71は口縁部が外へ屈曲する瀬戸内系の焙烙である。Ｃ３は陶製人形で欠損部分が多いが猿とみられる。Ｗ４・５は杓子でＷ４は黒塗りである。

62・65のような時期がやや古い遺物も認められるが、その他の遺物や溝３との切り合い関係などから遺構の時期は18世紀後半～19世紀代の可能性がある。（柴田）

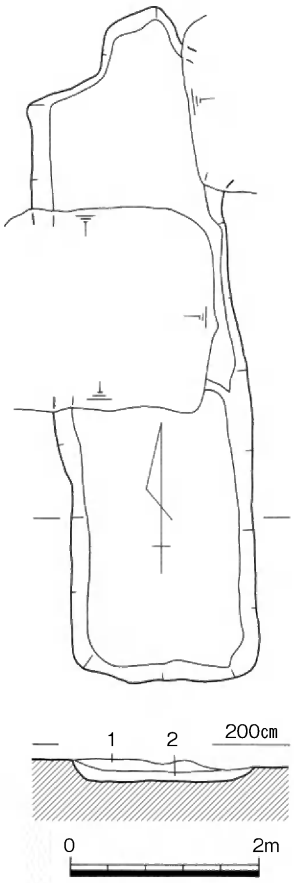
土壙８（第７・20図）

１区東側で検出した土壙で、土壙９を切っている。土壙７の東２ｍに位置する。検出面での掘り方平面形は方形を呈し、一辺186㎝を測る。検出面からの深さは浅く20㎝程度である。出土遺物は鉄滓MNK-5（付載1参照）ほかで少量であった。遺構の時期は19世紀代の可能性がある。（柴田）

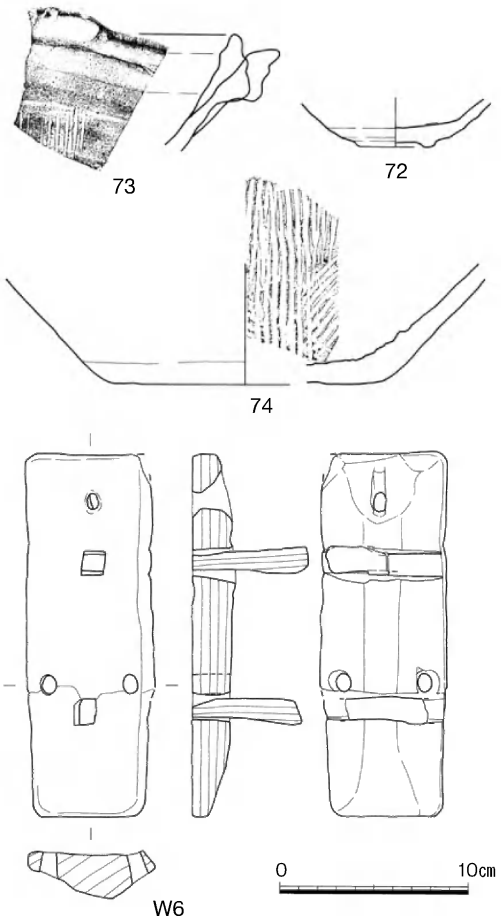


オリーブ黒色（7.5Y3/2）粘性砂質土

第20図　土壙８（1/60）



1　暗青灰色（10BG4/1）砂質土
2　暗緑灰色（10GY4/1）粘質土



第21図　土壙９（1/80）・出土遺物（1/4）

土壙９（第７・21図、図版１・６）

１区東側で検出した土壙で、土壙８・11に切られる。掘り方平面形は長方形を呈し、長辺710㎝、短辺192㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが、南側半分がわずかにくぼむ。埋土は灰色を呈し、周囲の土壙と異なる。出土遺物は少量であった。

陶器では皿72、備前焼の擂鉢73・74、下駄Ｗ６を図示した。遺構の時期は17世紀後半以降の可能性がある。（柴田）

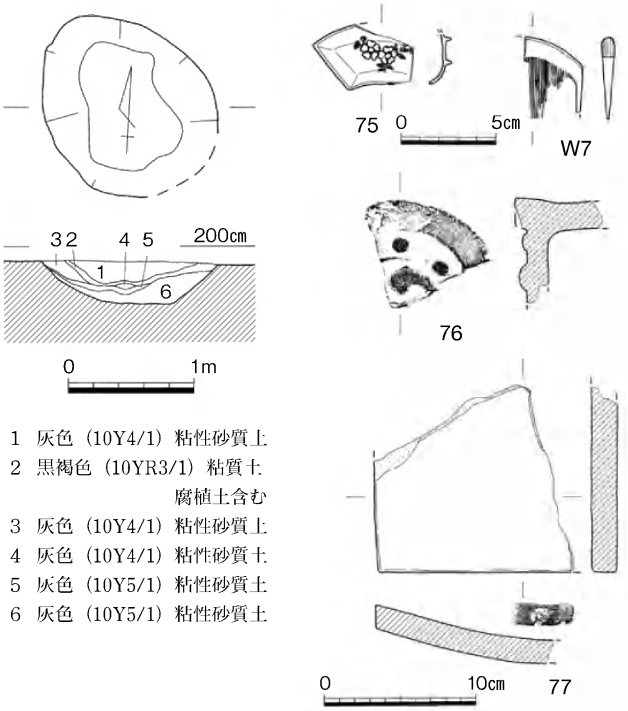
土壙10（第７・22図、図版１）

１区東側で検出した土壙で、土壙11に切られる。平面形は楕円形を呈し、長径140㎝を測る。検出面からの深さは34㎝を測る。断面形は皿形を呈する。

磁器皿75、軒丸瓦76、平瓦77、櫛Ｗ７を図示した。77には花形の打刻がある。遺構の時期は18世紀後半以降の可能性がある。（柴田）

土壙11（第７・23～26図、巻頭図版３・４、図版１・６・７）

１区東側で検出した、平面が方形の土壙で

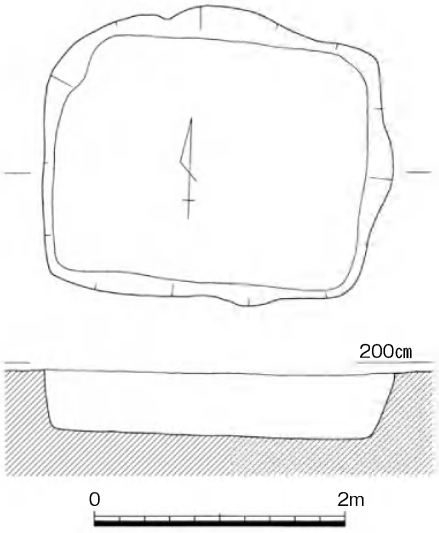


1　灰色（10Y4/1）粘性砂質土
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土
　　腐植土含む
3　灰色（10Y4/1）粘性砂質土
4　灰色（10Y4/1）粘性砂質土
5　灰色（10Y5/1）粘性砂質土
6　灰色（10Y5/1）粘性砂質土

第22図　土壙10（1/60）・出土遺物（1/5・1/4）

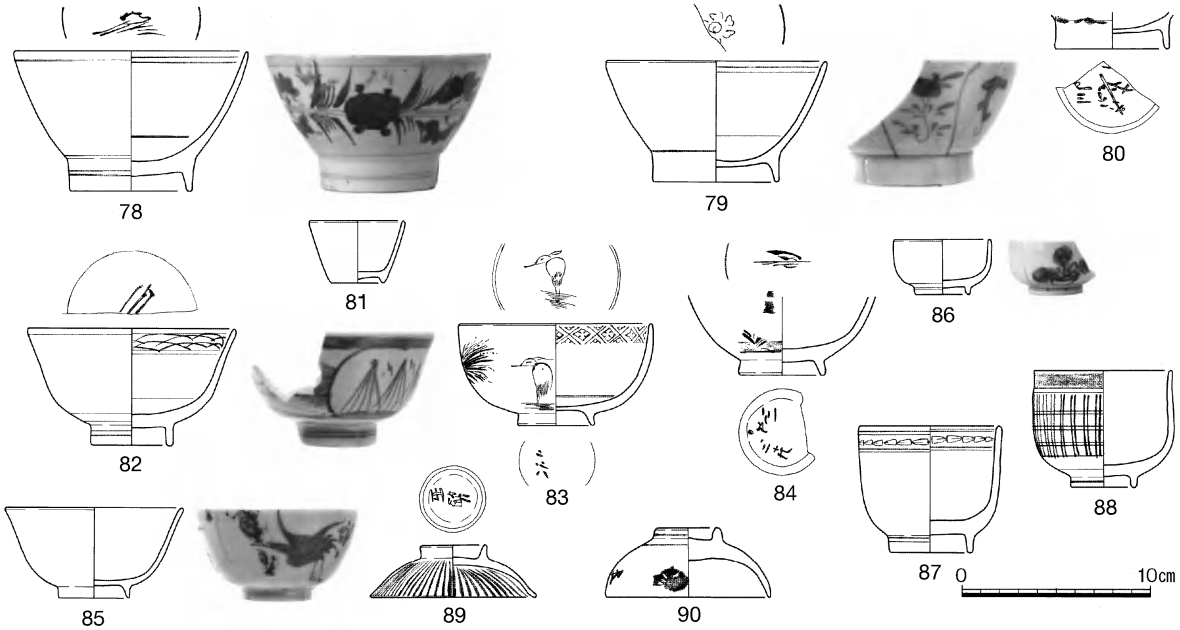
ある。壁面は比較的まっすぐに掘り込まれ、底面もほぼ水平である。土壙９・10と切り合い関係があり、平面で検討した結果、土壙９・10より新しいことがわかった。埋土は検出面から最大50㎝の深さで残り、細～粗砂と円礫と有機物が混ざった土であった。

出土遺物は今回調査の土壙中最も多く、整理箱で９箱分になる。磁器は染付が多く、器形では広東碗78～80、端反碗82・85、深めの筒丸椀87・88、文様は簡略化された見込みの松竹梅93・96があり、19世紀前半～中頃の特徴と言える。さらに、80・83・84・88・89・91・93・95～97・99は焼継で補修されている。これらの中に焼継素材を用いて裏面に数字を書くものがあり、83は「二六」、84は「三九」、91は「一九二十」、95は「カ二七」と読める。93・99の裏面の文字は赤色である。98・100の皿は蛇ノ目凹形の高台で、100は素地がにぶい黄橙色である。青磁・白磁は数が少ない。青磁植木鉢105はおそらく兵庫県の三田青磁であろう。施釉陶器では、椀の他土瓶、鍋、灯明具などがあり、椀112は信楽産である。142は箱庭道具の庭園片で、３あるいは４脚になるものであろう。Ｃ４は人形で陶質、透明釉が掛かる。焼締め陶器では、擂鉢132は備前焼、133は堺・明石系であろう。132は19世紀前半に位置づけられる。瓦質焜炉141は二口になるもので、向かって右側１／４が残存していた。焚き口を上にした状態で、側面に「三谷様」、改行して「七(以下不明)」とヘラ書きされている。類似の焜炉は香川県郡家一里塚遺跡などに出土例があり、徳島県例を調べた日下正剛氏によるとⅢＡ類に分類され、19世紀中頃以降に見られる(註)。



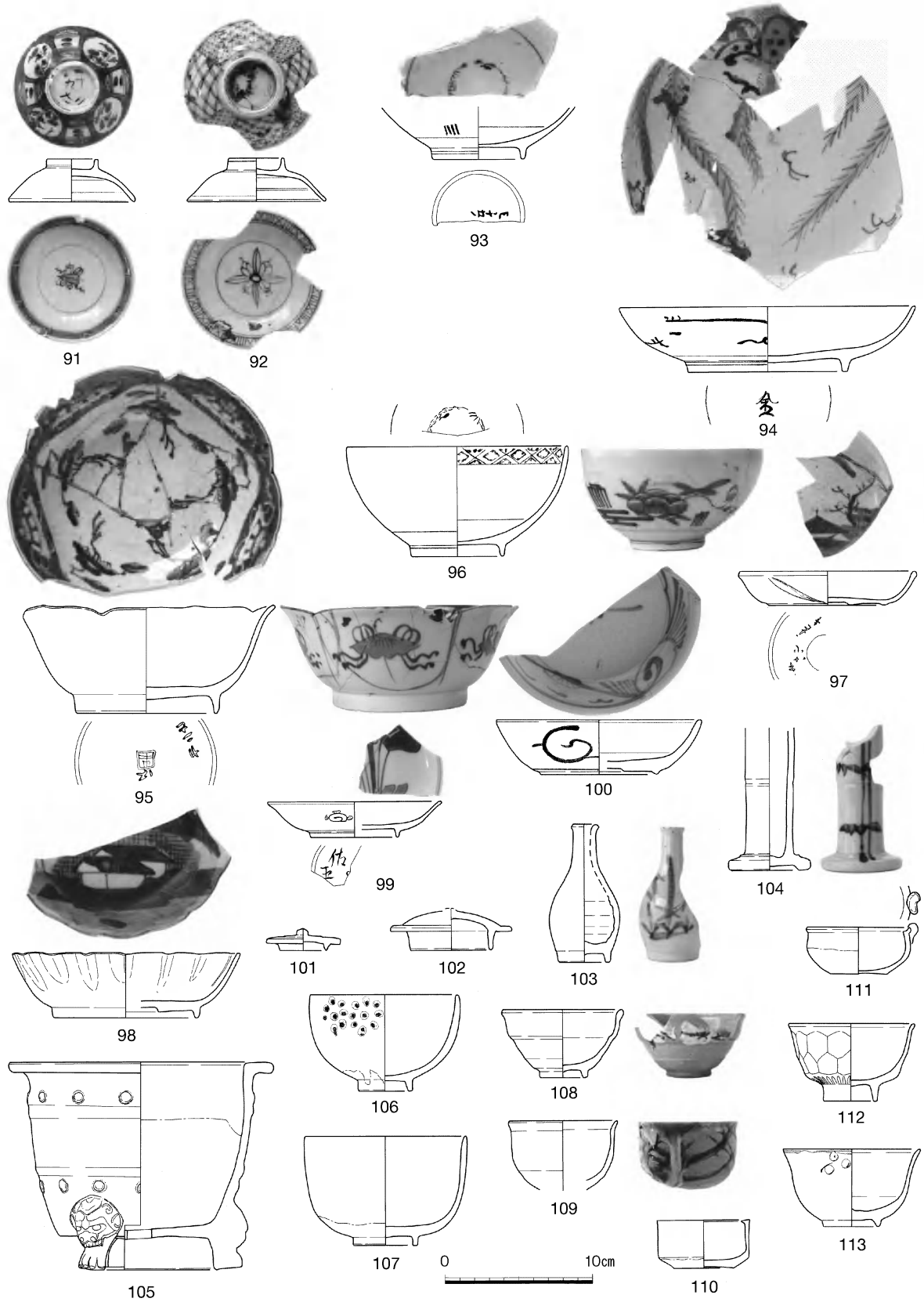
黒色（10YR2/1）砂質土

これら遺物から、この土壙は19世紀中頃以降に埋没した可能性が高い。　（氏平）

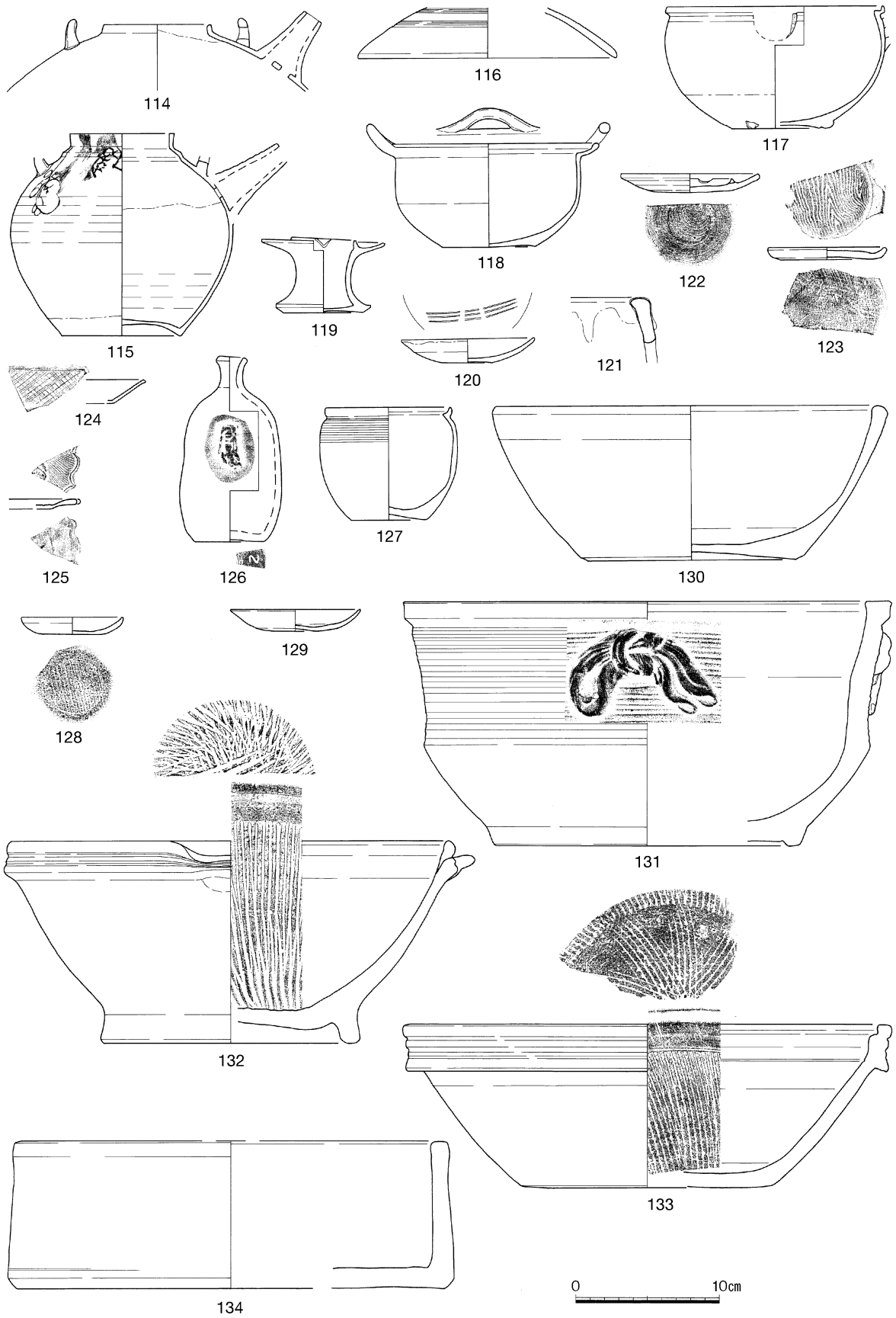


第23図　土壙11（1/60）・出土遺物１（1/4）

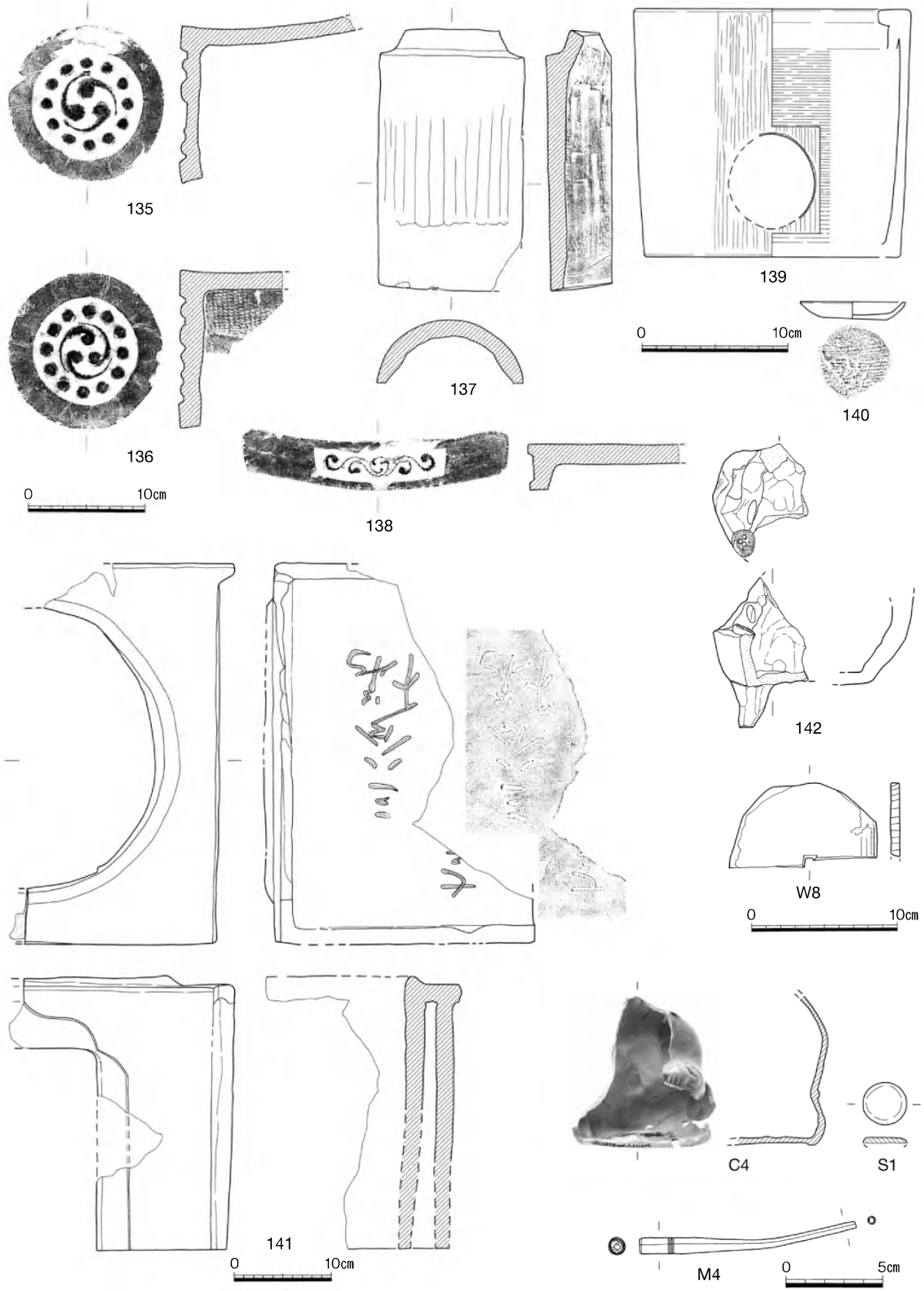
註　日下正剛「徳島城下町出土の土製火鉢・焜炉類」『論集　徳島の考古学』2002



第24図　土壙11出土遺物２（1/4）



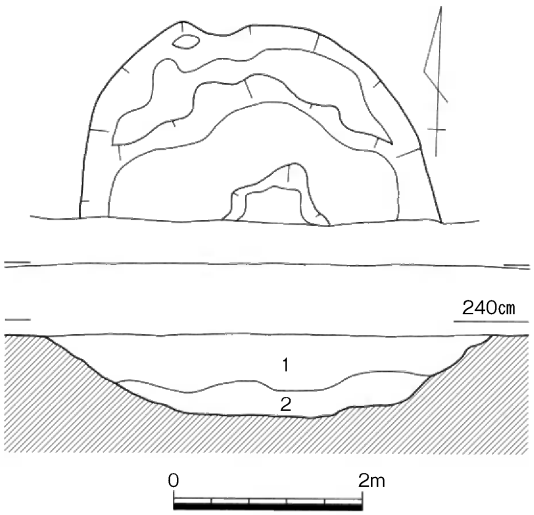
第25図　土壙11出土遺物３（1/4）



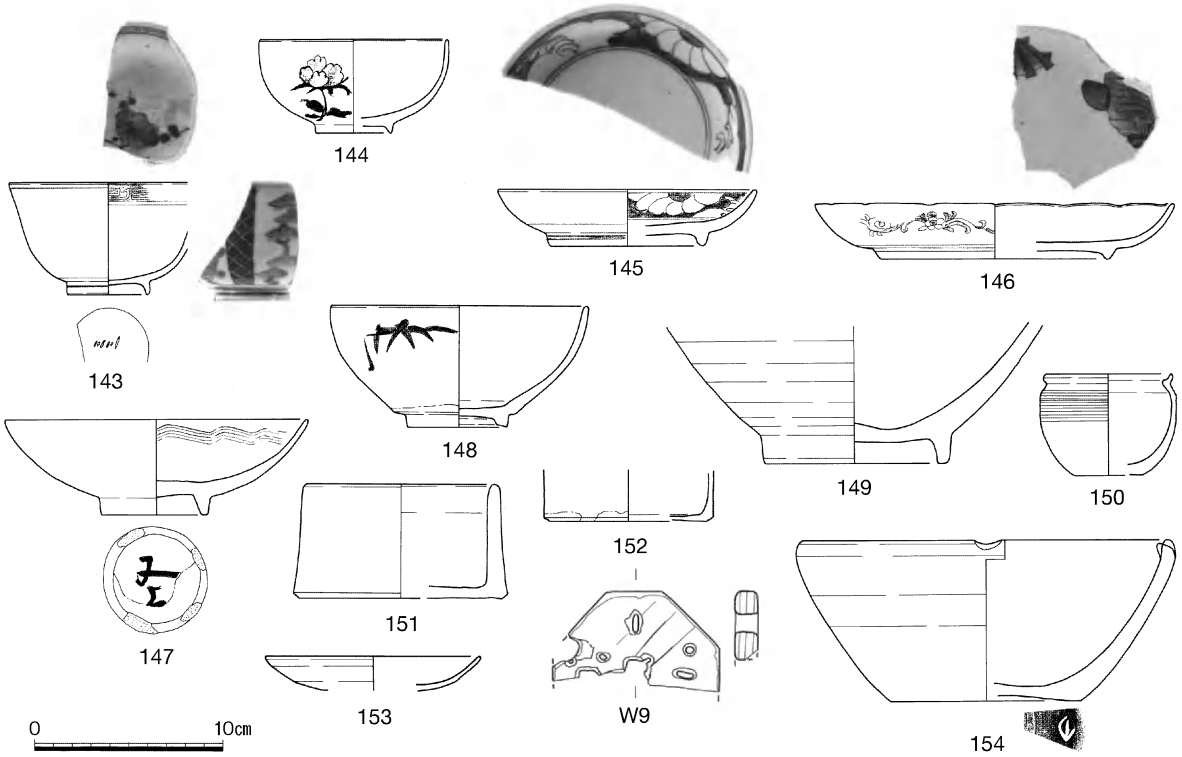
第26図　土壙11出土遺物４（1/6・1/5・1/4・1/3）

土壙12（第７・27図、図版１）

１区南端で検出した土壙で、南側は１・２区境の土手内で調査できなかった。掘り方は断面がほぼ椀形であるが、壁面・底面は凹凸で不整形である。土層のうち第１層は細分可能で、東側に有機物を多く含む部分があり、東から西へ順に埋まったように見える。第２層は均質な粘土である。出土遺物はあまり多くないが、染付の端反碗**143**は焼継の補修があり、裏面に「三三」と書かれている。**147**は底面に墨書があり、**148**は陶器椀で染付がある。備前焼は小壺**150**、鉢**154**、匣鉢**151**・**152**、皿**153**などである。土壙の埋没時期は19世紀前半以降だろう。　（氏平）



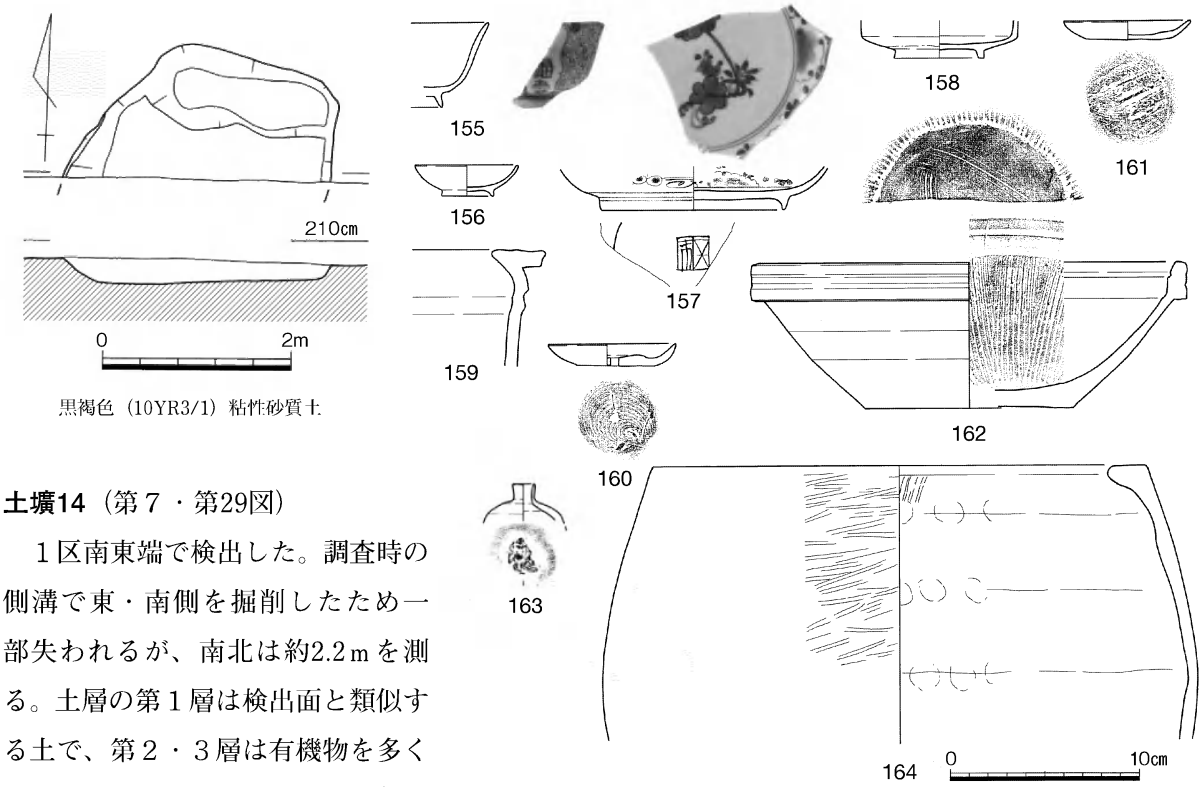
1　黒褐色（10Y2/2）砂質土　層下面に有機物堆積
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘土



第27図　土壙12（1/80）・出土遺物（1/4）

土壙13（第７・第28図）

１区南端で検出した、平面も断面も不整形の土壙である。南側は調査区外のため調査できなかった。埋土は有機物を多く含む黒色の土である。上部が削平されているためか、出土遺物は少量であった。図示以外に染付、白磁碗、肥前陶器の刷毛目片、備前焼擂鉢・甕片、土師器などがあった。染付碗**155**は端反碗で、染付皿**157**は銘款などより18世紀後半に位置づけられる。また擂鉢**162**は内面胴部のスリメを見込みで止めている。明石・堺系の擂鉢であろう。遺構の埋没時期は、**155**などより19世紀前半以降であろう。　（氏平）



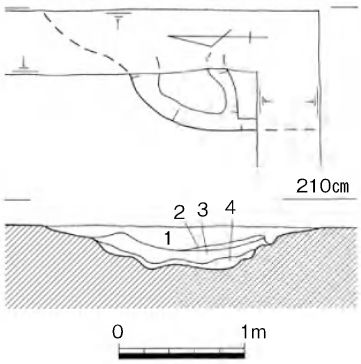
第28図　土壙13（1/80）・出土遺物（1/4）

土壙14（第７・第29図）

１区南東端で検出した。調査時の側溝で東・南側を掘削したため一部失われるが、南北は約2.2ｍを測る。土層の第１層は検出面と類似する土で、第２・３層は有機物を多く含む黒色系の土で、第４層は基盤層と似た土であった。遺物は出土していない。　（氏平）

土壙15・16（第７・第30図、巻頭図版４、図版７）

２区西端で検出した、楕円形の土壙である。２つの土壙として別々にして扱ったが、元は一体の土壙であった可能性が高い。埋土はおおむね東から西へ堆積し、第１～３層が黒色系の有機物の多い土、第４・５層が基盤層に似る均質な砂質土であった。出土遺物は、土壙15からの出土遺物が多いものの全体として少量である。図示したのは土壙15出土遺物で、掲載遺物以外に白磁碗、陶器肥前刷毛目皿、備前焼擂鉢片、土師器灯明皿などがある。碗**165**は赤・金を用いる色絵である。馬の絵などを金で輪郭線を描いている。染付碗**166**は土壙17出土のものと接合した。埋没時期は19世紀前半以降であろう。　（氏平）

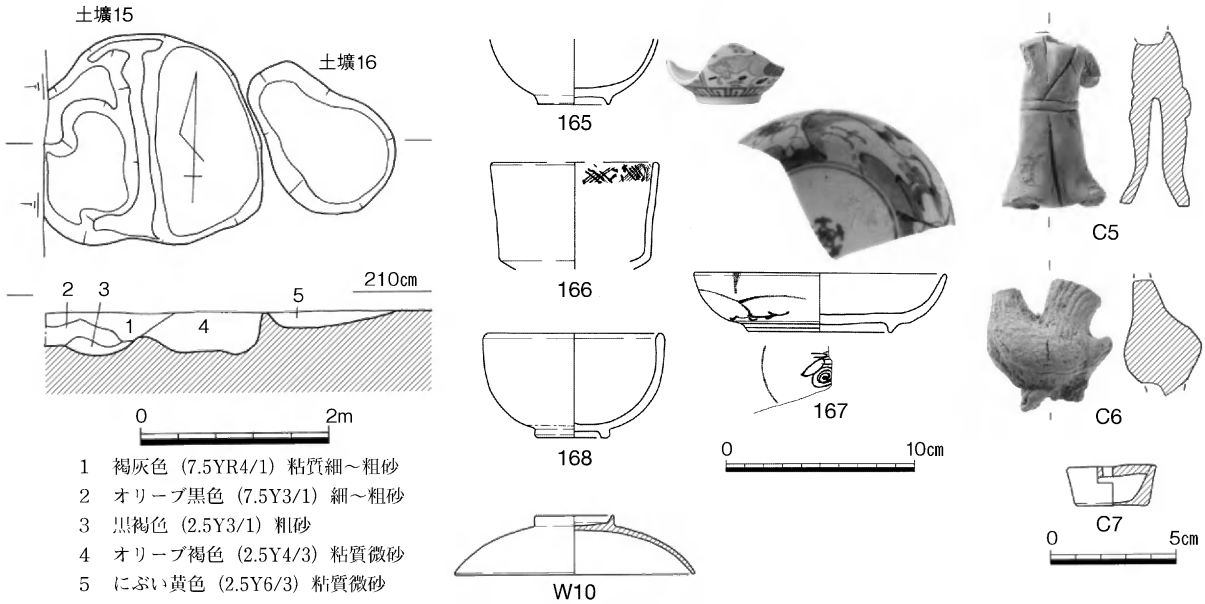


1　褐色（10YR4/4）砂質土
2　黒褐色（2.5Y3/1）粗砂
3　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質土
4　オリーブ灰色（10Y4/2）粘質土

第29図　土壙14（1/60）

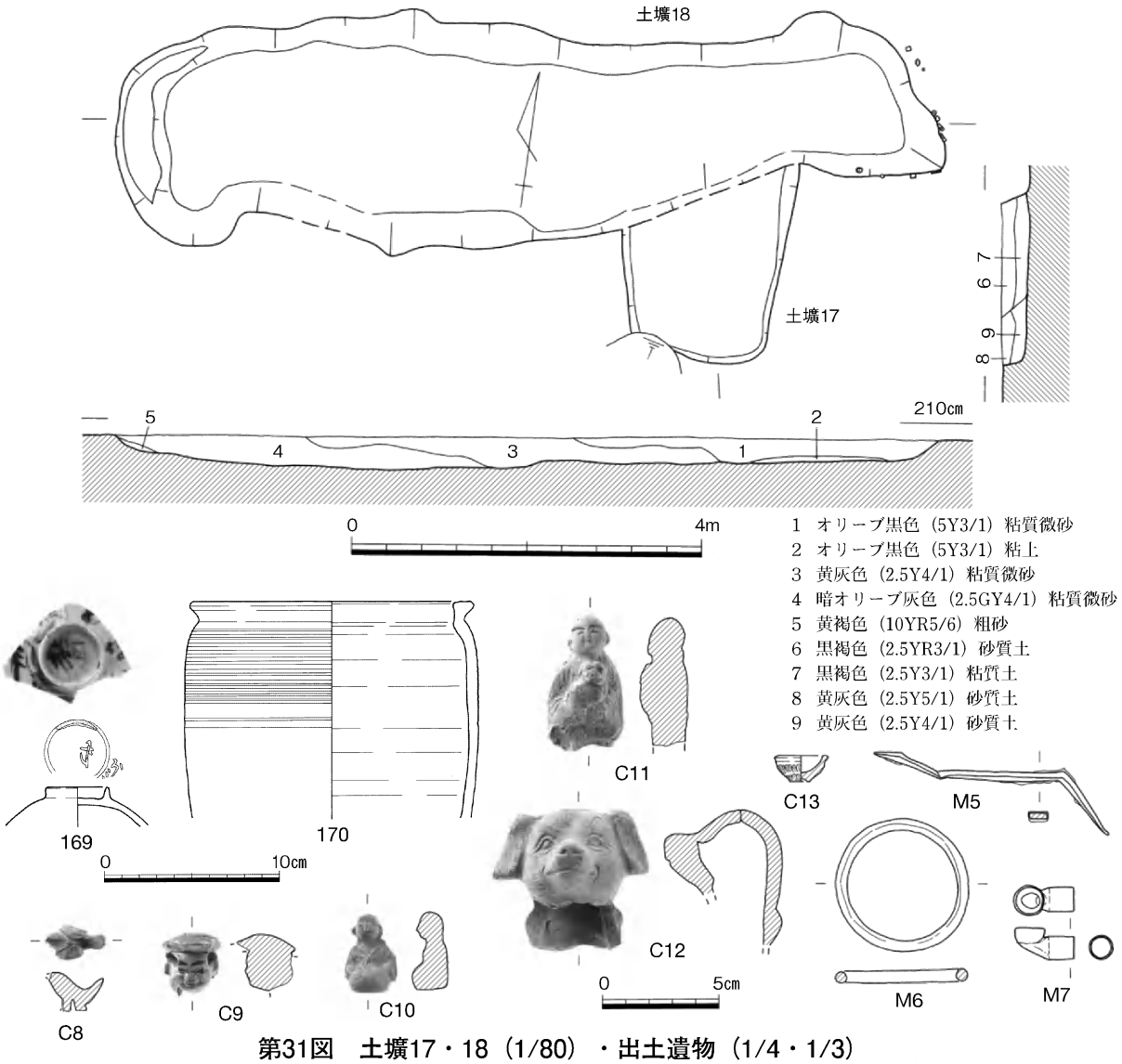
土壙17・18（第７・31図、巻頭図版４、図版７）

２区西側で検出した、楕円形の土壙である。切り合い関係があり、土壙18が土壙17より新しい。土壙18の埋土は西から東へ、土壙17は南から北へと堆積している。埋土は全体として有機物・礫を多く含む層である。また、土壙18の東岸には複数の杭を確認した。出土遺物は土壙17が１袋分、土壙18が整理箱中２箱分になり、染付碗、陶器の徳利・鍋・椀、備前焼の匣鉢・陶板・擂鉢・甕があった。備前焼甕**170**が土壙17出土で、残りは土壙18出土である。土製品では人形が多く、彩色した**Ｃ８**・**Ｃ９**、施釉の**Ｃ11**、焼締め**Ｃ10**、土製の**Ｃ12**などがある。**Ｃ13**は白磁で紅皿のミニチュアである。染付蓋**169**には焼継があり、それより遺構の埋没時期は19世紀前半以降と判断した。　（氏平）



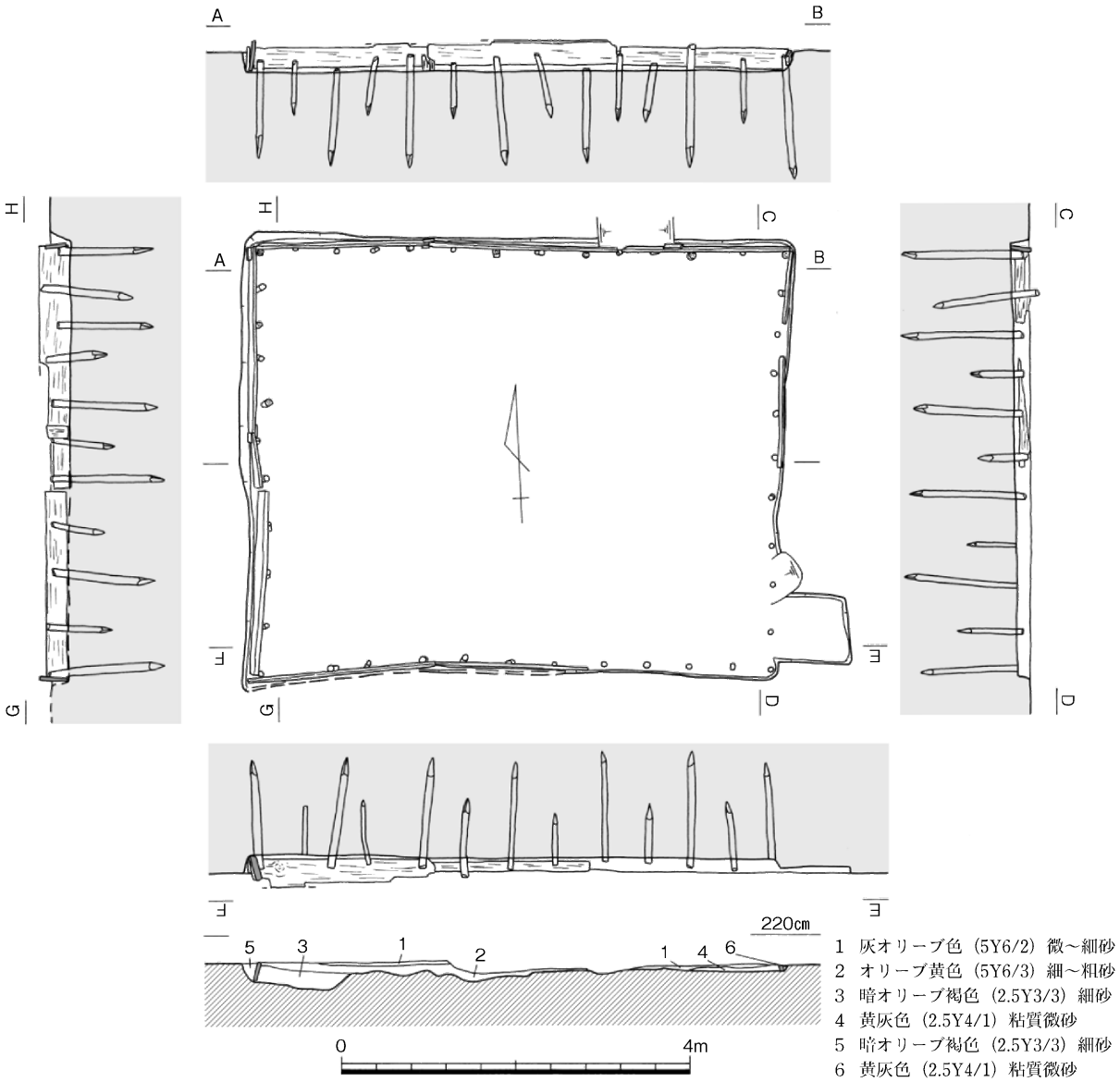
1　褐灰色（7.5YR4/1）粘質細～粗砂
2　オリーブ黒色（7.5Y3/1）細～粗砂
3　黒褐色（2.5Y3/1）粗砂
4　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質微砂
5　にぶい黄色（2.5Y6/3）粘質微砂

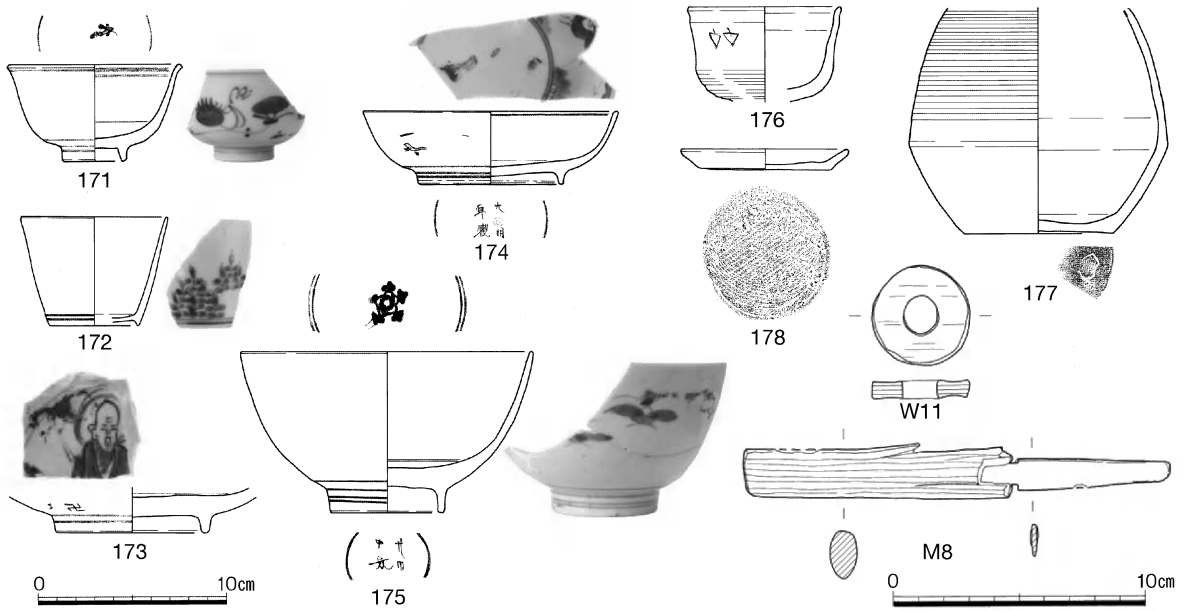
第30図　土壙15・16（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）



1　オリーブ黒色（5Y3/1）粘質微砂
2　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土
3　黄灰色（2.5Y4/1）粘質微砂
4　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘質微砂
5　黄褐色（10YR5/6）粗砂
6　黒褐色（2.5YR3/1）砂質土
7　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
8　黄灰色（2.5Y5/1）砂質土
9　黄灰色（2.5Y4/1）砂質土

第31図　土壙17・18（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）





第32図　土壙19（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

土壙19（第７・32図、巻頭図版４、図版２・８）

２区の中央部に位置している。南東隅の板材は後世の削平により残存していないが、長さ約２～３ｍ、幅30㎝、厚さ約10㎝の板材が丸太杭によって壁面に固定されている。調査前の客土除去時に残存している板材の上にも板材が存在していたことを確認していることから、壁面全体が板材により枡形に囲われていた土壙と思われる。ただし、底面に板材等が敷かれていた痕跡は確認できなかった。板材に釘や鎹等の痕跡が認められないため、杭によって四方の壁面に固定されていたようである。東辺南端に東側へ約80㎝四方掘削されている箇所が見られるが、この土壙に伴うものか判然としない。土壙底面上には粗～細砂が堆積していることから、洪水により埋まったため廃棄された可能性が考えられ、その時期は18世紀中頃以降である。（小嶋）

土壙20（第７・第33図、図版２）

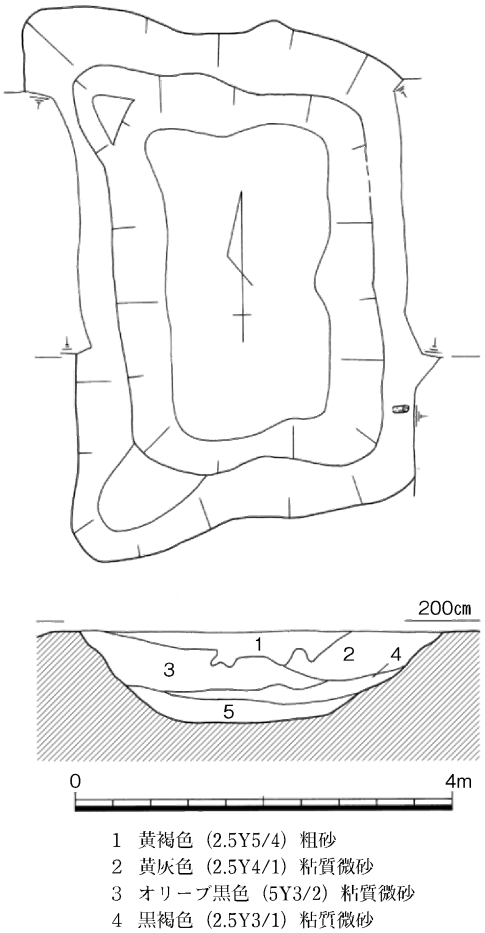
２区の中央に位置する、方形の土壙である。溝３より新しく、土壙23に切られている。検出面からの深さは約１ｍを測り、今回検出した土壙の中で最も深い土壙である。堀り方の北西と南西隅には段を設けている。また、掘り方南東側上方に杭を１本確認した。埋土は第１層に洪水に伴う可能性の高い粗砂層、第２～５層は砂混じりの粘質土層で有機物は含まない。第２～５層の区別が困難で、同時に堆積した可能性が高い。出土遺物は少ないが、染付、陶器椀・蓋、備前焼甕・擂鉢、平瓦・丸瓦瓦当などがある。**W12**は曲物の底、**M９**は包丁である。遺構の埋没時期は、**180**などから18世紀後半～19世紀前半だろう。（氏平）

土壙21（第７・34図、図版８）

２区の東側に位置する、南北方向に楕円形が３つ重なる形状の土壙である。中央より北側は建築物基礎に伴う撹乱があった。埋土は灰色系砂層の１層である。出土遺物で図示したうち**184**と**C14**は北側撹乱中、他は南側から出土した。土壙の南側からは、図示以外に染付碗、肥前陶器刷毛目椀、青磁鉢などが出土している。遺構の埋没時期は18世紀後半～19世紀前半だろう。（氏平）

土壙22（第７・35図、図版２・８）

２区中央部に位置し、上面を土壙19によって削平を受けている。平面形は長さ444㎝、幅296㎝の長方形を呈する。当初、土壙19と一連の遺構と考えていたものの、断面観察等により、土壙19以前のものであることが判明した。



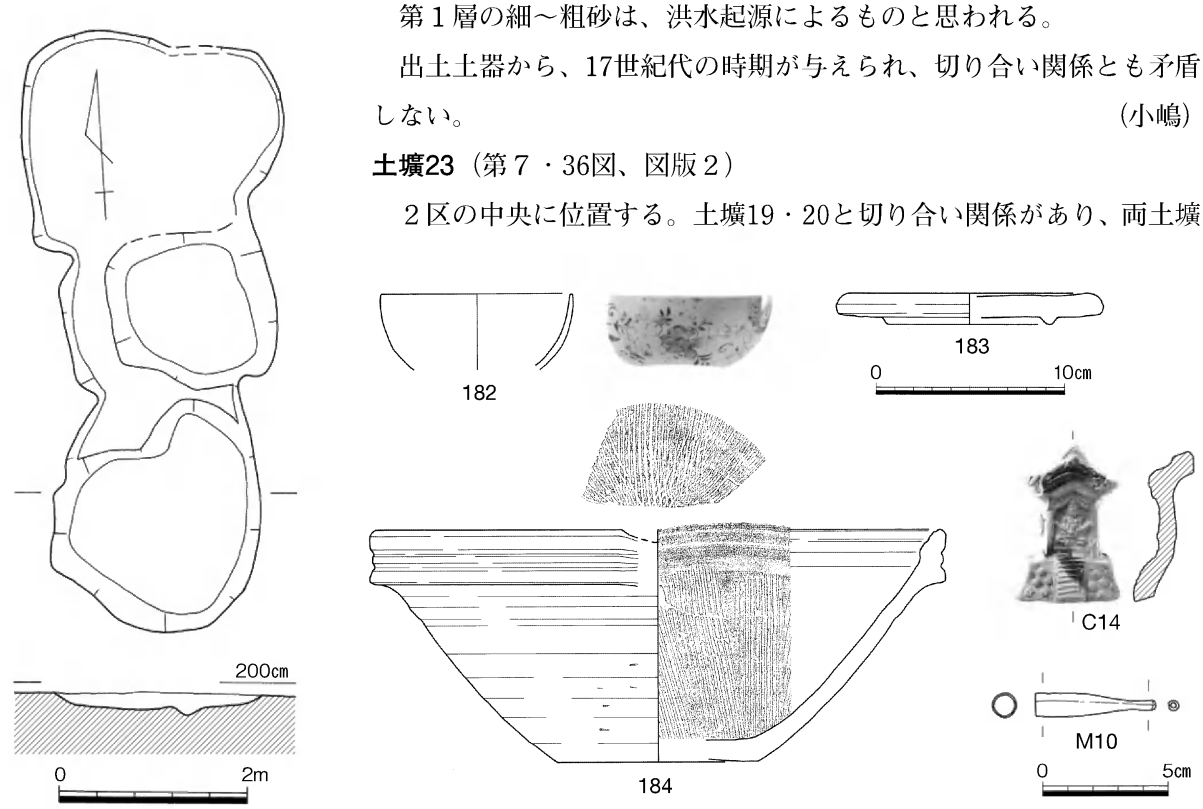
第33図　土壙20（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）

第１層の細～粗砂は、洪水起源によるものと思われる。

出土土器から、17世紀代の時期が与えられ、切り合い関係とも矛盾しない。（小嶋）

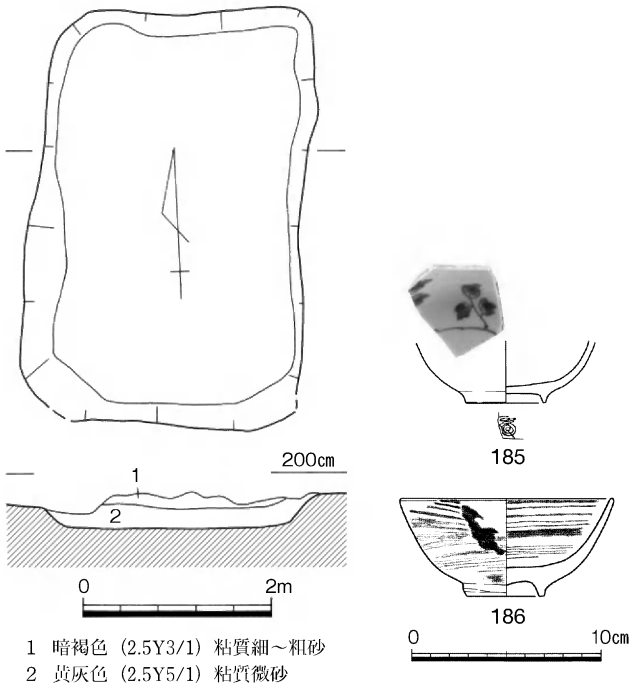
土壙23（第７・36図、図版２）

２区の中央に位置する。土壙19・20と切り合い関係があり、両土壙



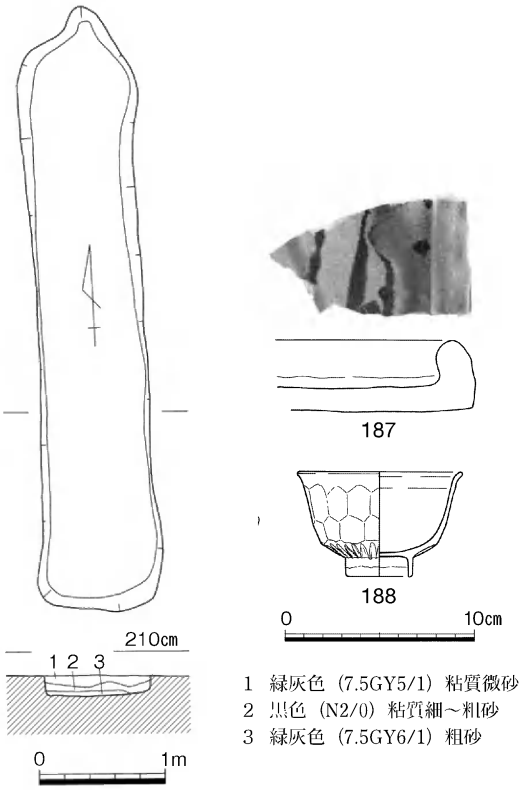
オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質細～粗砂

第34図　土壙21（1/80）・出土遺物（1/4・1/3）



1　暗褐色（2.5Y3/1）粘質細～粗砂
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質微砂

第35図　土壙22（1/80）・出土遺物（1/4）



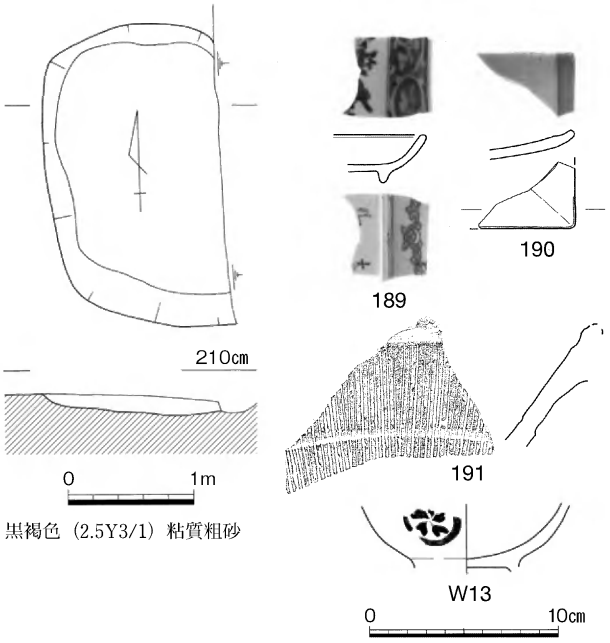
1　緑灰色（7.5GY5/1）粘質微砂
2　黒色（N2/0）粘質細～粗砂
3　緑灰色（7.5GY6/1）粗砂

第36図　土壙23（1/60）・出土遺物（1/4）

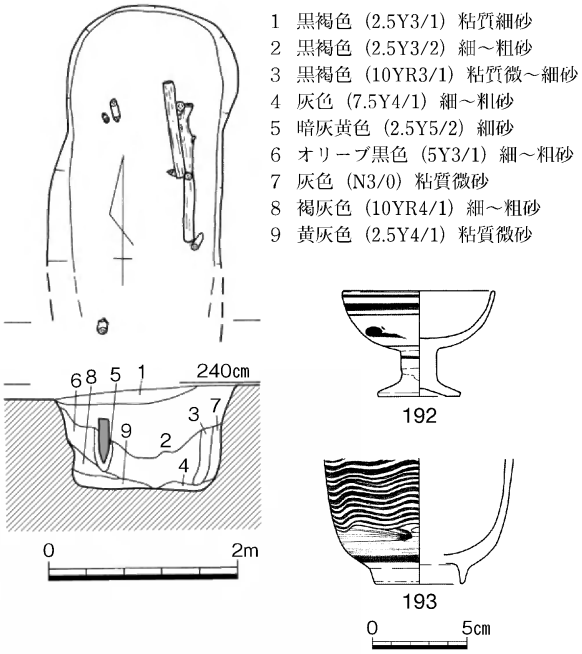
より新しい。東西の壁面はほぼ垂直に近い掘り方である。土壙19と切り合う部分では、土壙19の側板最下段は立ったままで、その側板の一部と見られる板材が折り重なって堆積していた。土層は第１・３緑灰色砂層に第２層の黒色砂層が挟まれていた。出土遺物は図示以外に染付広東碗、陶器椀・灯明皿などで、遺構の埋没時期は19世紀前半だろう。　（氏平）

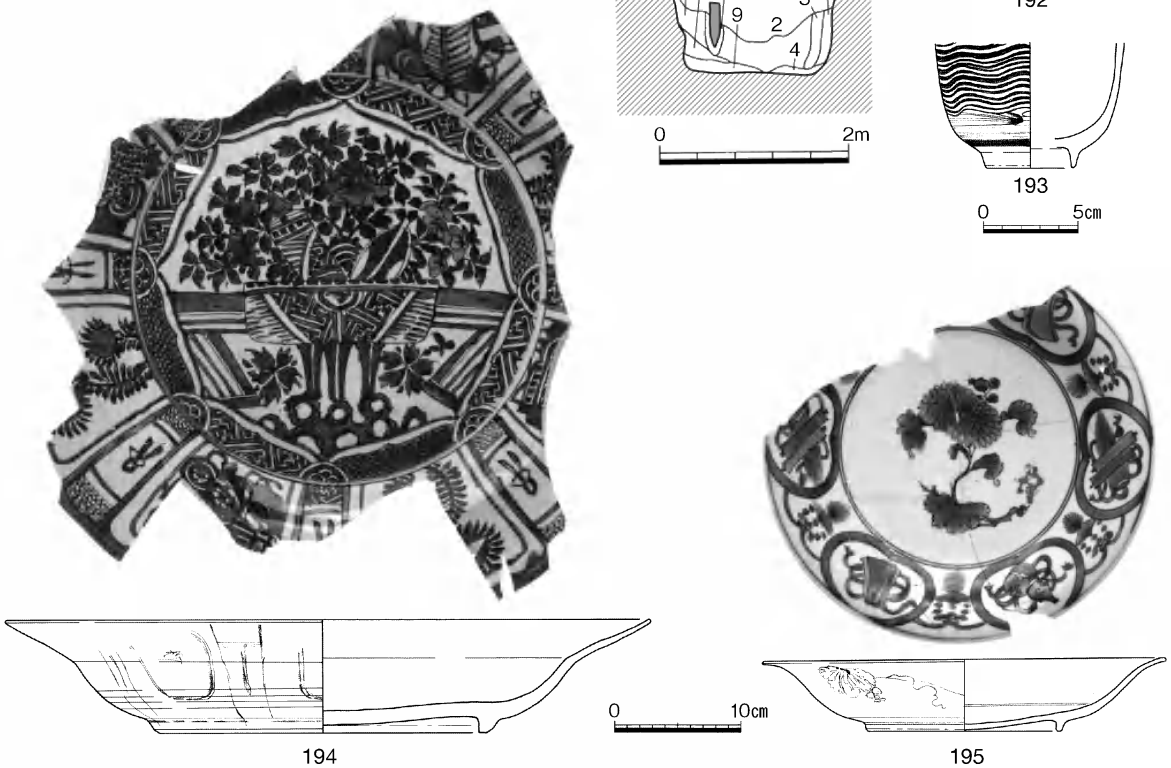
土壙24（第７・37図、図版８）

２区の東側に位置する。東側は建築物基礎に伴う撹乱で切られる。土層は黒褐色を呈する砂層である。出土遺物は少量で、染付角皿**185**、陶器角皿**186**がある。**W13**は黒漆地に赤漆で桜紋を描いた椀である。図示以外で染付、陶器、備前甕片などがあり、遺構の埋没時期は19世紀前半か。　（氏平）



第37図　土壙24（1/60）・出土遺物（1/4）





第38図　土壙25（1/80）・出土遺物（1/6・1/4）

土壙25（第７・38図、図版３）

２区南側中央部に位置しており、土壙28に東辺の上部が削平されている。南側が調査区外のため全体形は不明であるものの、幅90㎝の長方形を呈すると考えられる。壁面を保護するための構築物と考えられる、丸太杭によって固定された径約15㎝丸太材が東辺に、杭列が西辺に確認された。西辺では壁面を保護するには検出された杭の本数が少ないが、廃棄時に抜き取られたためであろう。土壙は一度埋没したものの再掘削されているようである。

遺物は伊万里焼の大盤194などが出土しており、18世紀後半以降の時期が与えられる。　（小嶋）

土壙26（第７・39図、図版３）

２区南側中央部に位置しており、後述する土壙28により西辺南側を削平されている。また、南側は調査区外のため、遺構の全体形は不明である。土壙11などと同様に、埋土中には木片を含む有機物が多量に含まれていた。出土遺物から、18世紀後半以降に廃絶したと考えられる。　（小嶋）

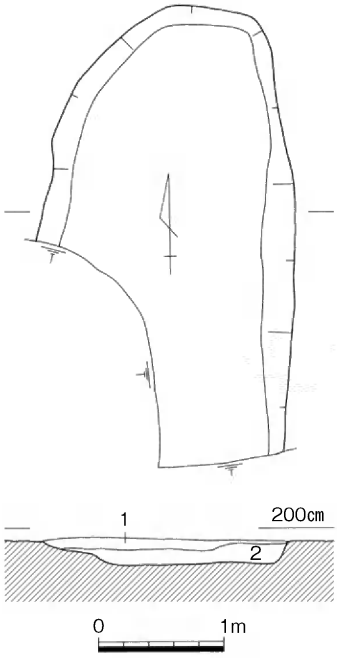
土壙27（第７・40図、図版３）

土壙26によって東側が削平されている。平面形は長軸143㎝、短軸125㎝のやや楕円形を呈しており、土壙底面にはテラス面が認められる。切り合い関係等から、土壙25から土壙28の中では古い時期のものであり、廃絶時期は18世紀後半以前である。　（小嶋）

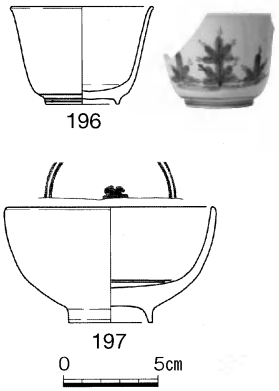
土壙28（第７・41図、図版３）

２区南側中央部に位置しており、周辺の土壙の切り合い関係においては一番新しい。長辺358㎝、短辺260㎝の長方形を呈している。西辺には約250㎝×25㎝×10㎝の板材が壁面に据えられており、その板材を固定するため径約10㎝の丸太杭が打ち込まれていた。土壙の北・南・東辺にも西辺と同様に丸太杭が検出され、また第５層が板材の裏込め土（東側の第５層が斜めの堆積状況を呈しているが、これは板材が抜き取られた後に若干の崩落したためと考えられる）と考えられることから、この土壙は先述した土壙19と同じく四方を板材によって囲われた枡形を呈していた考えられる。土壙底面には、洪水によるものと思われる細～粗砂を確認した。

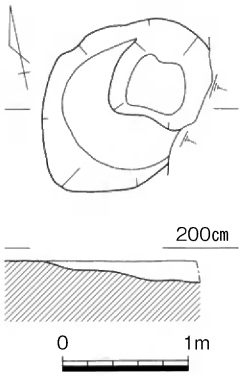
遺構の時期は、出土遺物や周囲との切り合い関係から18世紀後半以降である。　（小嶋）



1　黒褐色（10YR3/2）粘質土　有機物含む
2　緑灰色（7.5GY6/1）粘質粗砂　炭化物含む

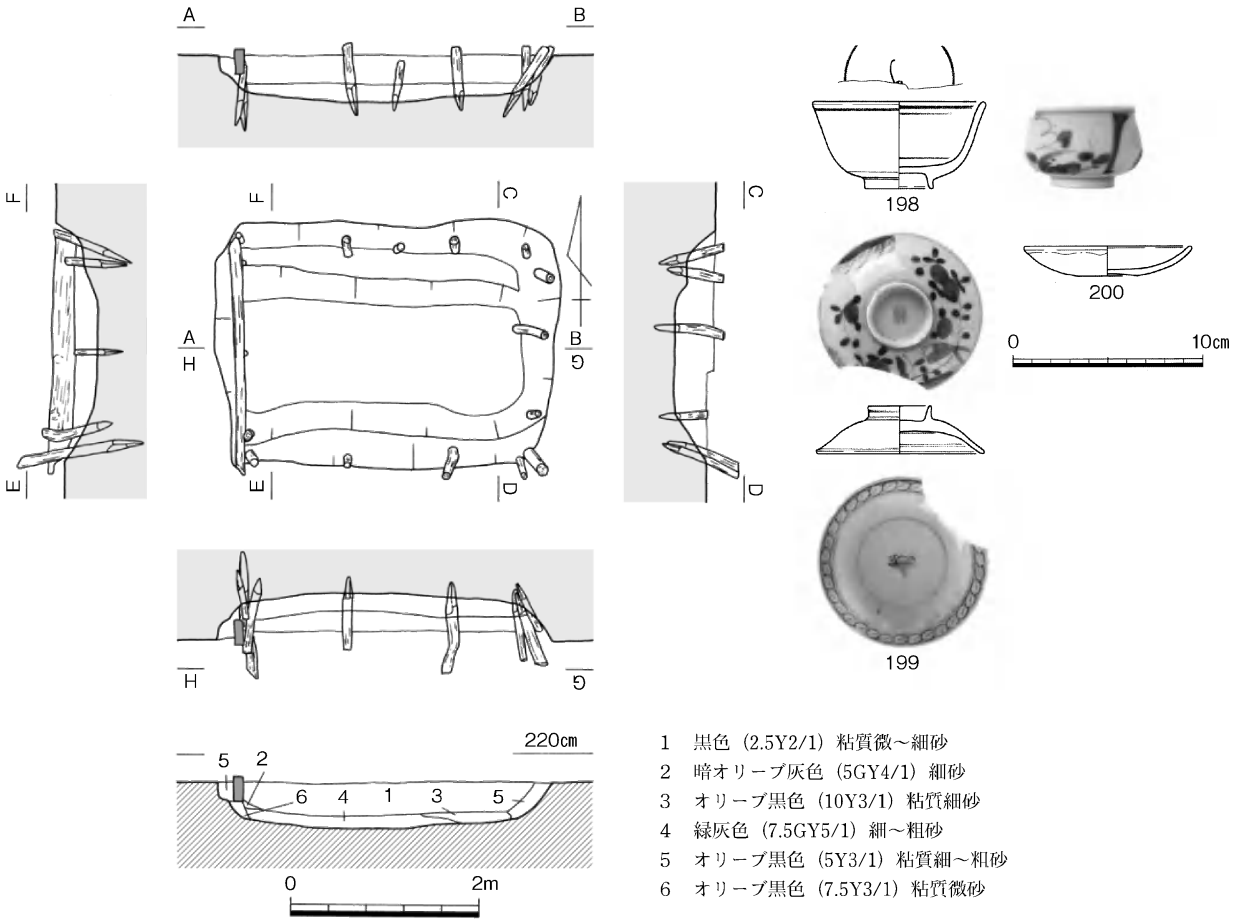


第39図　土壙26（1/60）・出土遺物（1/4）



黒褐色（10YR2/2）粘質土

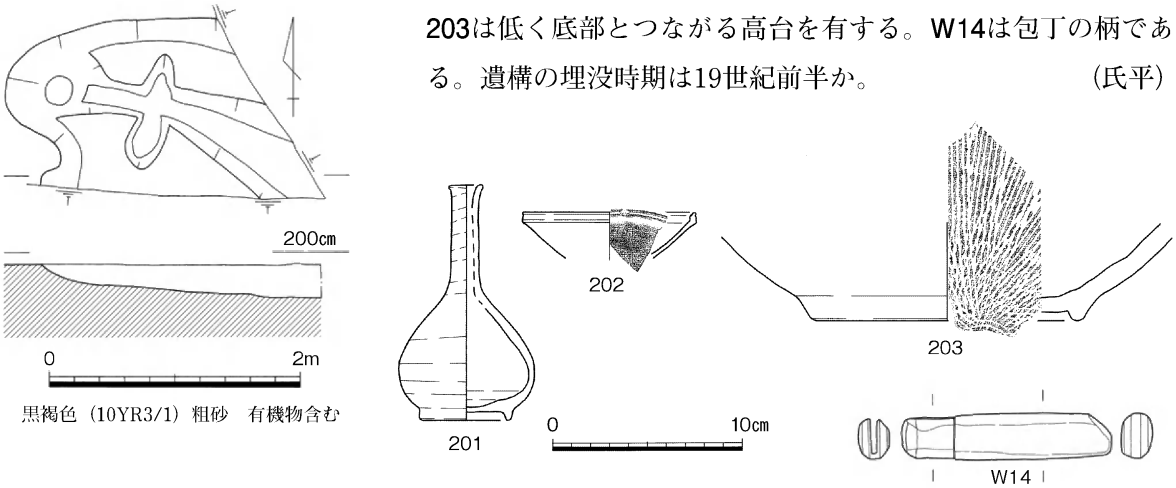
第40図　土壙27（1/60）



第41図　土壙28（1/80）・出土遺物（1/4）

土壙29（第７・42図、図版８）

２区南東端に位置する、不整形の土壙である。東側は現代撹乱で切られるが、南壁の断面観察から東西の長さは３ｍ以上に及ぶようである。埋土は黒褐色の有機物を多く含む砂層であった。遺物は少量で、図示以外には染付、陶器椀、備前焼壺、丸瓦瓦当などである。白磁瓶**201**はほぼ完形、備前擂鉢ミニチュア**202**は内面にスリメを１条描いている。備前擂鉢**203**は低く底部とつながる高台を有する。**W14**は包丁の柄である。遺構の埋没時期は19世紀前半か。（氏平）

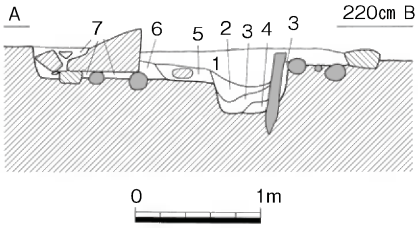


第42図　土壙29（1/60）・出土遺物（1/4）

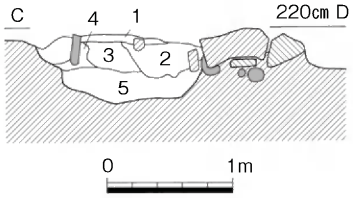
４　溝

溝１（第７・43～49図、図版３～５・８・９）

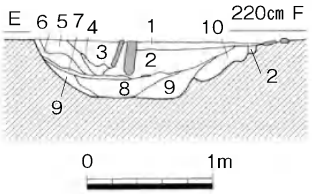
３時期の流路（Ａ～Ｃ）が確認され、最終的には明治期に河原石で埋め立てられた溝である。後世の削平等により溝底面付近のみ残存していた。当初は調査区中央部を北から南へと流走していた（溝Ａ）が、侍屋敷地の区画整理に伴って流路変更（溝Ｂ）がなされ、さらに浚渫工事後に流路確保のための工事（溝Ｃ）が行われている。溝Ａは、東肩が溝Ｂ・Ｃによる削平のため判然としない箇所が認められるが、約２ｍの幅を測る。素掘りの溝であるが、北端部の西肩に丸太杭が密に打ち込まれていた。溝Ｂは調査区北端部を東から西へと流走し、調査区中央でほぼ溝Ａの流路を踏襲するように南へ向きを変えている。石積みの側壁を持った溝であるが、２区の西側壁や１区南北方向溝の南半部には当初から石積みが構築されていない。また、東西方向溝の北肩Y=-37428付近、南肩Y=-37416付近、南北方向溝の西肩X=-147260付近、東肩X=-147292付近では石積みを築く代わり丸太杭を密に打ち込んでいる。特に南肩Y=-37416付近の杭は、ほかの箇所よりも径が太く密に打ち込まれていた。石積みは、後世の削平により根石もしくは胴木と胴木前面に打ち込まれた丸太杭のみが残存していた。胴木は屈曲部西側および北側のみ２本敷かれ、その他は３本である。溝Ｃは流路確保のため、２区中央部で検出されたような、杭を打ち込み板材を固定させた側壁が構築されていたと思われる。北および西側壁で検出されている石積み前面の杭は廃棄時に板材が抜き取られた後の姿であろう。しかし、南および東側壁には杭およびその痕跡がほとんど認められず、石積みの側壁がそのまま利用されていたと思われる。この溝Ｃで使用している杭の中にはホゾやホゾ穴がある炭化した角材も認められ、焼失した家屋の材木を再利用したものであろう。



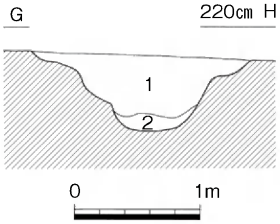
1　黄灰色（2.5Y4/1）細～粗砂　1～10cm大の円礫含む　(明治以降造成土)
2　オリーブ灰色（5Y3/1）粘質粗砂　(溝1C埋土)
3　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質微砂　(溝1C埋土)
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘土　(溝1C埋土)
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質細砂　(溝1C埋土)
6　黒褐色（2.5Y3/1）粘質細砂　(溝1B埋土)
7　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　(溝1B石垣裏ごめ)



1　黄灰色（2.5Y4/1）細～粗砂　1～10cm大の円礫含む　(明治以降造成土)
2　灰色（5Y4/1）シルト～微砂　(溝1C埋土)
3　灰色（5Y4/1）細～粗砂　有機物多く含む　(溝1B埋土)
4　灰色（5Y5/1）微～細砂　(溝1A埋土上層)
5　灰色（7.5Y4/1）細砂　(溝1A埋土下層)

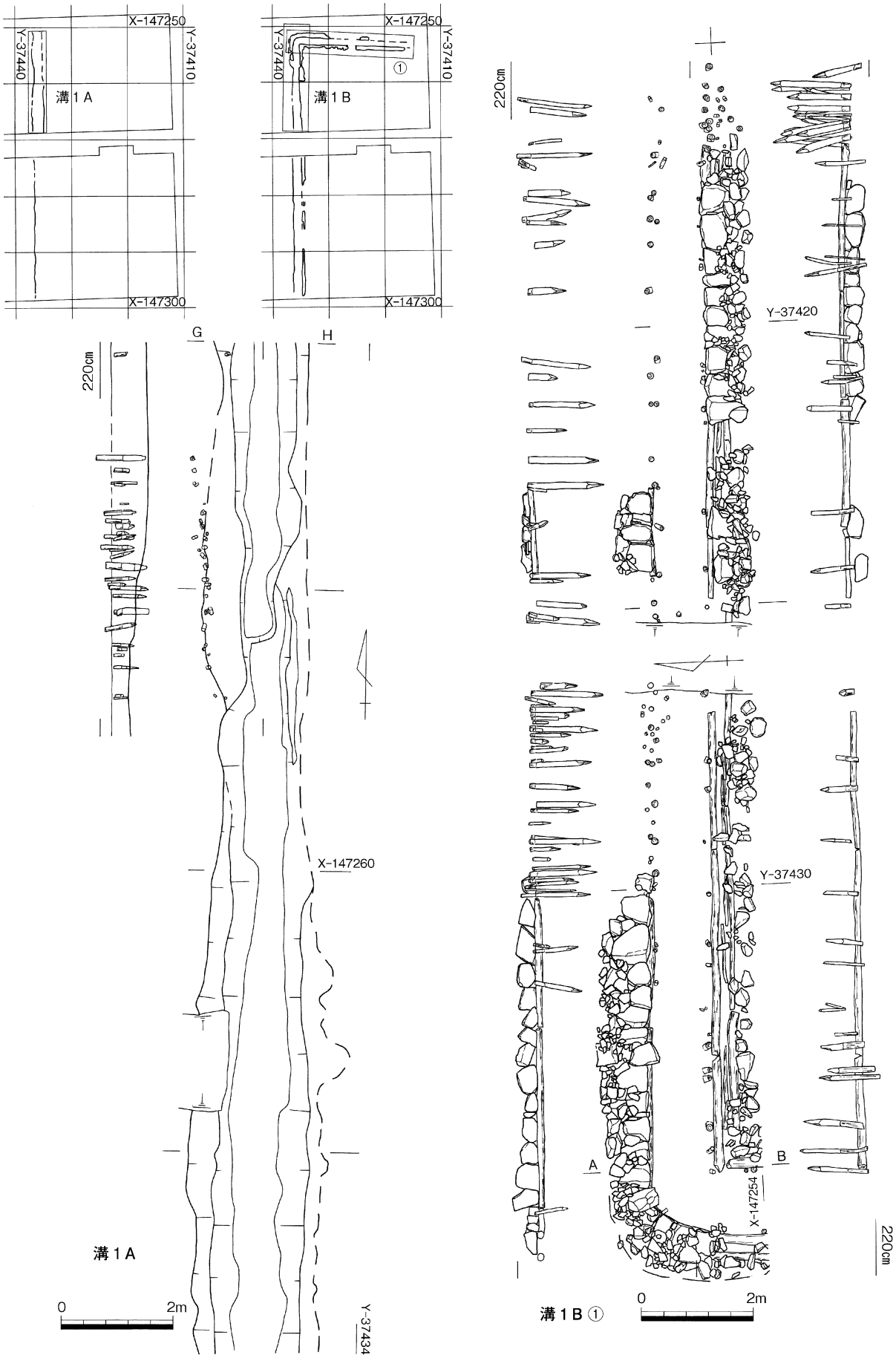


1　黄灰色（2.5Y4/1）細～粗砂　1～10cm大の円礫含む　(明治以降造成土)
2　灰色（5Y4/1）粘質微～細砂　(溝1C埋土)
3　灰色（5Y4/1）粘質細～粗砂　(溝1B埋土)
4　黒褐色（2.5Y3/2）粘質微砂　(溝1B埋土)
5　灰色（5Y5/1）粘質細～粗砂　(溝1A埋土上層)
6　オリーブ黒色（5Y2/2）粘質微砂　(溝1A埋土下層)
7　オリーブ黒色（5Y3/1）粘土　(溝1A埋土下層)
8　オリーブ黒色（5Y3/2）粘質微～細砂　(溝1A埋土下層)
9　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘質細～粗砂　(溝1A埋土下層)
10　灰色（10Y4/1）粘質微砂　(溝1A埋土下層)



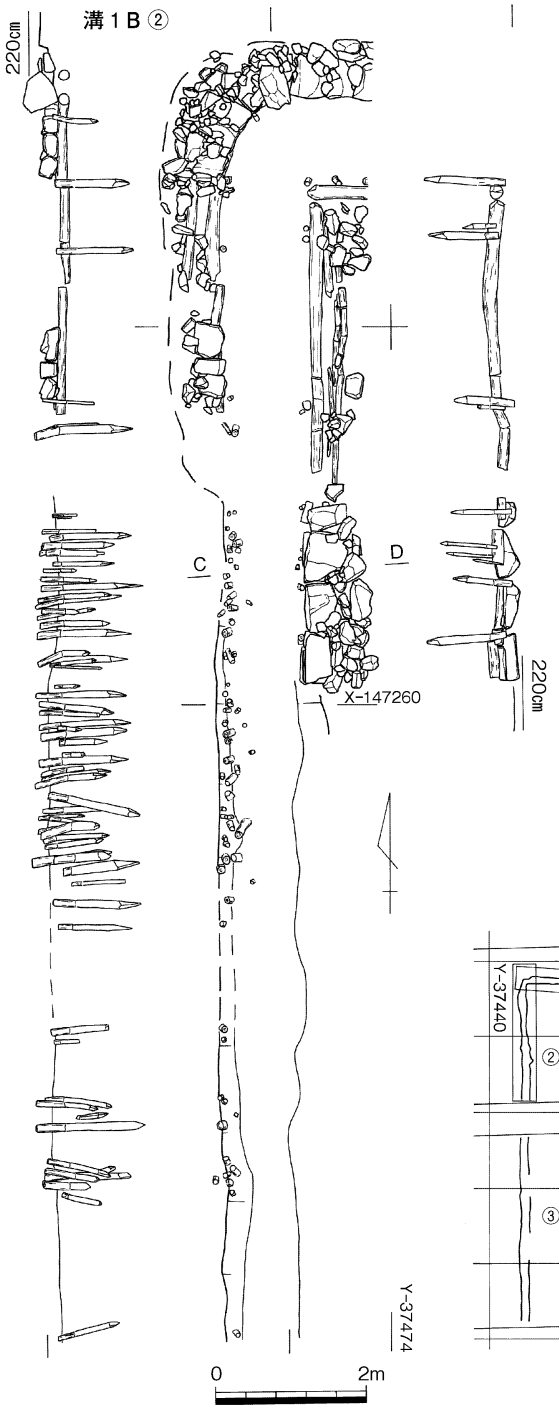
1　灰色（5Y4/1）粘質細砂
2　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土

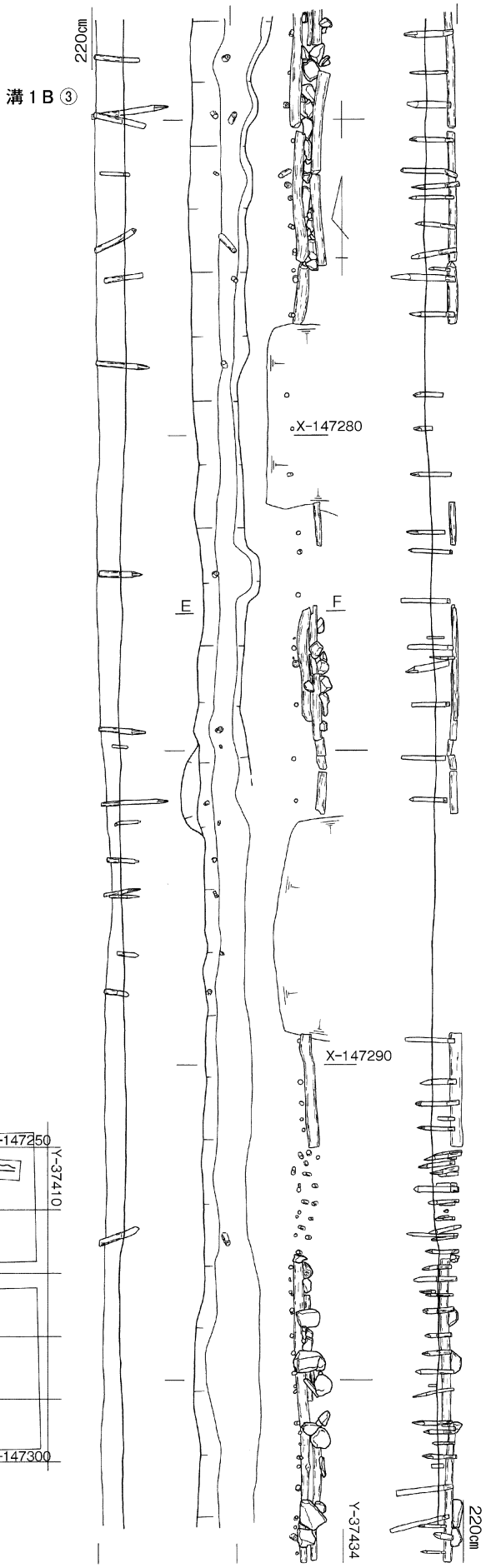
第43図　溝１断面図（1/60）



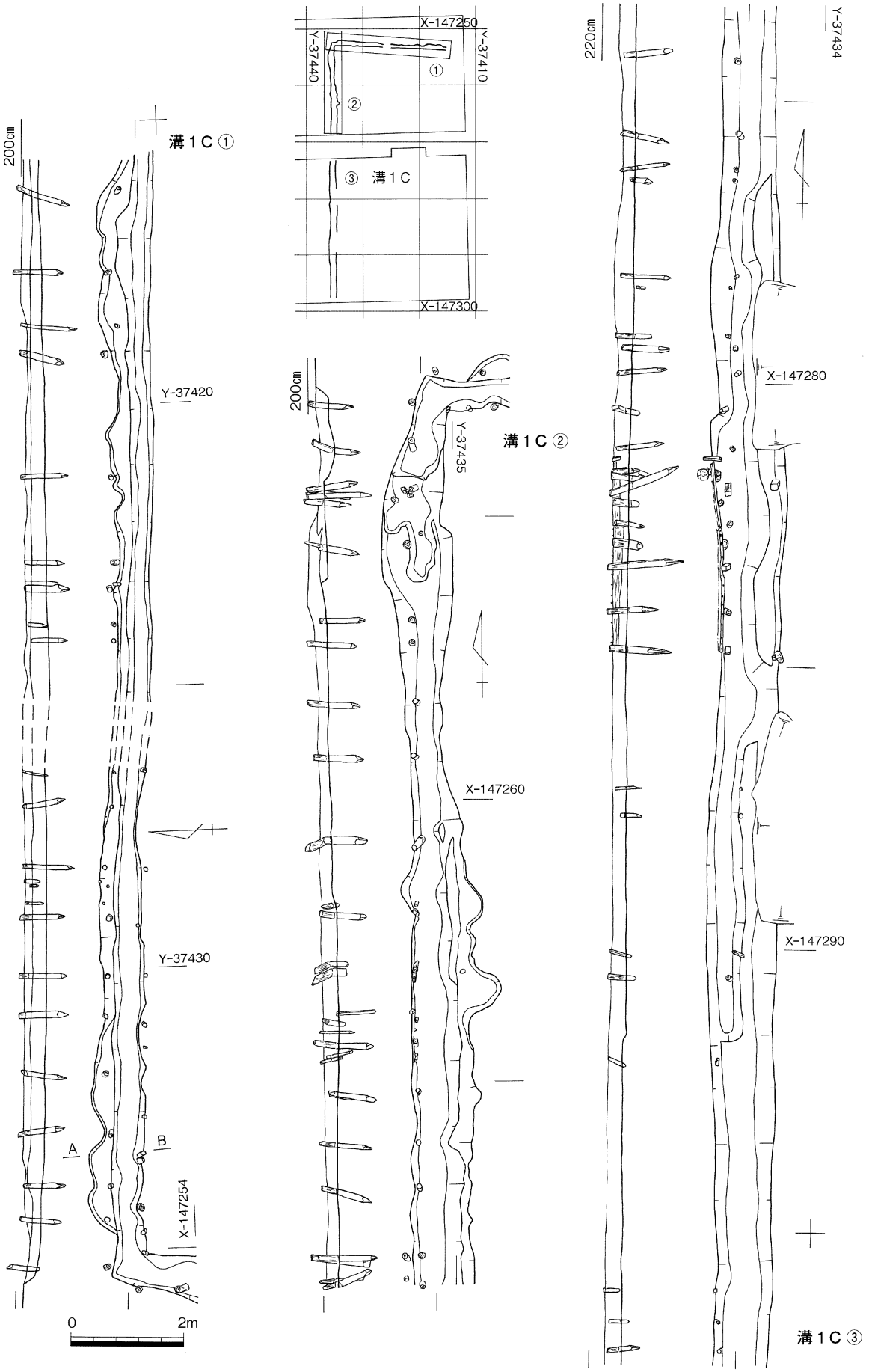
第44図　溝１A・溝１B①（1/100）

写真１　溝１Ｂ①作業風景（西から）

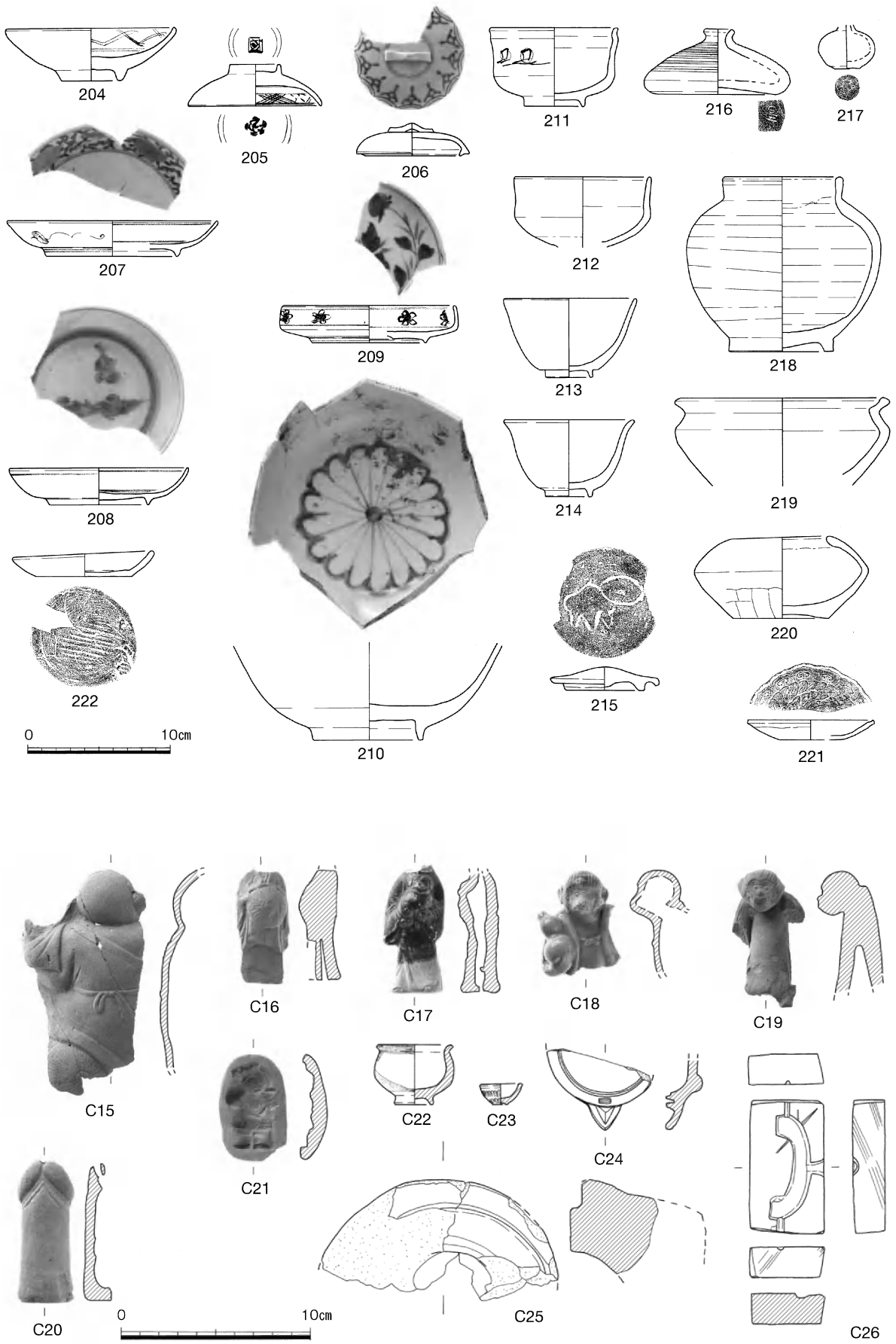




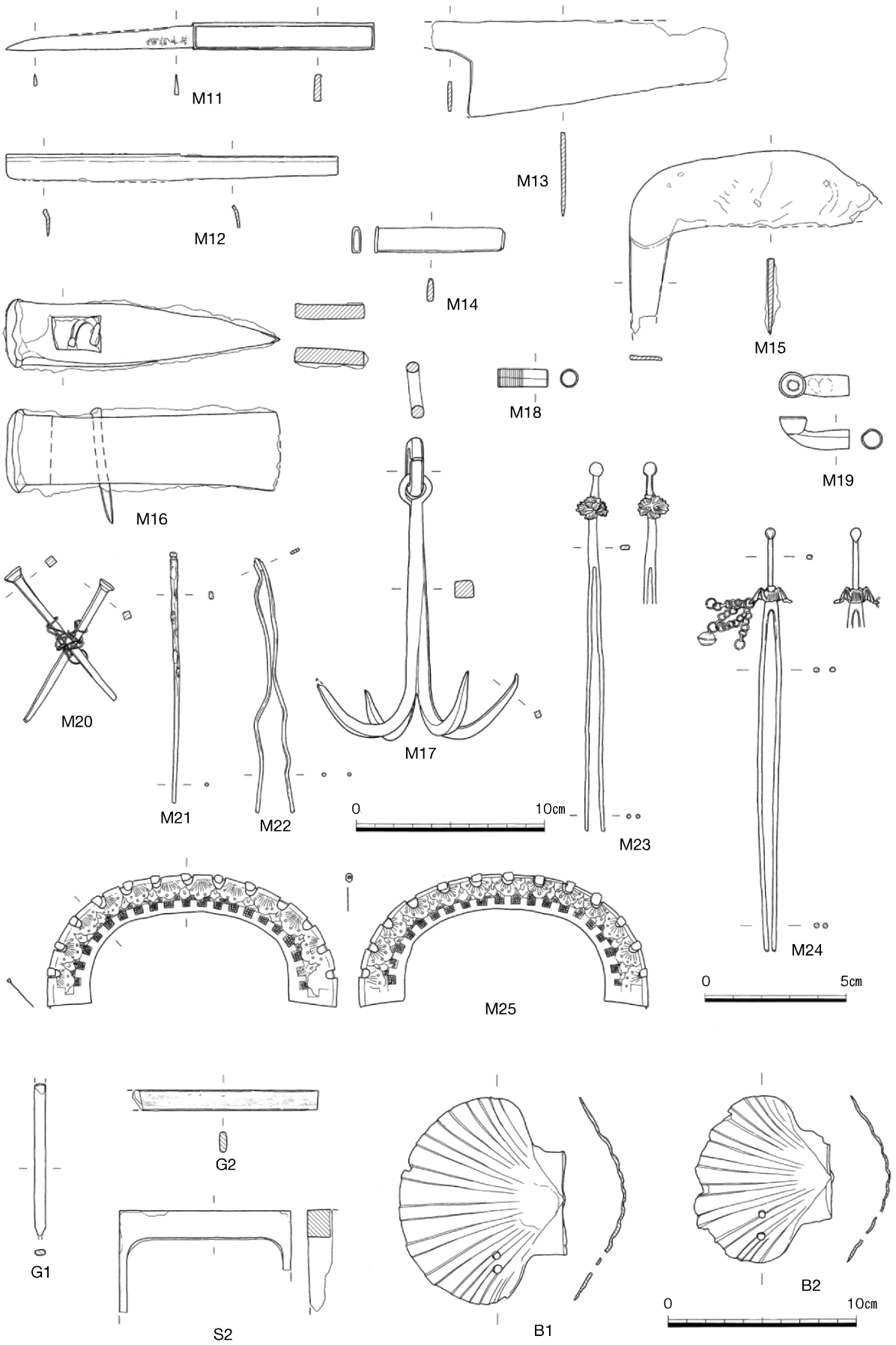
第45図　溝１Ｂ②・③（1/100）



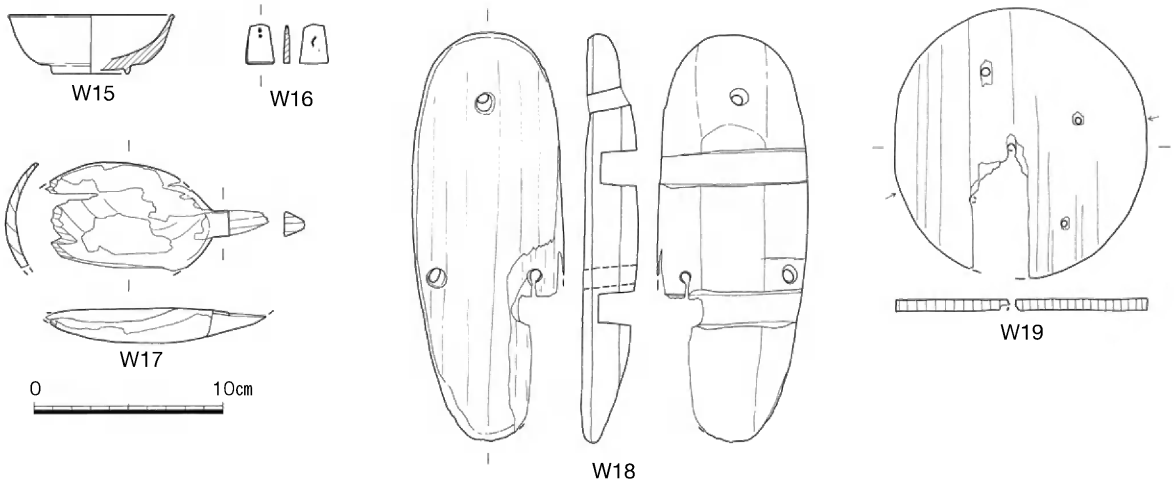
第46図　溝1C（1/100）



第47図　溝１出土遺物１（1/4・1/3）



第48図　溝１出土遺物２（1/3・1/2）



第49図　溝１出土遺物３（1/4）

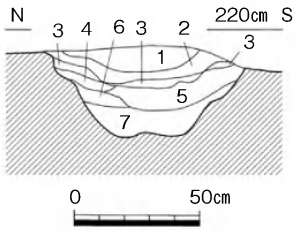
遺物は整理箱で35箱以上出土している。そのほとんどは陶磁器であるが、獣骨や食物残滓（魚骨・貝など）も多数確認された。

（小嶋）

溝２（第７・50図）

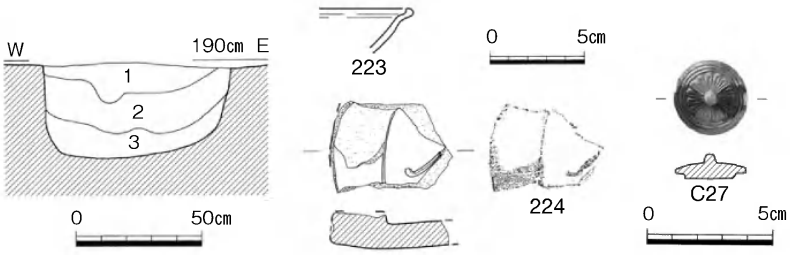
２区西側を東西に流れる溝である。底面の海抜高は東と西で差がなく、流路方向は不明である。溝１との切り合い関係から、溝１Ｂより古く１Ａと同時に存在したことがわかった。埋土は第２・３層が洪水砂と見られる砂層で、第５層は有機物を含み縞状に堆積している。平面では、削平のため第７層部分しか残っていなかった。出土遺物はごく少量で、磁器・陶器・土師器がある。遺物からは埋没時期の判断は難しいが、溝１との切り合い関係から18世紀前半の可能性が高い。

（氏平）



1　黒色（2.5Y2/1）粘質微砂
2　黄灰色（2.5Y4/1）粘質微～細砂
　　有機物含む
3　灰白色（5Y8/1）細～粗砂
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質微砂
5　黒褐色（2.5Y3/1）粘質微砂
6　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘質細砂
7　灰色（7.5Y4/1）粘質微砂

第50図　溝２（1/30）



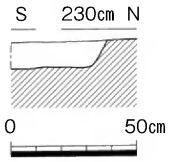
1　暗青灰色（5BG3/1）細砂
2　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘質細砂
3　黒褐色（2.5Y3/1）粘質微砂

第51図　溝３（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

溝３（第７・51図）

１・２区東側を南から北に流れる溝である。２区側は、特に土壙19より南で平面が方形の掘り方が連続した形で、溝内に１～２ｍ単位の凹凸が繰り返す形状を呈する。埋土は３層に分かれ、第１層は有機物を含んで縞状に見える層、第２・３層はブロック状の粘質土を含んだ層である。出土遺物は少量で、皿**223**は小片ではあるが唐津焼の溝縁皿で、丸瓦瓦当**224**は揚羽蝶文様の可能性がある。この溝の１区側から、包含層扱いであるが青磁**242**、白磁**243**が出土している。他に染付と土師器片が出土しており、埋没時期は17世紀後半～18世紀前半の可能性が高い。

（氏平）



黒褐色（10YR3/2）細～粗砂

第52図　溝４（1/30）

溝４（第７・52図）

２区北東側にある東西方向の溝。底面海抜高は２ｍと溝２・３と比べ高い。南側は調査時側溝で切断してしまったため、溝幅は不明である。調査区北壁の観察では、平面図より東側へも埋土が続くが、建物基礎の撹乱が激しいため掘り方は不明である。出土遺物は磁器・備前焼・陶器・瓦片が少量あった。埋没時期は18世紀後半以降と見ている。（氏平）

５　杭列

杭列１（第７・53図）

１区北東端に位置し、東西方向である。杭は１列で、２本が１組になる部分と１本だけの部分を繰り返しているようである。杭間の距離は1.2～1.4ｍ、杭の直径は10～12㎝、深さは65㎝より深い。検出状況から土壙５・６よりは新しいと考える。（氏平）

杭列２（第７・54図）

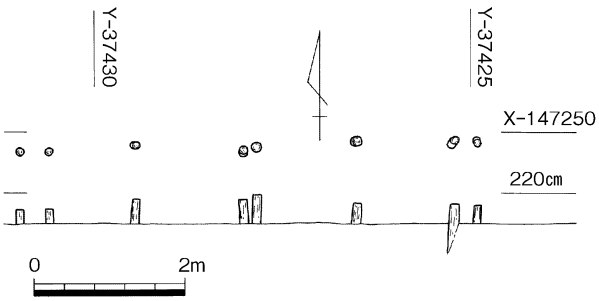
２区南端に位置する、東西方向の杭列である。杭間の距離は0.6～0.8ｍで、１本ずつで１列を成している。杭は丸太杭で、その直径は４～９㎝、深さは最大72㎝である。杭は22本確認したが、西側へはまだ延びる可能性が高い。遺物は伴わず、時期も不明である。（氏平）

杭列３（第７図）

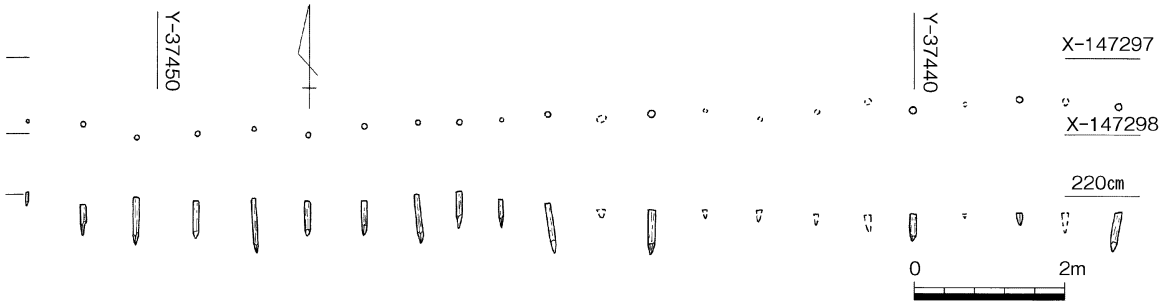
２区南東側に位置する、東西方向の杭列である。変色した杭痕跡とピット状の抜き取り穴を検出し、杭列と認識した。検出状況から、列は２列だった可能性が高い。杭列の範囲は東西18.4ｍである。溝３の埋土を切っている部分があるので溝３よりは新しいと考えるが、遺物を伴っていないので時期は不明である。（氏平）

６　包含層出土遺物（第55図、図版９・10）

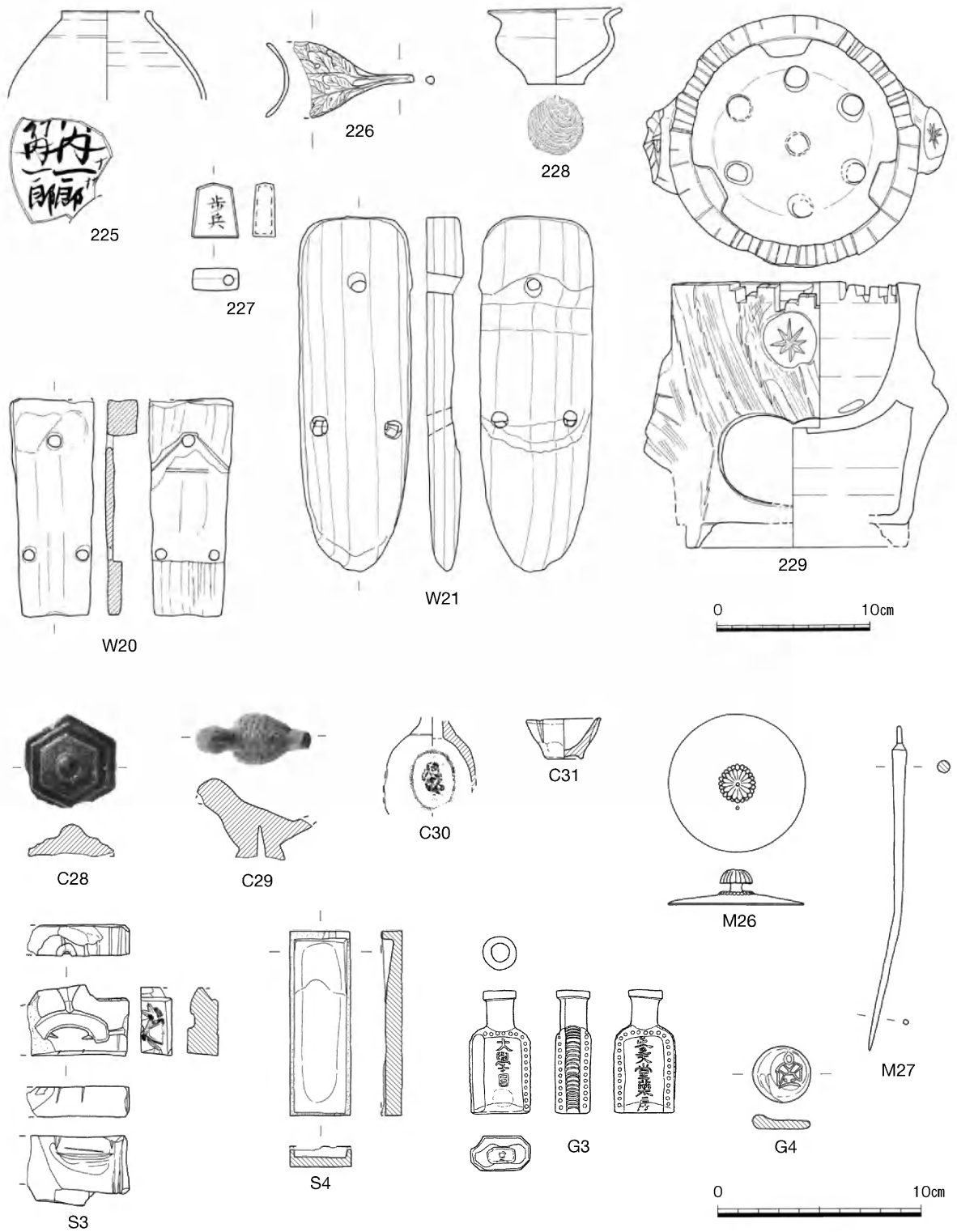
図示した遺物の内、明らかに造成土出土と認識した遺物は水滴227、鋳型Ｓ３、目薬ビンＧ３、おはじきＧ４である。Ｇ３は参天堂薬房（現在の参天製薬株式会社）が発売した大学目薬の瓶で、明治末年から大正初めまで使用されていたようである。江戸時代以降の包含層で最も量の多かったのは、溝１上層に



第53図　杭列１（1/100）



第54図　杭列２（1/100）



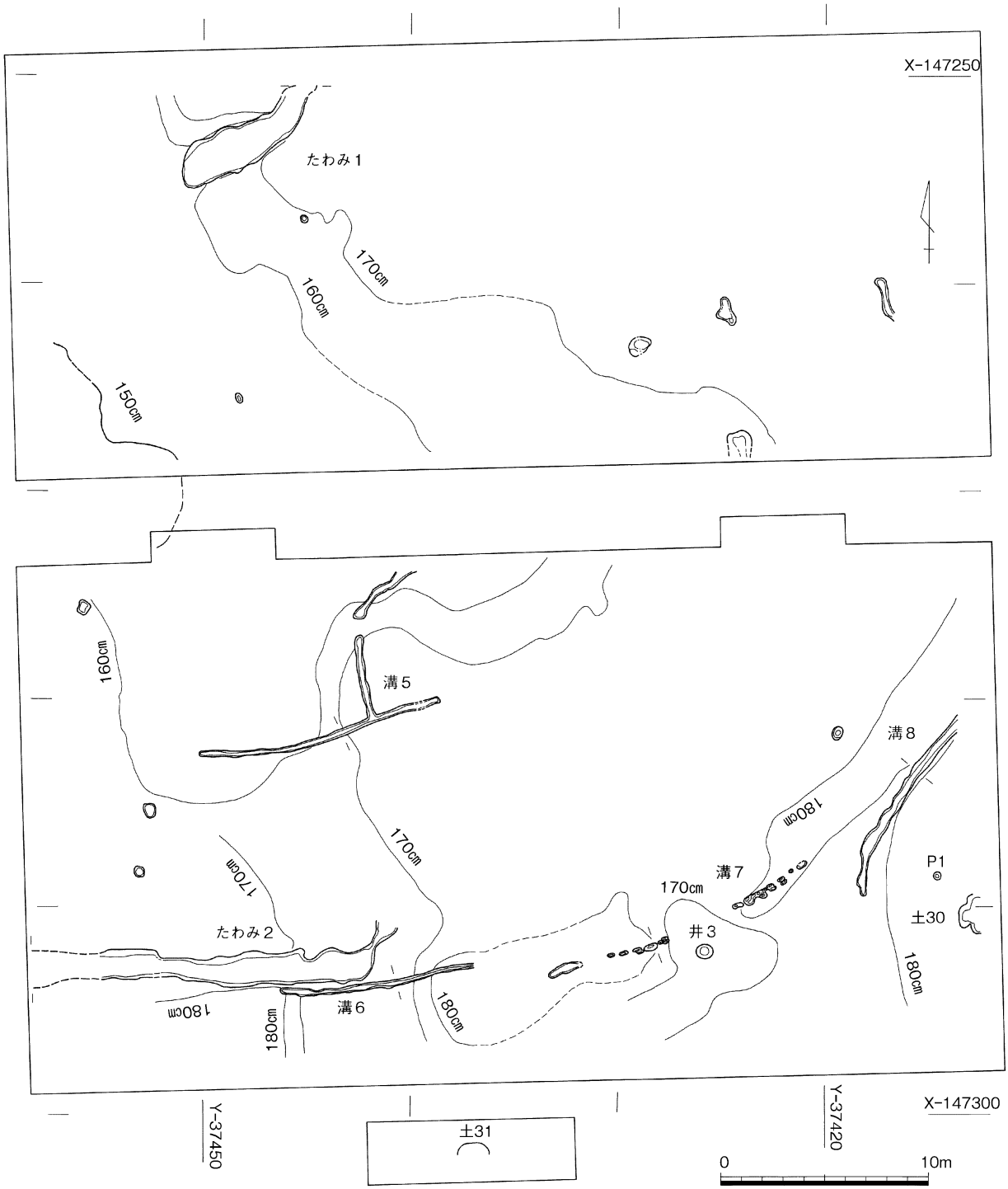
第55図　江戸時代以降包含層出土遺物（1/4・1/3）

堆積した礫層と混在したものである。225・226・229・C28・C30・C31・S４・M26・M27がそれに当たる。明治後半に土地区画が変更されると共に大量の遺物が埋設されている。陶器壺225は破片となった後「竹内一郎」さんの名前書きの練習として使用されている。瓦質焜炉229は全体が切株形をしており、口縁部分に複雑な段差を設けるなど意匠を凝らしている。（氏平）

第３節　中世以前の遺構と遺物

１　概要

中世以前の本調査区は、古代以降は水田層となる。溝５・６はこれら水田層の下層にあり、古墳時



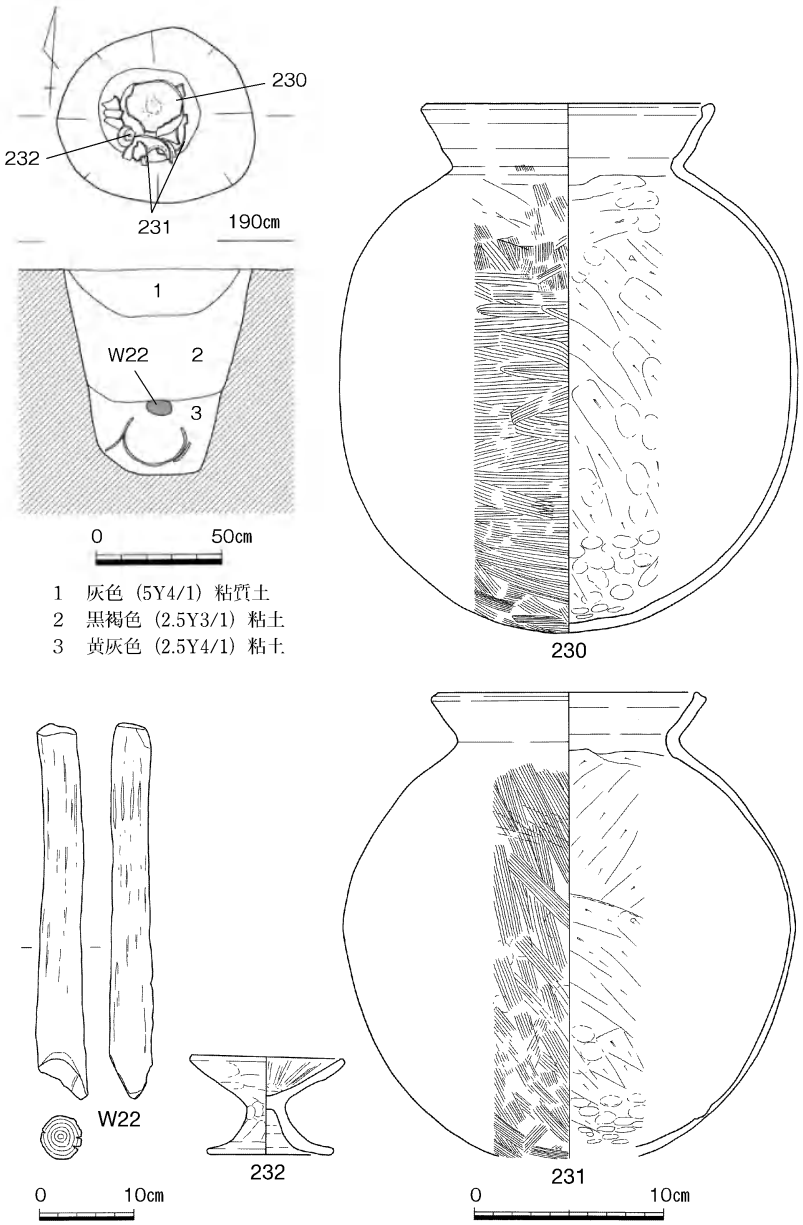
第56図　中世以前遺構全体図（1/300）

代の可能性がある。弥生時代中期以前の基盤層上で地形測量を行うと、１・２区境西端が最も低く、２区南端・東端へ高くなる。弥生時代～古墳時代の遺構は、おおむね海抜1.8ｍ周辺に位置する。１区東端は撹乱のため不明だが、１区南東側と２区西側で図示した遺構は全てたわみで、１区全体と２区の海抜1.8ｍまでは遺構が希薄な低位部である。弥生時代中期では、溝７・８を等高線に沿った形で検出した。弥生時代後期の遺構として土壙30・31があり、その形状は平成16年度調査の裁判所で多く出土した土壙に類似する。古墳時代前半では、井戸３とＰ１を確認した。（氏平）

２　井戸

井戸３（第56・57図、図版４・10）

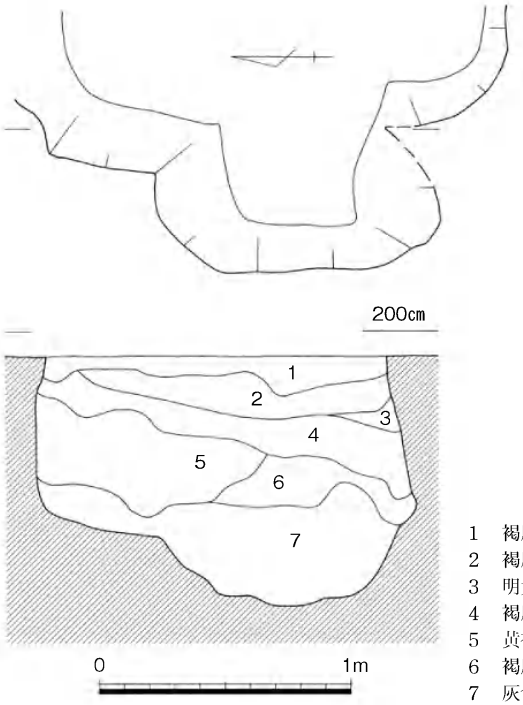
２区の南東側に位置する。埋土は周囲と大きく違う色調の土であったため、検出は容易であった。掘り方は楕円形で、断面はＵ字形である。掘り方底部は湧水層に達しているが、調査時には水はあまり湧かなかった。遺物のほとんどは３層から出土した。遺物の位置は、３層の最も上に**W22**、その下で井戸の中央に**230**、**230**の南側に**231**の破片と**232**が位置する。**230**は口縁から胴部を3/4欠損し、**231**も1/2ほどしか残っていない。これらとは別に、もう１個体分の甕胴部片が存在する。**W22**は自然木の先端をＶ字状に切断した加工木で、樹種はヤブツバキとの同定を得た。**230**・**231**の胴部外面には煤が付着するが、器壁は剥離が少なく調整も明瞭である。なお、**231**の底部内面には粒状の炭化物が付着している。出土した土器より、この井戸は古墳時代前期に埋没したと言えよう。（氏平）

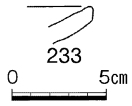


第57図　井戸３（1/30）・出土遺物（1/8・1/4）

３　土壙

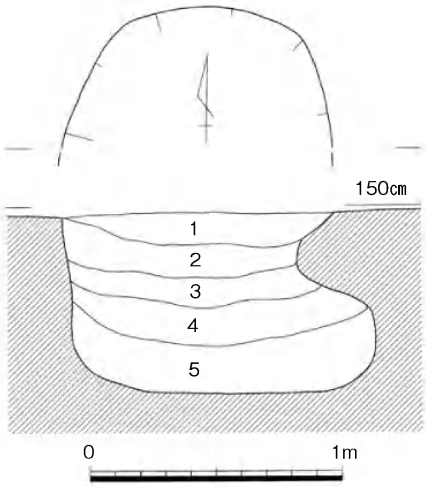
土壙30（第56・58図）





1　褐灰色（10YR5/1）微砂
2　褐灰色（10YR4/1）シルト～微砂
3　明黄褐色（10YR6/6）微砂
4　褐灰色（10YR4/1）シルト～微砂
5　黄褐色（10YR5/6）シルト
6　褐灰色（10YR5/1）シルト
7　灰色（7.5Y4/1）粘土～シルト

第58図　土壙30（1/30）・出土遺物（1/4）



1　灰色（N3/）微砂
2　黄灰色（2.5YR6/1）粘質微砂
3　灰オリーブ色（5Y6/2）粘質微砂
4　オリーブ黄色（10YR4/1）粘質微砂
5　灰色（5Y5/1）粘質微砂

第59図　土壙31（1/30）

２区東壁で検出した遺構である。平面は東西２つの楕円形が接合したような形状で不整形であり、底面も凹凸がある。土層断面では北から堆積したように見える。遺構の掘り方は海抜205㎝から確認でき、底部は粗砂湧水層を若干掘りこんで停止している。遺物は少なく、土器片が４片で図化できたのは**233**のみである。**233**では時期判断が難しいが、裁判所調査と同じ弥生時代後期末葉としておきたい。（氏平）

土壙31（第56・59図）

確認調査Ｔ３で検出した遺構である。平面は楕円形で、断面は袋状を呈する。埋土は第１層は均質であるが、それ以外はブロック状の土が混ざった状態である。遺構の掘り方上面は海抜150㎝で、底部は粗砂湧水層に達している。遺物は出土していないが、弥生時代後期末葉としておきたい。（氏平）

４　溝・たわみ

溝５（第56・60図）

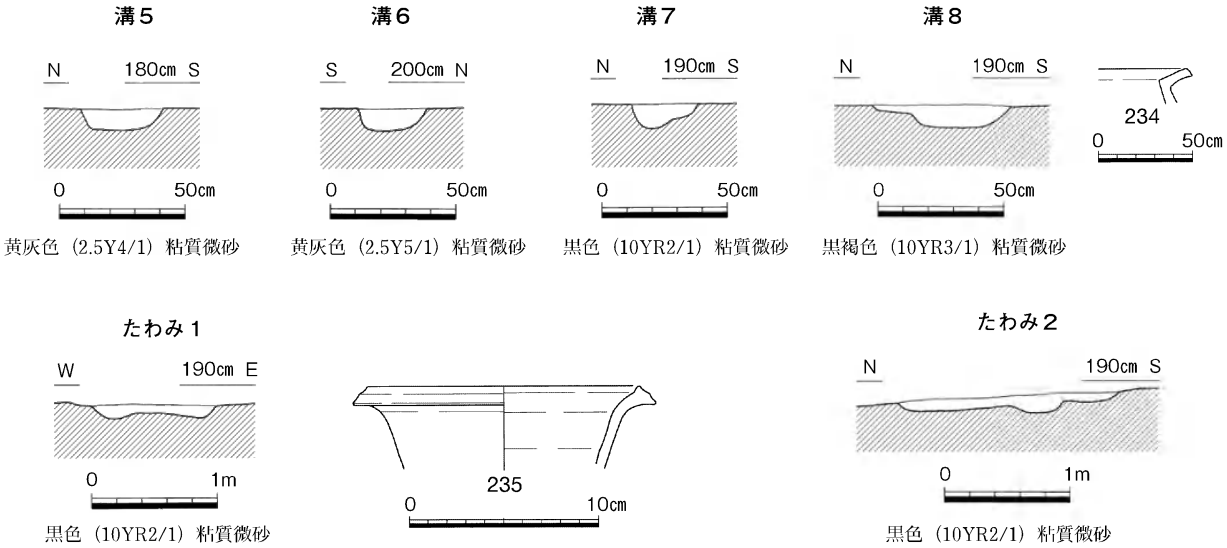
２区北西側で検出したＴ字形の溝である。東西方向の溝に取り付く南北方向の溝は、途中で途切れ湾曲している。掘り方の断面形は箱形で、検出面での幅は32㎝、深さは８㎝を測る。埋土から弥生土器の小片が出土しているが、層位等から遺構の時期は古墳時代の可能性がある。（柴田）

溝６（第56・60図）

２区南西側で検出した東西方向にのびる溝である。掘り方の断面形は箱形で、検出面での幅は27㎝、深さは８㎝を測る。溝５と関連する可能性が考えられる。埋土からの出土遺物は認められないが、層位等から遺構の時期は古墳時代の可能性がある。（柴田）

溝７（第56・60図）

２区南東側で検出した東西方向にのびる溝である。楕円形の小穴が連なるが、柱や杭の痕跡は認め



第60図　溝５～８・たわみ１・２（1/60・1/30）・出土遺物（1/4）

られないことから溝の底面と考えた。掘り方の断面形はＵ字形で、検出面での幅は26㎝、深さは９㎝を測る。埋土は黒色土で出土遺物は認められない。遺構の時期は弥生時代と考える。（柴田）

溝８（第56・60図）

２区東端で検出した南北方向にのびる溝である。周囲に谷状の微地形が認められ、その底部と考えられる。掘り方の断面形は皿形で、検出面での幅は56㎝、深さは９㎝を測る。埋土は黒褐色土で甕**234**や石器が出土した。遺構の時期は弥生時代中期と考える。（柴田）

たわみ１（第56・60図）

１区北西端で検出したたわみである。周囲に谷状の微地形が認められ、その底部と考えられる。掘り方の断面形は皿形で、検出面での幅は100㎝、深さは11㎝を測る。埋土は黒色土で、器壁が磨耗した壺**235**が出土した。遺構の時期は弥生時代中期と考える。（柴田）

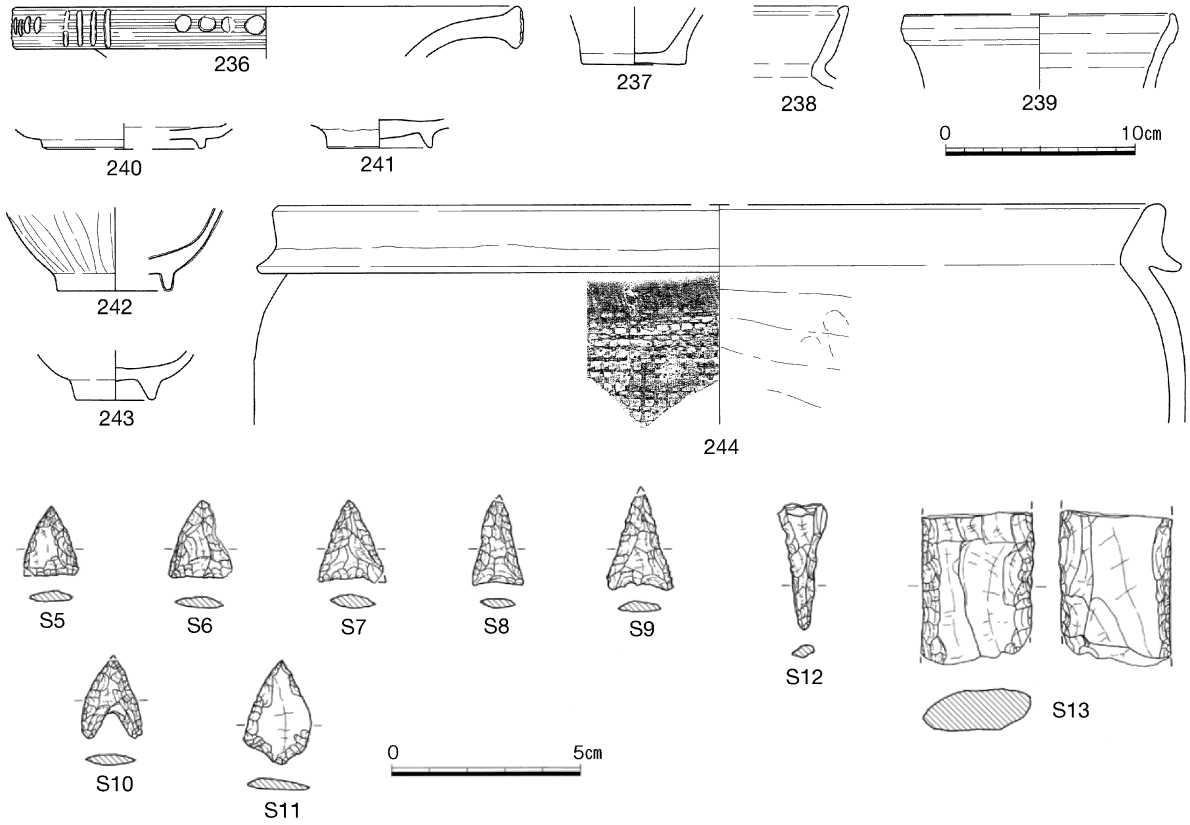
たわみ２（第56・60図）

２区南西側で検出した東西方向にのびるたわみである。掘り方の断面形は皿形で、検出面での幅は177㎝、深さは15㎝を測る。埋土は黒色土で、出土遺物は認められない。遺構の時期は弥生時代中期と考える。（柴田）

５　包含層出土遺物（第61図、図版10）

中世以前の包含層としては、弥生時代の黒褐色包含層と古代～江戸時代の灰色水田層に大きく分かれる。ただ、いずれの遺物も摩耗しているか小破片で、集落に近接している印象は薄い。黒褐色包含層出土遺物は弥生時代中期後葉の壺**236**・甕**237**があり、いずれも２区南東側で出土した。古墳時代前期の遺物は少ないが、２区のＰ１から甕**238**が出土した。古墳時代後期の壺**239**、古代の杯身**240**、中世の吉備系土師器椀**241**は２区の西側灰色水田層から、中世の亀山焼甕**244**は１区西側灰色水田層から出土した。龍泉窯系青磁碗**242**と白磁**243**は１区の溝３から出土したものである。

石器は石鏃・石錐・石剣がある。石鏃は基部がほぼ直線のＳ５・Ｓ６、やや凹基のＳ７～Ｓ９、凹基のＳ10、凸基のＳ11がある。石剣Ｓ13は側縁に磨滅痕があり、２次的に転用されたことが考えられる。（氏平）



第61図　中世以前包含層出土遺物（1/4・1/2）

写真２　１区作業風景（北西から）

写真３　２区作業風景（南西から）

写真４　現地説明会の様子１（平成23年２月19日）

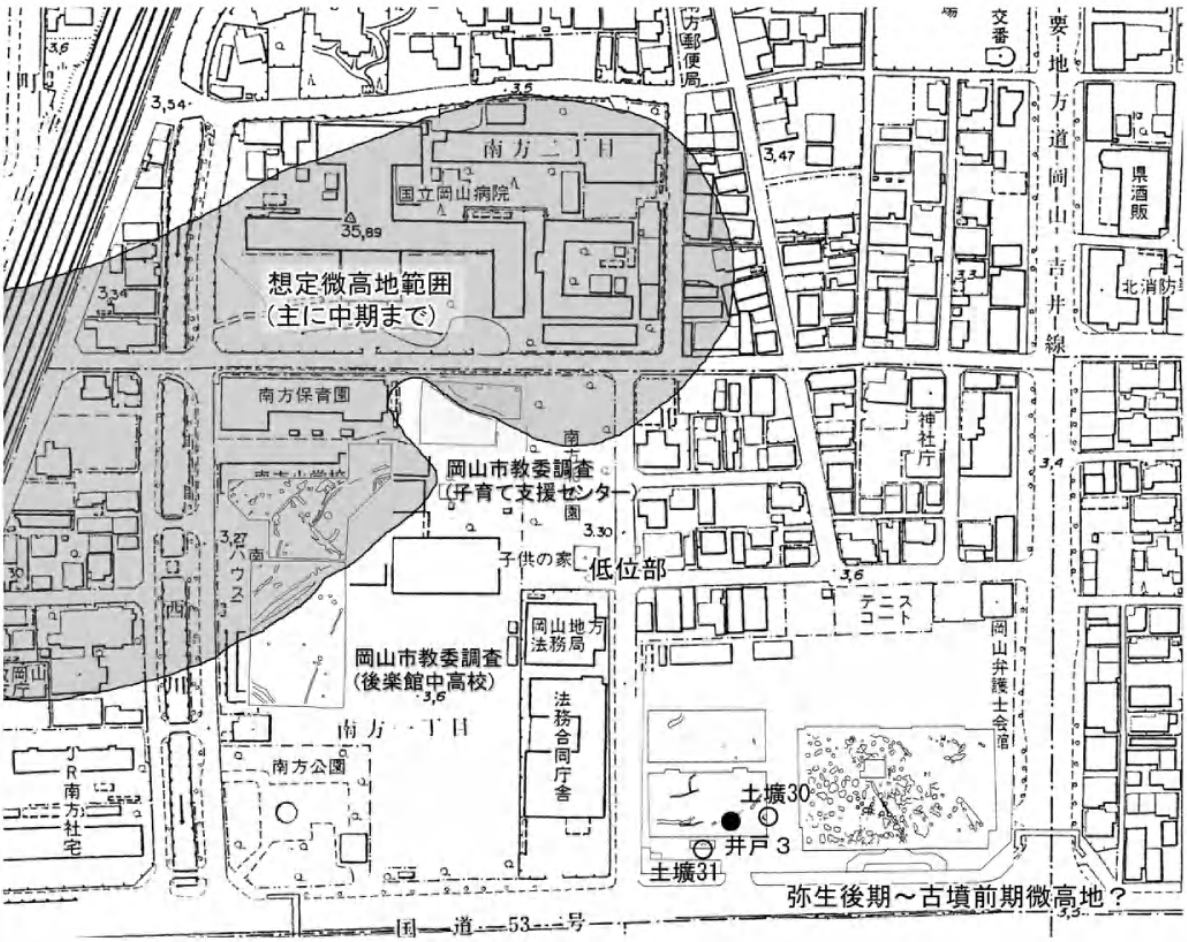
写真５　現地説明会の様子２（平成23年２月19日）

第４章　総括

弥生～古墳時代

調査地点の弥生時代中期では、黒褐色包含層が全体に存在し、これを除去すると基盤層が姿を現す。この基盤層上海抜180㎝付近には溝７･８が存在する。これらは微高地の境界になる可能性がある。地形測量により、基盤層上面は１・２区境の西端が最も低いことが判明したので、溝７・８の南側に微高地が存在する可能性も考えられる。また、１区南西端の西壁の土壌について花粉・植物珪酸体分析を依頼した結果、中世～江戸時代前半水田層のⅢ－１・２層で栽培植物のイネ属の植物珪酸体を多量に検出したのに対し､黒褐色包含層（Ⅲ－３層）以下の層では栽培植物イネ属の植物珪酸体が未検出、という結果が出た(付載２参照)。黒褐色包含層を水田層とする根拠は薄いと言えるだろう。花粉分析では、黒褐色包含層はマツ属花粉が増加することから、周辺では伐開が進み、またイネ科やカヤツリグサ科の草本は少ないため、調査区は草地というより開けた地点であったと考えられている。

弥生時代後期末葉では、２区東端に土壙30､南端に土壙31が存在する。これらの袋状土壙の用途は、東隣の岡山地家簡裁判所（以下裁判所と略）建設に伴う発掘調査 (1) で、粘土採掘坑というより『木製品に関わる何らかの遺構』ではないかとしている。今回の調査でも、袋状土壙の性格を言及できる



第62図　弥生～古墳時代の調査区周辺（1/3,000）

だけの根拠は示せなかった。ただ、袋状土壙の分布範囲が裁判所から土壙30より西へは広がらないこと、また土壙31より北へも広がらないことは明確になった。

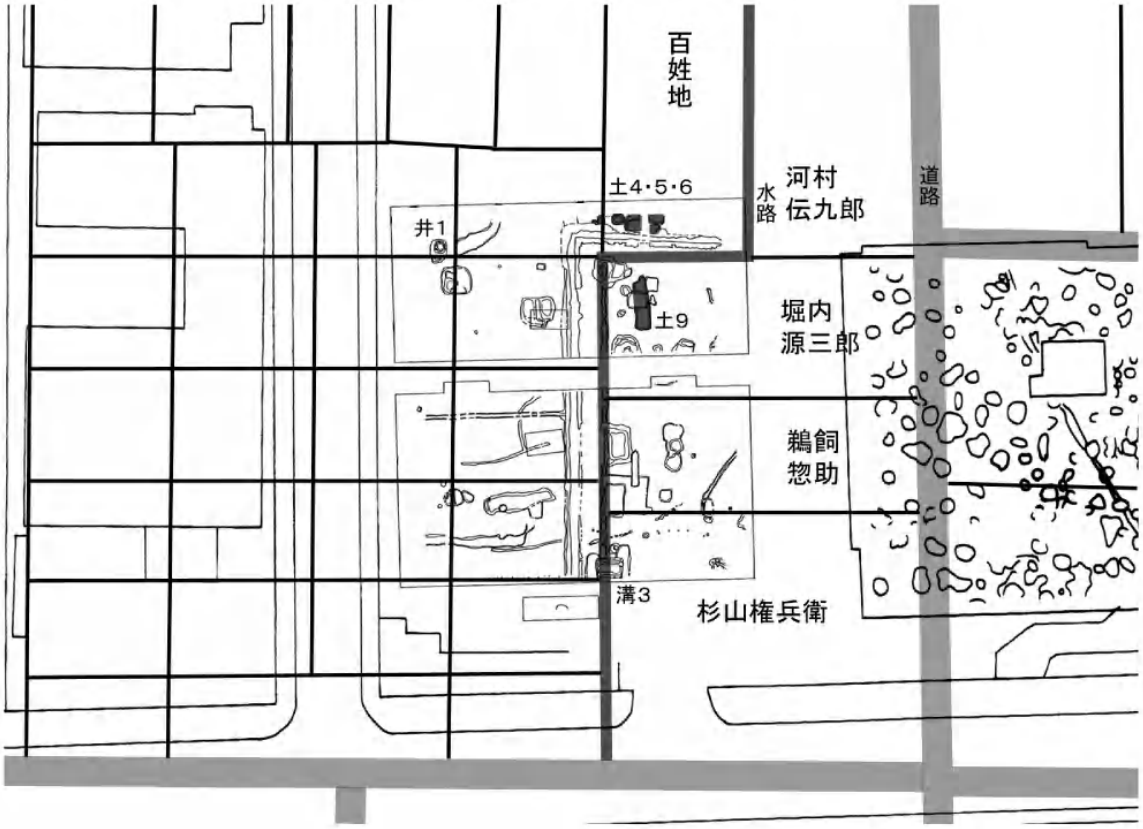
最近の調査によって南方遺跡の東側微高地の南東端が明らかになりつつある。岡山市教育委員会が平成20（2008）年に実施した子育て支援センター建設地の発掘調査[(2)]では、弥生時代中期中葉以前に掘削された溝ＳＤ362が北西から南東方向に流れ、これを微高地と低地の境としている。その南側、後楽館中高校体育館建設に伴う発掘調査[(2)]では、弥生時代前期の北東－南西方向の溝が新たに確認され、前期集落の南端と意義づけられた。ＳＤ362は幅約３ｍ、前期の溝は幅約2.5ｍに達する規模で、集落にとって重要な役割の溝であることは明らかだ。いずれも今回の調査地より北側である。

今回の調査地点は、弥生時代前期から中期は低位部で、水田域とするにも根拠の薄い状態である。弥生時代後期から古墳時代前期においても集落の縁辺であると言えよう。

江戸時代

今回の調査地は旧七番町にあたる。侍屋敷となったのは慶長年間（1596～1615）からで、池田光政の治世から番町に侍屋敷が置かれたと推測されている[(3)]。『備前国岡山城下図』（『慶安城下絵図』慶安年間：1648～1652）では弓・鉄砲屋敷であったが、寛文８（1668）年に藩学校の造営に伴い、その用地内の侍17人を六・七番町に転居させている[(3)]。その前の六・七番町は従士・足軽組屋敷だった[(4)]。宝永５（1708）年頃の岡山城下絵図『岡山伊勢宮絵図』はさらに40年後の様子を描いている。その後の文久元（1861）年の絵図『備前岡山地理家宅一枚図』まではおよそ150年の隔たりがある。

今回検出の遺構のうち、最も古い遺構は溝３と土壙４～６・９であろう。土壙４～６は溝１Ｂより古く、溝３は１区土壙７・20・22・28より古いことが切り合い関係からわかっている。これら遺構の埋

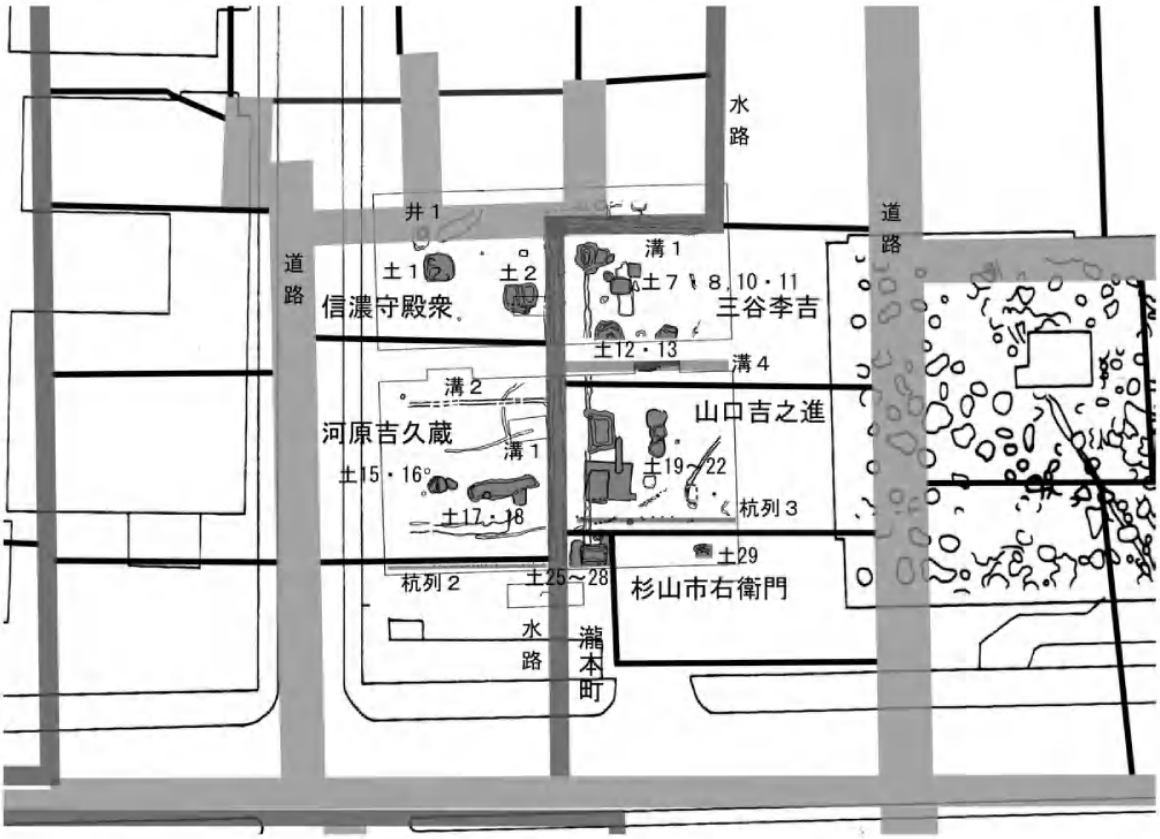


第63図　『岡山伊勢宮絵図』［1708（宝永５）年ごろ］と遺構配置図（1/1,000）
絵図は岡山大学付属図書館蔵、それを元にトレース・加筆

没時期は、出土遺物が少ないため17世紀後半～18世紀前半の幅を見ておきたい。溝３は宝永５（1708）年頃の『岡山伊勢宮絵図』の水路との照合が可能である（第63図）。さらに調査区の平面を清掃して観察したところ、土壙７の東側に土色の変色した部分が東西方向に帯状に続いていることがわかった。仮にこれを溝の痕跡とすると、溝３が方向を変えて東西方向に流れていたことになり、絵図との合致度合いはさらに高くなる。

つぎに、溝１の最も古い時期を挙げる（溝１Ａ）。溝１Ａは２区溝２と同時期で、207～209などから18世紀前半以降の可能性が高い。溝１Ａは１Ｂ・１Ｃに切られるため、２区では西肩付近しか残存していなかった。１区の北端部分では、１Ｂ・１Ｃが東へ屈曲しているのに対し、まっすぐ延びている。溝１Ｂは205などより18世紀後半以降に埋没した可能性が高い。石垣を伴う部分がほとんどだが、２区西肩に石垣を伴わない部分がある。１区南北方向の西肩は杭を密に打ち込むのに対し、２区の西肩は杭がまばらである。２区の東肩の杭を子細に観察すると、杭の深さが50㎝程度の杭が多く、２区西肩に杭が少ないのは後世の削平のためであると言えよう。溝１Ｃは19世紀前半以降明治時代後半までである。再び素掘り溝となるが、１Ｂの溝さらえの結果であるとも言える。出土遺物はほとんどが溝埋め立て時の遺物であろう。

土壙出土遺物は18世紀前半～後半の遺物が多いが、注意すべきは染付等に焼継による補修の痕跡が多く見られることである。焼継は18世紀末に始まり19世紀には広範囲に見られることから[5]、遺物そのものの時期にかかわらず19世紀以降の指標になる。また、染付蓋169のような瀬戸・美濃系染付が少ない傾向にある。焼継により安価に磁器が補修でき、購入が見送られていたことが想像できる。



第64図　『備前岡山地理家宅一枚図』［1861（文久元）年］と遺構配置図（1/1,000）
絵図は岡山大学付属図書館蔵、それを元にトレース・加筆

溝１Ｂ・１Ｃは文久元（1861）年の『備前岡山地理家宅一枚図』の水路と照合可能である（第63図）。その場合、土壙４～６・９以外の土壙が絵図の屋敷地のどこに当たるかを見ていくと、三谷家に土壙７・８・10～13、山口家に土壙19～22、河原家に土壙15～18、杉山家に土壙29、信濃守殿衆に土壙１・２、瀧本町分に土壙25～28が位置することになる。土壙の性格だが、土壙19と28は方形の掘り方の内側に板を積み、杭で固定している状況が確認でき、穴蔵でないかと考えた。穴蔵は地下に掘った穴の壁面を板などで固定し蔵とするもので、天井は板材で蓋をして、火災に備えた避難場所であった。土蔵に対し安価に構築でき、江戸では18世紀以降町屋・武家屋敷に係わらず屋敷に備わるようになった[(6)]。他に土壙６には杭が伴い、土壙20も方形の掘り方を持っており、元来穴蔵だった可能性がある。

溝・杭列では、溝４は三谷・山口家の境付近、杭列３が山口・杉山家の境付近、杭列２は河原家南端の境付近に位置する。杭列１については、絵図と対応するかどうか断言できない。溝４と杭列２・３は厳密に絵図と一致しないが、その位置からおそらく屋敷の区画に関係する遺構と見ていいだろう。

近世遺構から出土した獣・魚骨について、岡山理科大学の富岡直人氏に同定を依頼した（結果一覧は付載4）。魚類ではスズキ、マダイ、クロダイ、マゴチ、スッポンが出土し、食物残滓ということだった。獣類はニホンジカ、ニワトリ、イノシシ類が食用、イヌ・イエネコは愛玩用であろう。イヌの内溝１出土の１頭は体骨のほとんどが一括出土し、埋葬された可能性が高い。その他は周囲に生息していたのではないだろうか。また、ニホンジカ骨に残された痕跡から、それらがイヌの餌あるいは遊び道具になっているという指摘があった。

さらに、近世遺構から出土した種子の同定を行った（結果一覧は付載３）。樹木では、ウメ、モモ種子が多数出土し、食用として定着していた。サクラ、キイチゴ、サンショウ、ヤマグワは食用で、マツ、ハンノキ属は周囲の植樹である。草本では、ウリ類、ヒエ、オオムギ、エゴマ、シソ属、ナス、カボチャは栽培植物で、利用後の残滓であろう。ナデシコ科、ヒユ属、タデ属、オヒシバ、カタバミ属、イラクサ科等はやや乾燥した人為地で生育し、スゲ属、カヤツリグサ科、ホタルイ属は水生植物で湿地に生育していた。草本は水田域に近い屋敷地という地理条件を反映しているようである。

近世遺構などから出土した滓のうち５点を分析した結果、鍛冶滓と原料の包丁鉄であった（詳細は付載１）。鋳型Ｃ２・Ｃ25・Ｃ26・Ｓ10も出土し、周辺で鍛冶が行われたことが想定できる。文献では南方村鋳物師屋敷について『撮要録』[(7)]の文政６（1866）年の記事があり、その位置は調査区の北方であった。鋳型Ｃ２が土壙６出土で、その埋没時期は17世紀後半から18世紀と想定したので、この記事と直接関係はないと考えるが、調査区付近が『備前国岡山城下図』より慶安年間（1648～1652）は弓・鉄砲屋敷であったことから、その関係で付近に鋳物師が存在した可能性はあるだろう。（氏平）

註

(1)「南方遺跡　広島高裁・岡山地家簡裁庁舎建て替えに伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』200　岡山県教育委員会　2006

(2)「南方遺跡（子育て支援センター建設）」「南方遺跡（後楽館中高校体育館建設）」『岡山市埋蔵文化財センター年報』９　2008（平成20）年度　岡山市教育委員会　2010

(3) 岡山市地名研究会『岡山市の地名』1989

(4) 谷口澄夫「岡山城と城下町」『岡山県史』第６巻近世Ⅰ　1984

(5) 長佐古真也「焼継」『図説江戸考古学研究事典』2001

(6) 古泉弘「地下室」『図説江戸考古学研究事典』2001

(7)『撮要録』後編　工商之部　文政８（1825）～明治３（1870）年

付載１　南方遺跡出土鍛冶関連遺物の分析

（株）九州テクノリサーチ・TACセンター　　大澤正己

概要：江戸時代後半代に属する武家屋敷跡から出土した含鉄椀形鍛冶滓4点と鉄塊遺物1点の分析調査を行った。南方遺跡の鍛冶は、錬鉄（包丁鉄）と共に故鉄（廃鉄器）を鍛冶原料とした鉄器製作の鍛錬鍛冶が想定される。

調査結果

MNK-1　含鉄椀形滓（２区東南端包含層出土）：430ｇ弱で上面が深く窪む特徴を有する。Photo.1の①～⑤に顕微鏡組織と断面硬度測定結果を示す。鉱物相は白色粒状結晶ウスタイト（FeO）と淡灰色柱状結晶ファヤライト（$2FeO \cdot SiO_2$）を晶出する。両鉱物相の断面硬度値は前者が452Hvからウスタイト、後者は558Hvからファヤライトが同定される。滓中にはフェライト・パーライト地の亜共析域（＜0.77％ C）の金属鉄粒を遺存する。断面硬度値は0.10％以下の炭素量で106Hvが得られた。炭素量と硬度値間に整合性がとれた。化学組成をTable2に示す。全鉄分（Total Fe）は48.91％と高めで脈石成分（TiO_2、V、ZrO_2）低めで鍛錬鍛冶滓の特徴を呈する。酸化マンガン（MnO）0.24％や銅（Cu）＜0.01％など低値から砂鉄系素材の要素を備える。

MNK-2　椀形鍛冶滓（２区南端包含層出土）：1100ｇの大型品で２面の破面をもち、鍛造剥片を付着する。Photo.1⑦～⑬に顕微鏡組織と硬度測定結果を示す。鉱物相はウスタイト+ファヤライト。硬度値は前者で430Hv、後者が554Hvと文献硬度値より若干低めだったが[注1]誤差範囲内に収まる。鉄粒は２箇所の提示で、一つは⑨⑩のパーライト地に初析セメンタイト析出の過共析域（＞0.77％ C）、残る別箇所はパーライト地に片状黒鉛（flake graphite）析出のねずみ鋳鉄であった。硬度値は前者初析セメンタイト側にややバラツキをもち243Hv ～298Hv、後者の片状黒鉛近傍では319Hv ～336Hvを呈した。Table2に化学組成を示す。成分傾向は前述MNK-1と大差なく、鍛錬鍛冶滓に分類される。但しこちらの処理鉄は高炭素素材を扱った靱性（硬く粘りをもつ）に富む刃物類に係った鉄器製作が想定される。

MNK-3　含鉄椀形滓（２区溝１出土）：平面が不整形で218gの椀形滓である。滓の鉱物相は、Photo.2②に示すウスタイト＋ファヤライト、含鉄は③④にみられるフェライト組織（硬度値は109Hv、110Hv）の小鉄片の残存ながら廃鉄器投入が推定できる。また別視野⑤では過共析域（231Hv ～260Hv）の鉄粒存在の確認がとれた。卸し鉄（おろしがね）製作時の排滓の可能性を提示しておく。Table2に化学組成を示す。全鉄分は最も多くて52.87％を含み、造滓成分は逆に最も低く15.86％に留め、脈石成分Mn、Cuらも低減傾向が著しい。卸し鉄説を補強する。

MNK-4　含鉄椀形滓（土壙26出土）：上面に黒色ガラスを付着した不定形状塊で606ｇを測る。一見炉壁溶融物を連想させた。顕微鏡試料は３箇所でａ表層ガラス部分（上部小片）、ｂ表層内側含鉄部分（上部中片）、c中核部を対象とする。ａはPhoto.2⑥⑦に示す如く木炭片噛込みの低温晶出鉱物のファヤライト単独相[注2]、ｂも滓はａと同じのファヤライト、鉄部は過共析域（265Hv ～270Hv）である。ｃの鉱物相になると従来鍛冶滓のウスタイト+ファヤライト、鉄粒はパーライト地（210Hv ～212Hv）に塊状黒鉛（軟質：143Hv）を留めた高炭素材の組織であった。化学組成は全鉄分が若干低下の39.27％で、高炭素（5.30％ C）、高燐（1.13％ P_2O_5）が注目されて、脈石成分らには特異点は認められない。

MNK-5　鉄塊系遺物（土壙８出土）：長さ40×幅48×厚さ2.3㎜重量55g弱の平面不整円形で偏平な鉄塊系遺物である。メタル厚みは約10㎜程度が推定されて遺存度が良好な金属鉄組織をPhoto.3の①～⑤に示す。②は鉄中非金属介在物にウスタイト（FeO）を内臓する。鉄はフェライト単独相に斜線の結晶すべり線の塑性変形により形成された変形双晶（Deformation twin）が認められる。大鍛冶場で銑（ずく）の炭素を酸化除去（「さげ」「本場」工程）した錬鉄の包丁鉄破片の要素が窺える[注3]。フェライト硬度値は正常部⑤で140Hv、双晶部④は148Hvと大差ない値となった。双晶部は硬化傾向著しい筈であり、時効劣化が現われている。Photo.4の上段5-①は鉄中介在物の捲込みスラグのウスタイト、下段5－②は折返し曲げ鍛接線上に晶出したウスタイトのＥＰＭＡ調査結果である。分析点1と4からウスタイトの存在が証明された。

Table.2に化学組成を示す。Fe：99.9%、不純物：0.1%の高純度鉄である。現代の工業用純鉄成分に匹敵するもしくはそれ以上の延・展性を有し、よく鍛錬の効く特性をもつ。言葉を変えれば粘性と加工性の優れた材質が保証される。Table.2には参考までに19世紀末の島根県都合山鈩出土包丁鉄の化学成分を記載した。これに比べて少しの遜色もない。

因に包丁鉄は俵国一博士の記録によれば様々な大きさがあり、一例として長さ60cm、幅11cm、厚さ1cmが示されてある[注4]。差し当たり南方遺跡出土の鉄塊系遺物はこの様なサイズが原形として考えられよう。

註

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968
ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。

(2) ファヤライトの低温安定に関する実験論文と筆者（大澤）はホーロー焼成実験の体験から割り出した推定温度である。

(2) －１　Womes.D.R.and Gilbert.M.C（1969）The fayalite－magnetite－quarts assemblage between 600° and 800℃ American Journal of Science.Schairer Vol.267－A.p.480－488
水熱反応実験で600°のファヤライト生成を示す。

(2) －２　O´Neill. H.Si.C.（1987）Quartz－Fayarite－iron and quartz－fayarite－magnetite equilibria and the free energy of formation of fayalite（Fe2SiO4）and magnetite（Fe3O4）. American Mineralogist.Vol.72.p.67－75.
電気化学反応で1000K（700℃）前後のファヤライト生成を確認。

(2) －３　Roedder.E（1952）A reconnaissance of liguidus relations in the system K2O・2SiO2－FeO－SiO2. Amer.Jour.Science.Bowen Volume. P435－456
金属鉄と平衡する条件で、800℃までファヤライト生成が「推定」されている。（カリの存在でファヤライトの生成温度が低下する）

(3) 角田徳幸・大澤正己「都合山鈩出土鉄関連遺物の金属学的調査」『都合山鈩の研究』2010（符号TUG－6錬鉄（包丁鉄）の金属組織からも変形双晶が検出された。）

(4) 俵国一『古来の砂鉄製法－たたら吹き製鉄法－』丸善株式会社　1933

Table 1 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		磁着度	メタル度	調査項目								備考
						大きさ（mm）	重量（g）			マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
MNK-1	南方遺跡	2区東南端包含層	87	鉄滓	江戸後半	102.1×87.4×60.1	429.4	-	M（◎）	○	○	○			○			
MNK-2		2区南端包含層	86	鉄滓	江戸後半	168.0×139.5×56.5	1098.2	-	L（●）	○	○	○			○			
MNK-3		2区溝1	101	鉄滓	江戸後半	82×90×29	218.4	-	L（●）	○	○	○			○			
MNK-4		土壙26	92	鉄滓	江戸後半	122.2×117.5×86	606.3	-	M（◎）	○	○	○			○			
MNK-5		土壙8	123	鉄塊系遺物	江戸後半	40×48×23	54.8	-	特L（☆）	○	○	○		○	○			

Table 2 供試材の組成

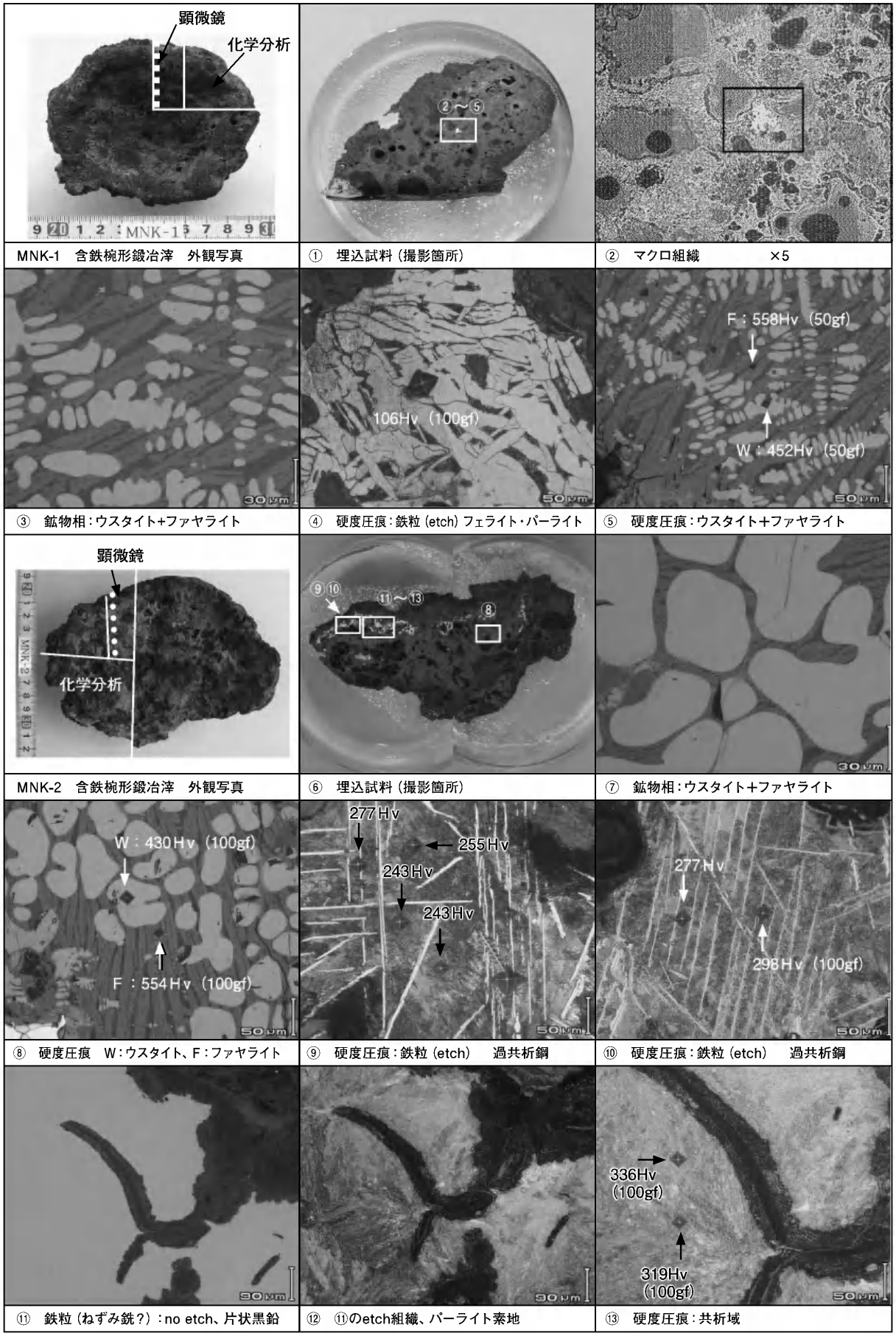
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	*二酸化珪素 (SiO_2)	*酸化アルミニウム (Al_2O_3)	*酸化カルシウム (CaO)	*酸化マグネシウム (MgO)	*酸化カリウム (K_2O)	*酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO_2)	Σ*造滓成分	造滓成分 ——— Total Fe	TiO_2 ——— Total Fe	注
MNK-1	南方遺跡	2区東南端包含層	鉄滓	江戸後半	48.91	0.37	46.20	18.06	17.99	3.62	2.32	0.58	1.23	0.36	0.24	0.20	0.02	0.14	0.69	1.84	<0.01	<0.01	0.01	26.10	0.534	0.004	
MNK-2		2区南端包含層	鉄滓	江戸後半	43.63	0.92	40.31	16.27	22.47	4.21	3.70	0.92	2.41	0.41	0.34	0.20	0.01	0.09	0.79	1.88	0.01	<0.01	0.01	34.12	0.782	0.005	
MNK-3		2区溝1	鉄滓	江戸後半	52.87	4.16	49.15	15.02	10.73	1.84	2.08	0.35	0.72	0.14	0.29	0.10	0.01	0.08	0.66	3.64	<0.01	<0.01	<0.01	15.86	0.300	0.002	
MNK-4		土壙26	鉄滓	江戸後半	39.27	1.08	38.37	11.96	17.39	3.42	5.37	1.01	1.91	0.30	0.40	0.18	0.01	0.09	1.13	5.30	<0.01	<0.01	0.01	29.40	0.749	0.005	

					C	Si	Mn	P	S	Cu	Cr	Ti	V	As	Co	注
MNK-5	南方遺跡	土壙8	鉄塊系遺物	江戸後半	0.02	0.02	0.004	0.016	0.002	0.004	0.007	<0.01	<0.01	0.009	0.009	
TUG-6	都合山鉄	2号大鍛冶場跡2号炉	錬鉄（包丁鉄）	1899年	0.03	0.07	<0.01	0.016	0.015	<0.01	<0.01	0.01	<0.01	0.01	0.01	(3)

Table 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
						Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	ガラス質成分	Cu	
MNK-1	南方遺跡	2区東南端包含層	鉄滓	江戸後半	滓部：W+F、微小鉄粒：fe・pe	48.91	18.06	2.90	0.20	<0.01	0.24	26.10	<0.01	亜共析域（<0.77％C）鉄含みの鍛錬鍛冶滓
MNK-2		2区南端包含層	鉄滓	江戸後半	滓部：W+F、微小鉄粒：pe地にC、pe地にgr	43.63	16.27	4.62	0.20	0.01	0.34	34.12	<0.01	亜共析域（<0.77％C）鉄、鋳鉄含みの鍛錬鍛冶滓
MNK-3		2区溝1	鉄滓	江戸後半	滓部：W+F、微小鉄片：fe、鉄粒：pe地にC	52.87	15.02	2.43	0.10	<0.01	0.29	15.86	<0.01	亜共析・過共析域鉄（スクラップ）含みの鍛錬鍛冶滓
MNK-4		土壙26	鉄滓	江戸後半	滓部：（上部小、中片）F単独、（中片鉄粒）：pe地にC 滓部：（中核部）W+F、鉄粒：pe地にgr	39.27	11.96	6.38	0.18	<0.01	0.40	29.40	<0.01	過共析域鉄、鋳鉄含みの鍛錬鍛冶滓
MNK-5		土壙8	鉄塊系遺物	江戸後半	鉄のみ：非金属介在物W、fe単独相にtw	C 0.02	Si 0.002	Mn 0.004	P 0.016	S 0.002	Cu 0.004	Ti <0.01	V <0.01	鍛冶原料鉄の可能性、高純度包丁鉄

W：wustite（FeO）、F：fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）、fe：ferrite（純鉄、α鉄）、pe地にC：pearlite（フェライトとセメンタイトが交互に重なり合って構成された層状組織）地にpro-eutectoid cementite（初析セメンタイト）、gr：graphite（黒鉛）、tw：twin（双晶、塑性変形により形成された変形双晶）



MNK-1　含鉄椀形鍛冶滓　外観写真

① 埋込試料（撮影箇所）

② マクロ組織　×5

③ 鉱物相：ウスタイト+ファヤライト

④ 硬度圧痕：鉄粒（etch）フェライト・パーライト

⑤ 硬度圧痕：ウスタイト+ファヤライト

MNK-2　含鉄椀形鍛冶滓　外観写真

⑥ 埋込試料（撮影箇所）

⑦ 鉱物相：ウスタイト+ファヤライト

⑧ 硬度圧痕　W：ウスタイト、F：ファヤライト

⑨ 硬度圧痕：鉄粒（etch）　過共析鋼

⑩ 硬度圧痕：鉄粒（etch）　過共析鋼

⑪ 鉄粒（ねずみ銑？）：no etch、片状黒鉛

⑫ ⑪のetch組織、パーライト素地

⑬ 硬度圧痕：共析域

Photo. 1　含鉄椀形鍛冶滓（ＭＮＫ-1、2）の顕微鏡組織

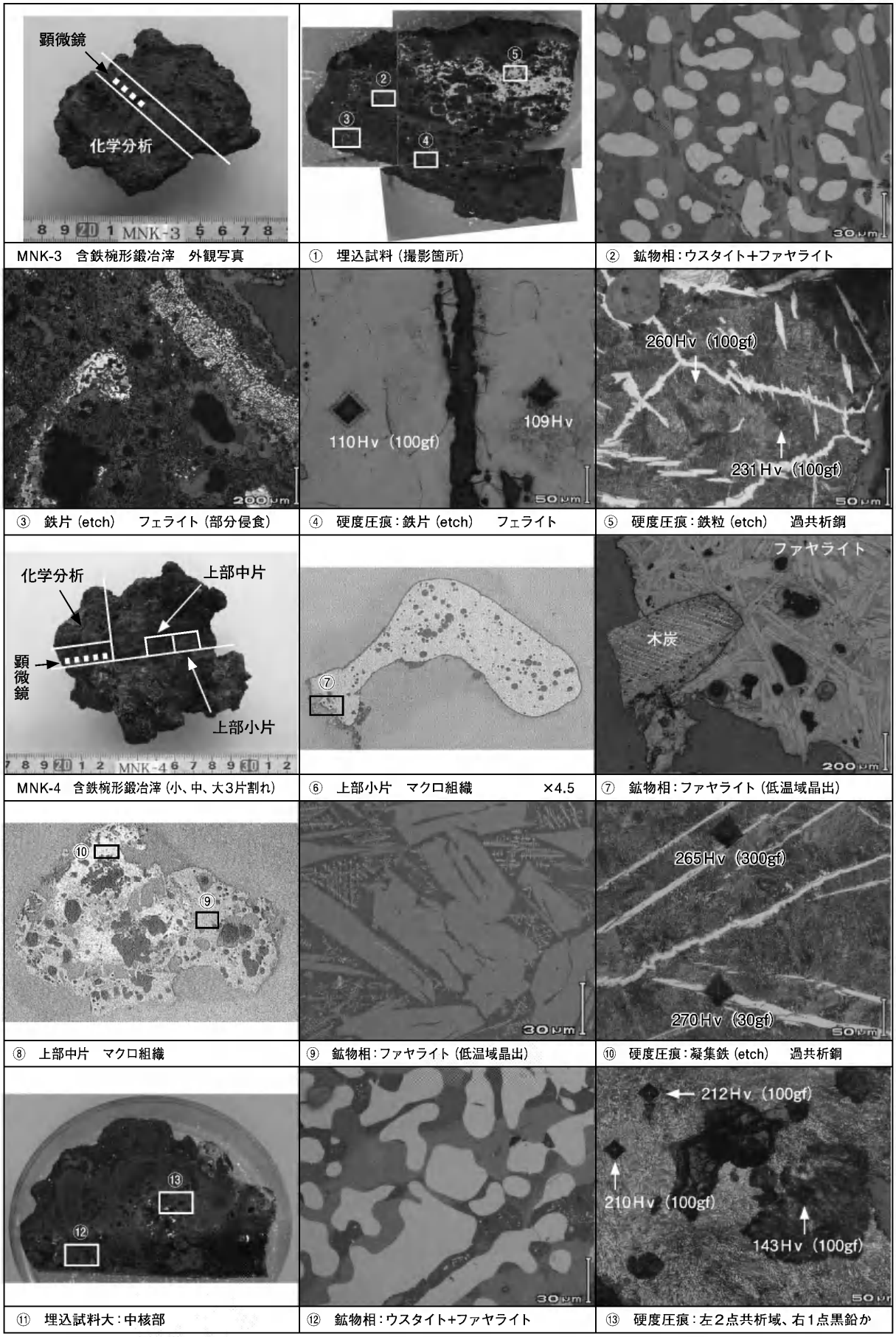
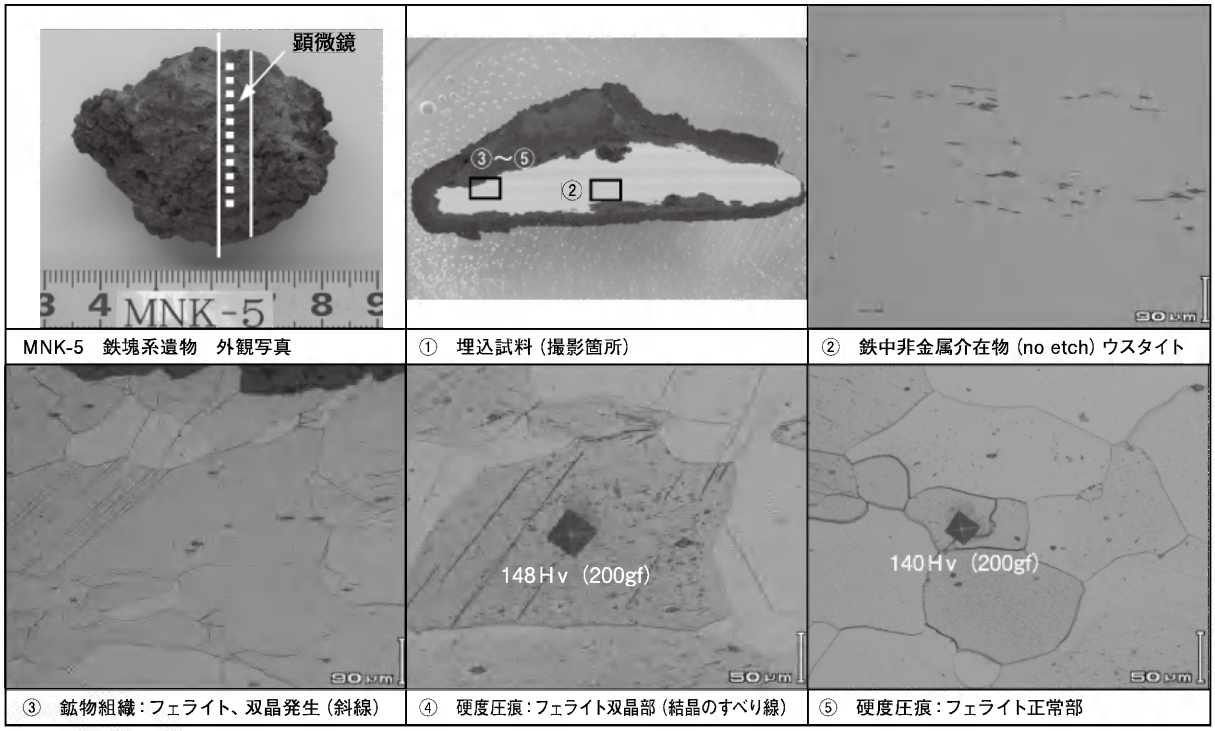


Photo. 2　含鉄椀形鍛冶滓（MNK-3、4）の顕微鏡組織



MNK-5　鉄塊系遺物　外観写真

①　埋込試料（撮影箇所）

②　鉄中非金属介在物（no etch）ウスタイト

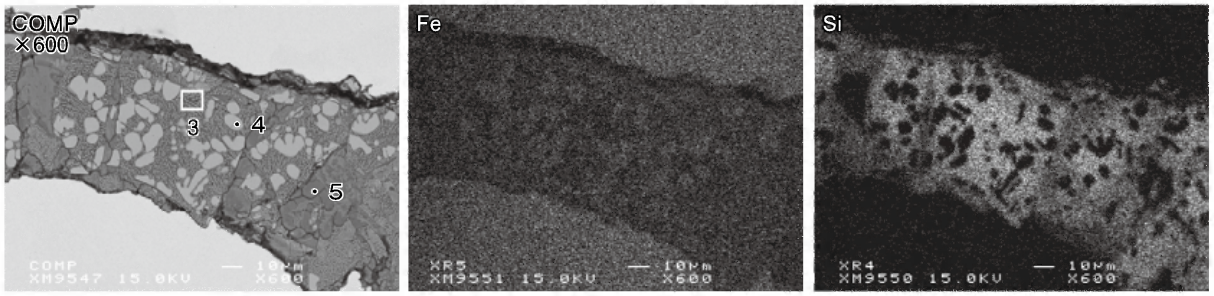
③　鉱物組織：フェライト、双晶発生（斜線）

④　硬度圧痕：フェライト双晶部（結晶のすべり線）

⑤　硬度圧痕：フェライト正常部

Photo. 3　鉄塊系遺物（MNK-5）の顕微鏡組織

MNK-5-①



MNK-5-②

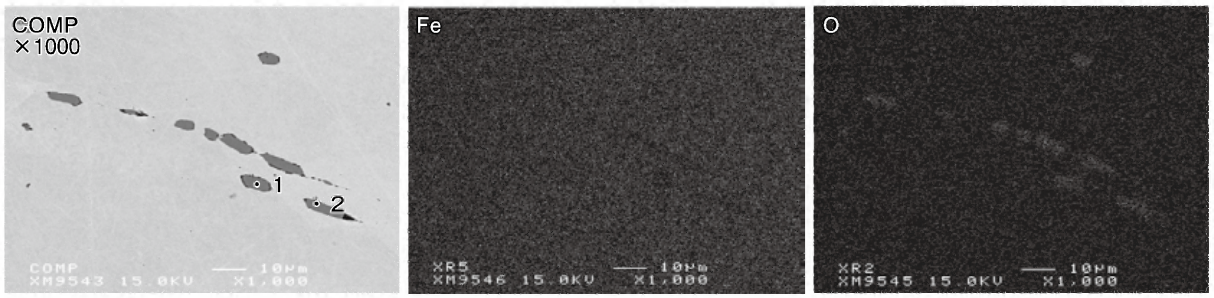


Photo. 4　鉄塊系遺物（MNK-5）
鉄中非金属介在物のEPMA調査

Element	1	2	3	4	5
Na_2O	0.019	–	1.011	0.025	0.089
MgO	–	–	0.073	–	0.017
Al_2O_3	–	–	10.475	0.775	6.465
SiO_2	0.086	0.081	35.543	0.334	17.732
P_2O_5	–	0.028	0.675	0.016	0.092
S	0.010	0.006	0.155	0.010	0.032
K_2O	–	–	3.705	0.012	0.044
CaO	–	–	3.806	0.003	0.664
TiO_2	–	–	0.231	0.747	–
Cr_2O_3	–	–	–	–	–
MnO	0.030	0.013	0.126	0.010	–
FeO	81.124	82.257	36.152	80.908	50.284
As_2O_5	–	0.022	0.107	–	0.004
V_2O_3	–	–	0.013	0.109	–
Total	81.269	82.407	92.072	82.949	75.423

付載２　南方遺跡土壌の花粉・植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、弥生時代中期～中世の調査区ないしその周辺の古環境に関する情報を得ることを目的として、花粉・植物珪酸体分析を実施した。本報告では紙面の都合で調査成果の概要について報告する。詳細報告は岡山県古代吉備文化財センターに保管されているので参照されたい。

１　分析結果

（１）花粉分析

花粉化石群集の層位分布図を図1に示す。弥生時代中期以前ではⅢ－５層（各層の位置は第６図参照）で木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉では針葉樹のモミ属、マツ属、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のコナラ亜属が多産し、針葉樹のツガ属、コウヤマキ属、落葉広葉樹のクマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。Ⅲ－４層では花粉化石がほとんど産出しない。

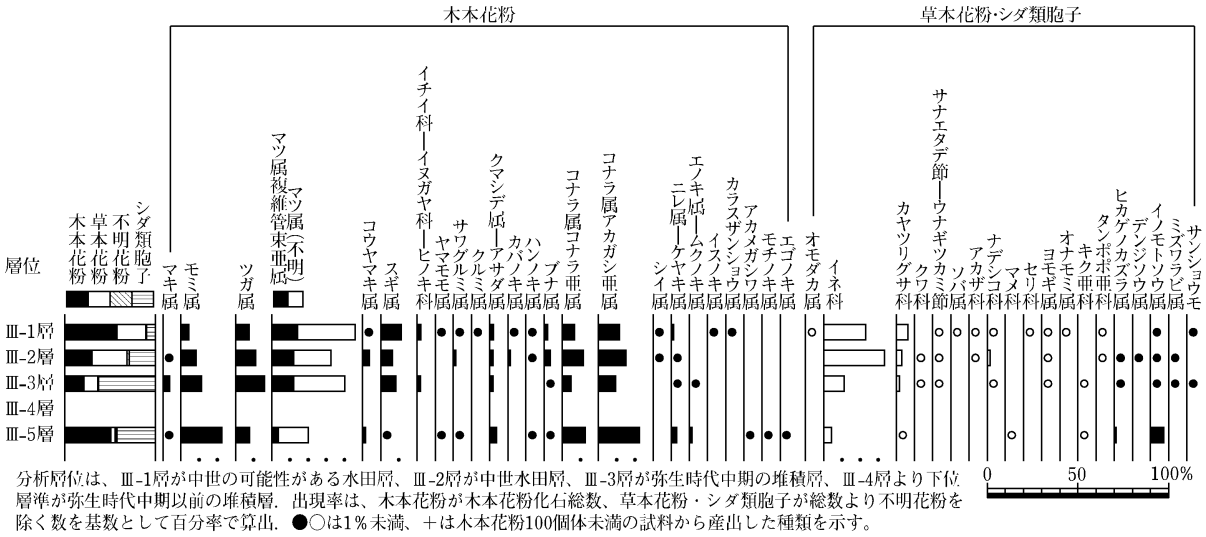
弥生時代中期のⅢ－３層は花粉化石の保存状態が悪く、偏った組成になっている可能性が高い（風化に耐性のある針葉樹花粉が過大評価されている）。木本花粉では針葉樹のマツ属が増加し、常緑・落葉広葉樹が減少している。草本花粉は多少増加する。

中世のⅢ－２層及び最上位のⅢ－１層では草本花粉が増加する。中でもイネ科の増加が顕著であり、種類構成も多様になり、水生植物のオモダカ属、デンジソウ属、ミズワラビ属、サンショウモ、Ⅲ－１層で栽培種のソバ属が検出される。木本花粉では二次林の代表的な樹種であるマツ属が優占する。

（３）植物珪酸体分析

分析結果を表１、図２に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

弥生時代中期およびそれ以前のⅢ－５層～Ⅲ－３層では植物珪酸体含量が少なく、タケ亜科などがわ



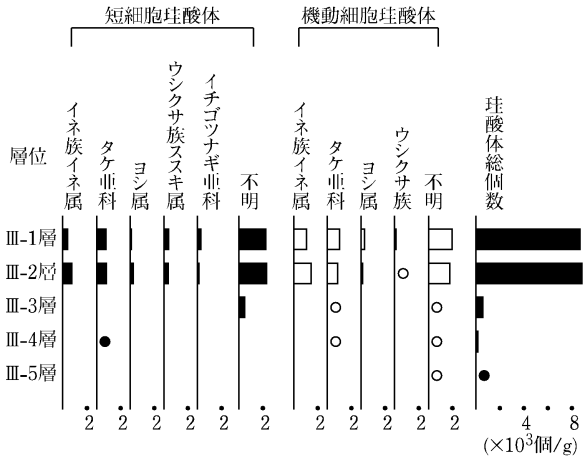
分析層位は、Ⅲ-1層が中世の可能性がある水田層、Ⅲ-2層が中世水田層、Ⅲ-3層が弥生時代中期の堆積層、Ⅲ-4層より下位層準が弥生時代中期以前の堆積層．出現率は、木本花粉が木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出．●○は1％未満、＋は木本花粉100個体未満の試料から産出した種類を示す。

図１　１区西壁の花粉化石群集の層位分布

表１　１区西壁の植物珪酸体分析結果

種類（分類群）	層位				
	Ⅲ-1層	Ⅲ-2層	Ⅲ-3層	Ⅲ-4層	Ⅲ-5層
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	400	700	-	-	-
タケ亜科	800	800	-	<100	-
ヨシ属	100	200	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	400	400	-	-	-
イチゴツナギ亜科	300	100	-	-	-
不明	2,300	2,300	500	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1,100	1,500	-	-	-
タケ亜科	1,000	800	<100	<100	-
ヨシ属	300	100	-	-	-
ウシクサ族	100	<100	-	-	-
不明	2,000	1,800	<100	<100	<100
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	4,200	4,600	500	<100	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,400	4,200	100	100	<100
総　計	8,700	8,800	600	200	<100

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めた値として示す。合計は各分類群の丸める前の値を合計した後で丸めた値である。<100は100個/g未満を示す。



分析層位は、Ⅲ-1層が中世の可能性がある水田層、Ⅲ-2層が中世水田層、Ⅲ-3層が弥生時代中期の堆積層、Ⅲ-4層より下位層準が弥生時代中期以前の堆積層．棒グラフは堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す。

図２　１区西壁の植物珪酸体含量の層位的変化

ずかに認められるに過ぎない。

中世のⅢ－２層とⅢ－１層では、植物珪酸体含量が増加し、栽培植物であるイネ属が特徴的に産出するようになる。イネ属の含量密度は、Ⅲ－２層の短細胞珪酸体が約700個／ｇ、機動細胞珪酸体が約1,500個／ｇ、Ⅲ－１層の短細胞珪酸体が約400個／ｇ、機動細胞珪酸体が約1,100個／ｇである。また百分率で計算した、イネ属産出率は、Ⅲ－２層の短細胞珪酸体が約15％、機動細胞珪酸体が約36％、Ⅲ－１層の短細胞珪酸体が約10％、機動細胞珪酸体が約25％である。イネ属以外ではタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。

２　考察

弥生時代中期以前のⅢ－５層・Ⅲ－４層形成期は、後背山地などを中心に常緑広葉樹のアカガシ亜属などからなる暖温帯林が成立していたとみられる。また、落葉広葉樹のコナラ亜属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属などは河畔林の構成要素でもあり、当時もそのような場所を中心に生育していたものと思われる。一方、調査区は、草本花粉や植物珪酸体含量が少ないことから（分解消失した可能性もある）、草地植生の発達しない、開けた場所であった可能性がある。

弥生時代中期のⅢ－３層形成期も、周辺植生は依然として暖温帯性の植生であったが、二次林の代表的な樹種であるマツ属が目立つ植生に変化したとみられる。この変化の原因の一つとして、人為的な植生撹乱が考えられる。一方、調査区はイネ科やカヤツリグサ科などの草本類が生育していたものの、これらが繁茂する草地でなく、開けた場所であった可能性が高い。

中世のⅢ－２層・Ⅲ－１層形成期には、調査区の景観が一変する。イネ科花粉が多産し、栽培植物のイネ属由来の植物珪酸体が比較的多く産出することから、イネ科の卓越する草地植生、あるいは水田などの耕作地に変化したことが推定される。Ⅲ－２層・Ⅲ－１層では発掘調査により水田遺構が検出されていることと同調的な変化であり、ここでの植生変化が人間活動に起因する変化であることがうかがえる。周辺の森林植生に対しても、二次林の代表的な樹種であるマツ属花粉の増加などから、人為的な撹乱が及んでいたことが推定される。

付載３　南方遺跡の種実・樹種同定結果

株式会社古環境研究所

表１　南方遺跡における種実同定結果

試料番号	遺構名	分類群 学名	分類群 和名	部位	個数	備考
1	土壙13	*Prunus persica* Batsch	モモ	核（半形）	1	
2	土壙12	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核	1	
3	土壙12	*Prunus persica* Batsch	モモ	核（半形）	1	
4	土壙11	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
		Prunus persica Batsch	モモ	核	2	
				（半形）	1	
		Cucurbita moschata Duch.	カボチャ	種子	1	
5	土壙11	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
6	土壙11	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
7	土壙１	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	
8	土壙３	*Torreya nucifera* S. et Z.	カヤ	種子	1	
		Prunus persica Batsch	モモ	核	1	
9	溝１	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
		Prunus persica Batsch	モモ	核	1	
11	溝１Ｂ	*Cucumis melo* L.	ウリ類	種子	1	
12	溝１Ａ	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
13	溝１Ａ	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	1	
		Prunus persica Batsch	モモ	核	2	
14	溝１Ｂ	*Cucurbita moschata* Duch.	カボチャ	果梗	1	
15	溝１Ｂ	*Alnus*	ハンノキ属	果実	1	昆虫片5
		Morus australis Poir.	ヤマグワ	種子	4	
		Prunus mume S. et Z.	ウメ	核	2	
				（破片）	1	
		Prunus sect. *Pseudocerasus*	サクラ属サクラ節	核	2	
		Rubus	キイチゴ属	核	1	
		Zanthoxylum piperitum DC.	サンショウ	種子	1	
		Eieusine indica Gaertn.	オヒシバ	種子	2	
		Echinochloa Ohwi et Yabuno	ヒエ	穎	1	
		Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実（炭化）	1	
		Scirpus	ホタルイ属	果実	1	
		Carex	スゲ属	果実	7	
		Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	2	
		Polygonum	タデ属	果実	8	
		Urticaceae	イラクサ科	種子	1	
		Amaranthus	ヒユ属	種子	25	
		Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	33	
		Oxalis	カタバミ属	種子	2	
		Perilla frutescens var. *japonica* Hara	エゴマ	果実	1	
		Perilla	シソ属	果実（破片）	1	
		Solanum melongena L.	ナス	種子	1	
		Cucumis melo L.	ウリ類	種子	2	
		Cucurbita moschata Duch.	カボチャ	種子	1	
		Asteroideae	キク亜科	果実	1	
16	溝１上包含層	*Melia azedarach* L. var. *Subtripinnata* Miq.	センダン	核	1	
		Cucumis melo L.	ウリ類	種子	2	
		Cucurbita moschata Duch.	カボチャ	種子	5	
18	土壙15	Cucurbitaceae	ウリ科	種子（破片）	(+++)	
19	土壙15	Cucurbitaceae	ウリ科	種子（破片）	(+++)	
20	溝１Ｂ	*Juglans ailanthifolia* Carr	オニグルミ	核（破片）	1	
21	溝１Ｂ	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	毬果	1	
22	溝１Ｂ	*Prunus mume* S. et Z.	ウメ	核	42	
				（破片）	3	同一個体片有
23	溝３	*Quercus acutissima* Carr	クヌギ	堅果	1	
24	溝３	*Prunus persica* Batsch	モモ	核	1	
25	土壙28	*Cucumis melo* L.	ウリ類	種子	5	
				（破片）	1	
		Cucurbita moschata Duch.	カボチャ	種子	2	

表２　南方遺跡大型種実計測値

・カヤ

試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
8	21.85	11.40	—

・オニグルミ

試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
2	29.29	29.68	20.65

・クヌギ

試料	長さ(mm)	幅(mm)
23	25.54	18.02

・モモ

試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
3	23.97	16.30	12.74
	24.70	16.67	—
4	25.39	18.63	13.79
	21.67	16.30	8.35
	28.18	18.92	—
7	26.61	20.81	18.34
8	20.62	16.39	13.47
9	27.99	18.89	14.11
13	25.86	16.59	13.26
	29.54	19.20	14.36
24	26.44	17.41	13.79

・センダン

試料	長さ(mm)	幅(mm)
16	14.80	7.98

・ウリ類

試料	長さ(mm)	幅(mm)
11	7.32	3.63
16	7.54	3.35
	7.92	3.97
25	7.68	3.77
	6.61	3.12
	6.94	3.25
	7.24	3.74
	7.93	3.47
	7.72	3.76
	7.58	3.62

・カボチャ

試料	長さ(mm)	幅(mm)
4	13.86	7.59
15	14.08	8.50
16	11.45	6.98
	12.45	6.35
	11.03	7.20
	11.57	7.50
	10.52	6.98
25	11.70	7.38
	10.01	6.82

・ウメ

試料	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)
4	15.14	11.33	9.29
5	18.10	14.42	11.31
6	16.44	12.18	10.11
9	17.13	13.26	9.76
13	14.50	9.80	8.31
15	16.10	12.39	10.29
	19.39	13.67	—
22	27.62	22.05	15.33
	26.44	22.33	15.75
	21.16	18.05	14.60
	23.75	20.90	14.35
	25.66	21.02	14.03
	23.79	20.68	14.78
	24.90	20.57	14.94
	25.89	21.17	15.08
	24.66	20.93	15.45
	17.00	14.25	11.60
	21.85	19.22	15.09
	25.04	21.44	15.22
	22.25	19.75	15.02
	21.75	18.70	12.59
	21.08	18.40	12.75
	18.47	16.55	12.26
	18.01	15.50	12.07
	17.91	14.29	11.14
	18.23	15.12	11.24
	17.22	14.56	10.98
	15.58	12.63	8.82
	18.02	14.75	11.53
	17.60	14.65	11.71
	16.08	14.22	12.09
	16.31	14.78	11.93
	16.28	14.11	11.69
	16.07	13.19	10.61
	16.29	14.18	11.58
	14.48	12.33	10.41
	16.75	13.21	11.35
	16.11	13.55	10.66
	14.53	12.57	10.30
	13.86	11.90	10.05
	21.80	18.55	15.96
	15.39	12.03	10.77
	16.34	13.87	11.57
	14.96	12.40	10.34
	15.57	13.37	11.34
	17.09	13.16	9.12
	16.77	14.17	11.34
	17.15	13.73	11.16
	16.31	—	10.58
	23.48	20.70	—

表３　南方遺跡における樹種同定結果

試料番号	遺構名	サンプル番号	時期	備考	結果（学名／和名）	
1	溝１	杭②	江戸	方形 釘･ほぞ穴	*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.	クリ
2	溝１	胴木⑤	江戸	丸太材	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ
3	溝１Ｂ	杭③	江戸	先端部	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ
4	土壙28	杭①	江戸	先端部	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ
5	土壙19	杭④	江戸	先端部	*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.	アカマツ
6	土壙19	板材①	江戸	幅は元のままか	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
7	土壙19	板材②	江戸	３片に割れる	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
8	井戸３	W22	古墳前期	端部加工木材	*Camellia japonica* Linn.	ヤブツバキ

付載４　南方遺跡出土動物遺体属性表

魚上綱一覧

遺物番号	枝番号	出土地区名	遺構名	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	成長度	破損
11	1	1区	土壙10	硬骨魚綱	マゴチ	腹椎	M	椎体	-	?
38	1	2区	土壙18	硬骨魚綱	タイ科	上擬鎖骨	L	完形	-	なし？
23	1	1区	溝1B	硬骨魚綱	マゴチ	歯骨	R	完形 一部欠損	-	?
23	2	1区	溝1B	硬骨魚綱	マゴチ	舌顎骨	L	完形	-	なし
23	3	1区	溝1B	硬骨魚綱	マゴチ	腹椎	M	椎体、完形一部欠損	-	cm 切断
9	1	1区	溝1	硬骨魚綱	タイ科	擬鎖骨	R	dia	-	?
9	2	1区	溝1	硬骨魚綱	スズキ目	擬鎖骨	R	dia	-	?
9	3	1区	溝1	硬骨魚綱	クロダイ	前上顎骨	R	完形	-	なし
9	4	1区	溝1	硬骨魚綱	クロダイ	角骨	R	完形	-	なし
9	6	1区	溝1	硬骨魚綱	クロダイ	方骨	R	完形	-	?
10	1	1区	溝1	硬骨魚綱	マダイ	前頭骨	L	右側欠損	-	?
10	2	1区	溝1	硬骨魚綱	スズキ	主總蓋骨	L	完形一部欠損	-	cm不明
10	3	1区	溝1	硬骨魚綱	マゴチ	腹椎	M	椎体	-	cm（Aaタイプ）
10	4	1区	溝1	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	椎体 ＋ 血管棘	-	?
12	1	1区	溝1	硬骨魚綱	タイ科	尾椎	M	完形	-	cm（Dla血管棘）
12	2	1区	溝1	硬骨魚綱	マゴチ	尾椎	M	椎体	-	?
28	1	2区	溝1	硬骨魚綱	タイ科	前上顎骨	R	完形（前位）	-	なし？
1	1	1区	1区包	硬骨魚綱	サバ属	前上顎骨	L	前位＋歯	-	cm（Aaタイプ後）

鳥綱・爬虫綱・哺乳綱一覧

遺物番号	枝番号	出土地区名	遺構名	大分類	小分類	部位名	LRM	部分	成長度	破損
2	1	1区	土壙12	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	完形	P.d：f	イヌ噛み痕dist ＋ dia
3	1	1区	土壙12	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	L	完形（関節復位 一部欠損）	f	cm（Dlaタイプ）棘上
5	1	1区	土壙12	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dist ＋ dia	d：f	イヌ噛み痕dist
6	1	1区	土壙12	哺乳綱	ニホンジカ	大腿骨	R	dia	uf	SP(prox)イヌ噛み痕dist
31	1	2区	土壙19	哺乳綱	ニホンジカ	歯M3	L	完形一部欠損（歯根部）	f	なし？
39	1	2区	土壙19	爬虫綱	スッポン	上腹甲板	LR	完形	?	?
40	1	2区	土壙20	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	did	?	sp（dia）
43	1	2区	土壙22	哺乳綱	イエネコ	下顎骨	L	完形（前位欠損）dp2、3、4、0	uf	?
18	1	1区	溝1A	哺乳綱	シカ科	肩甲骨	L	dist ＋ did	d：uf	なし？
19	1	1区	溝1A	爬虫綱	スッポン	背甲骨板	LR?	dia	?	?
20	1	1区	溝1A	鳥綱	マガンクラス	手骨中手骨	L	完形一部欠損	f	cm切断
21	1	1区	溝1A	鳥綱	カラス属	尺骨	R	完形	f	?
22	1	1区	溝1A	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	前位 ＋ prox	p：f	sp ？（dia）
33	1	2区	溝1A	鳥綱	ニワトリ	足根中足骨	L	完形	f	なし
34	1	2区	溝1A	哺乳綱	ニホンジカ	寛骨	L	完形（腸骨・座骨・恥骨一部欠損）	f(寛骨臼)	Dlaタイプ（腸骨外側）
35	1	2区	溝1A	哺乳綱	ニホンジカ	胸椎	M	椎体＋棘突起＋左関節突起	ant.post:uf	?
44	1	1区	溝1A	哺乳綱	ニホンジカ	肩甲骨	R	完形	f	cm（dlaタイプ）
15	1	1区	溝1B	哺乳綱	イヌ	橈骨	R	完形	f	なし
16	1	1区	溝1B	哺乳綱	ニホンジカ	脛骨	R	dia	?	sp（dist ＋ dia） cm（Dla、dia後左）
29	1	2区	溝1B	哺乳綱	ニホンジカ	中足骨	L	完形	f	なし？
30	1	2区	溝1B	哺乳綱	イヌ	下顎M1	L	完形一部欠損	f	?
37	1	2区	溝1B	哺乳綱	ニホンジカ	踵骨	L	完形	f	?
37	2	2区	溝1B	哺乳綱	ニホンジカ	第3基節骨	l	完形	f	なし
37	3	2区	溝1B	哺乳綱	ニホンジカ	第4基節骨	r	完形	f	なし
45	1	1区	溝1C	両生綱	カエル目	寛骨	R	完形	?	?
13	1	1区	溝1	哺乳綱	イノシシ類	大腿骨	L	完形	p:f d:fとじ	偽切創（prox）
14	1	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肩甲骨	R	完形一部欠損	f	?
14	2	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	環椎	M	完形	f	なし
14	3	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	下顎	LR	完形一部欠損	f	?
14	4	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	上腕骨	L	完形	f	?
14	5	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	上腕骨	R	完形	f	なし
14	6	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	大腿骨	R	完形	f	d：cm ？ ?
14	7	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	脛骨	R	完形	f	
14	8	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	第3頸椎	M	完形	f	なし
14	9	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	橈骨	L	完形	f	なし
14	10	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	橈骨	R	完形	f	なし
14	11	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	尺骨	L	完形	f	なし
14	12	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	尺骨	R	完形	f	なし
14	13	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	頸椎	M	完形 一部欠損	f	?
14	14	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	胸椎	M	完形 一部欠損	f	?
14	15	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	胸椎	M	完形一部欠損	f	?
14	16	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	腓骨	R	prox ＋ dia	f	?
14	17	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	第1中足骨	L	完形	f	なし
14	18	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	第1中足骨	R	完形	f	なし
14	19	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	第2中足骨	L	完形	f	なし
14	20	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	第4中手骨	R	完形	f	なし
14	21	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	R	完形	f	なし
14	22	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	R	完形	f	?
14	23	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	R	prox ＋ dia	f	?
14	24	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	R	完形一部欠損	f	proxmaldiaで2分される
14	25	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	R	完形一部欠損	f	diaで2分される
14	26	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	L	完形	f	なし
14	27	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	L	完形	f	なし
14	28	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	L	prox ＋ dia	f	?
14	29	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	L	prox ＋ dia	f	?
14	30	1区	溝1	哺乳綱	イヌ	肋骨	L	dia	f	?
36	1	1区	溝1	鳥綱	ドバト	頭骨	M	後頭骨、頭頂骨	f	
25	1	2区	溝1	哺乳綱	イノシシ類	上腕骨	L	dist ＋ dia	d：f	イヌ噛み痕？（prox）
27	1	2区	溝1	哺乳綱	ニホンジカ	上腕骨	L	dist ＋ dia	d：f	イヌ噛み痕（prox）
7	1	1区東	1区包	哺乳綱	イエネコ	大腿骨	L	完形	P.d：f	なし
26	1	2区	2区包	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	R	関節部 ＋ dia	p：f ？	イヌ噛み痕
41	1	2区	溝3	哺乳綱	イヌ	下顎骨	R	骨体部	f	dia：cm ？ ?

※富岡直人、立石和也（岡山理科大学）の同定による

遺構一覧表

井戸

掲載遺構名	調査区名	旧遺構名	掘り方（cm）			井側（cm）			底面海抜高（cm）	出土遺物	時期
			長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ			
井戸1	1区	12	321	225	213	80	72	213	−21	陶磁器・土師器・瓦質土器・古銭・木器	18世紀末～19世紀
井戸2	2区	47	105	98	107				56	陶磁器・土師器	19世紀半ば以降
井戸3	2区	40	79	70	82				97	土師器・木器	古墳前期

土壙

掲載遺構名	調査区名	旧遺構名	平面形	規模（cm）			断面形	底面海抜高（cm）	出土遺物	時期
				長さ	幅	深さ				
土壙1	1区	13	隅丸方形	400	370	86	逆凸形	88	陶器・煙管雁首	18世紀後半～19世紀前半
土壙2	1区	18	長方形	463	383	77	逆凹型	88	陶磁器・土師器・木製椀	19世紀代
土壙3	1区	19	長方形	110	90	10	逆台形	158	陶器皿・土師器皿	18世紀後半～19世紀代
土壙4	1区	50	楕円形	70	45	16	椀形	158	煙管雁首	18世紀前半
土壙5	1区	51	楕円形	80	61	13	皿形	162	陶器椀・土師器皿	18世紀前半
土壙6	1区	53	方形	215	(90)	100	長方形	80	磁器碗・土製鋳型	18世紀前半
土壙7	1区	6	不整楕円形	520	428	72	逆凸形	116	陶磁器・土師器・木器・陶製人形	18世紀後半～19世紀代
土壙8	1区	5	方形	186	170	20	長方形	160		19世紀代
土壙9	1区	9	不整方形	710	192	22	皿形	162	陶器皿・擂鉢・木製下駄	17世紀後半以降
土壙10	1区	10	楕円形	140	139	34	椀形	155	磁器皿・瓦・木製櫛	18世紀後半以降
土壙11	1区	4	方形	277	234	51	長方形	140	陶磁器・土師器・瓦質土器・木器・陶製人形・金属器・碁石	19世紀中頃以降
土壙12	1区	3	不整円形	390	(212)	84	椀形	142	陶磁器・土師器・木器	19世紀前半以降
土壙13	1区	2	不整形	284	(142)	26	皿形	165	陶磁器	19世紀前半以降
土壙14	1区	7	不整形	(101)	(49)	34	不整形	66	−	
土壙15	2区	43	楕円形	230	220	44	逆凹型	146	陶磁器・土師器・木器・人形	19世紀前半以降
土壙16	2区	44	楕円形	148	134	18	皿形	174		19世紀前半以降
土壙17	2区	46	隅丸方形	202	188	30	皿形	162	備前焼甕	19世紀前半以降
土壙18	2区	45	不整楕円形	932	278	38	皿形	152	陶磁器・金属器・人形	19世紀前半以降
土壙19	2区	31	方形	690	518	50	不整形	140	陶磁器・土師器・木器・金属器	18世紀中頃以降
土壙20	2区	36	隅丸方形	584	400	96	逆台形	94	陶磁器・木器・金属器	18世紀後半～19世紀前半
土壙21	2区	34	不整形	632	276	24	皿形	166	陶磁器・土製品・煙管吸口	18世紀後半～19世紀前半
土壙22	2区	37	長方形	444	296	40	逆台形	140	陶磁器	17世紀代
土壙23	2区	30	不整長方形	475	97	17	長方形	176	陶磁器	19世紀前半
土壙24	2区	24	楕円形	240	(140)	15	皿形	174	陶磁器・木製椀	19世紀前半
土壙25	2区	29	長楕円形	187	90	55	長方形	182	陶磁器	18世紀後半以降
土壙26	2区	27	長楕円形	(365)	205	22	皿形	170	陶磁器	18世紀後半以降
土壙27	2区	28	楕円形	143	125	17	皿形	173		18世紀後半以降
土壙28	2区	26	隅丸方形	358	260	50	椀形	120	陶磁器	18世紀後半以降
土壙29	2区	23	不整形	215	140	27	皿形	164	陶磁器・木器	19世紀前半
土壙30	2区	55	不整形	148	(107)	118	不整形	82	弥生土器	弥生時代後期末葉
土壙31	T3		楕円形	107	(56)	71	袋状	77	−	弥生時代後期末葉

溝・たわみ

掲載遺構名	調査区名	旧遺構名	規模（cm）			断面形	底面海抜高（cm）	出土遺物	時期
			検出長	幅	深さ				
溝1A	1・2区	1C	4750	175	60	逆台形	136～175	陶磁器・土師器・瓦・瓦質土器・金属器・木器・貝・獣魚骨	18世紀前半以降
溝1B	1・2区	1B	6550	108	32	逆台形	185		18世紀後半以降
溝1C	1・2区	1A	6550	120	34	逆台形	148～182		19世紀前半以降

掲載遺構名	調査区名	旧遺構名	規模（cm）			断面形	底面海抜高（cm）	出土遺物	時期
			検出長	幅	深さ				
溝２	２区	11	1850	80	36	逆台形	177	陶磁器・土師器	18世紀前半
溝３	１・２区	8･35	3860	84	37	方形	150	陶磁器・瓦	17世紀後半～18世紀前半
溝４	２区	57	230	(39)	10		215	陶磁器・瓦	18世紀後半以降
溝５	２区	49	1200	32	8	逆台形	161	―	古墳時代
溝６	２区	48	950	27	8	逆台形	181	弥生土器	古墳時代
溝７	２区	38	1360	26	9	不整形	170		弥生時代
溝８	２区	39	1000	56	9	不整形	170	弥生中期土器	弥生時代中期
たわみ１	１区	21	720	100	11	不整形	164		弥生時代中期
たわみ２	２区	22	1440	177	15	不整形	165	―	弥生時代中期

※海抜高は断面実測部分で計測。

杭列

掲載遺構名	調査区名	旧遺構名	規模（cm）		時期
			検出長	杭間	
杭列１	１区	58	610	130	江戸時代後半
杭列２	２区	42	1440	70	江戸時代後半
杭列３	２区	41	1840		江戸時代後半

遺物観察表

土器

掲載番号	図番号	遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調　素:素地　文:文様	胎土 長：長石　石：石英 赤：赤色酸化粒	状態	形態･手法の特徴など
					口径	底径	器高				
1	8	井戸１	染付	小碗	8.3	3.3	4.6	素:灰白(N8/)　釉:薄墨色(N6) 文:藍鼠(7.5PB4.5/2.5)	精良	ほぼ完形	
2	8	井戸１	染付	小碗	8.4	3.3	4.4	素:灰白(N8/)　釉:灰白(10Y7/1) 文:鼠色(N5.5)	精良	ほぼ完形	
3	8	井戸１	染付	碗	9.2	4.2	5.1	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/2弱	18世紀末～19世紀か
4	8	井戸１	磁器	碗	―	4.4	(2.2)	素･釉:ホワイト(N9.5)　文:珊瑚色(2.5R7/11)	精良	体～底部1/5	赤絵磁器
5	8	井戸１	染付	碗	11.2	5.0	6.3	素:ホワイト(N9.5)　釉:千草色(10G7/2.5) 文:青藍(4.5PB3/7)	精良	1/2弱	染付青磁 1760～1780か
6	8	井戸１	磁器	小碗	5.2	2.2	3.3	素･釉:ホワイト(N9.5)　文:珊瑚色(2.5R7/11)	精良	1/2弱	赤絵磁器
7	8	井戸１	染付	碗	9.4	3.5	5.3	素･釉:ホワイト(N9.5)　文:鉄紺(7.5PB1.5/2)	精良	ほぼ完形	18世紀後半か
8	9	井戸１	染付	碗	9.2	3.6	5.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/2弱	見込み二重圏線に五弁花
9	9	井戸１	染付	碗	11.4	4.4	6.5	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/4	18世紀末～19世紀か
10	9	井戸１	染付	鉢	14.3	9.0	10.3	素:灰白(N7/)　釉:薄鈍色(N7)　文:鉄納戸(10B3.5/2.5)	精良	1/3	
11	9	井戸１	染付	皿	9.8	5.2	2.1	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/4	長(6.9cm) 幅(5.7cm) 最大厚1.8cm
12	9	井戸１	青磁	瓶	9.5	―	(9.8)	素:ホワイト(N9.5)　釉:セラドン(10GY7.5/1.5)	精良	口縁～肩部2/3	仏花瓶
13	9	井戸１	青磁	香炉	10.0	7.0	6.4	素:ホワイト(N9.5) 釉:アイスグリーン(7.5G8.5/2.5)	精良	1/3	
14	9	井戸１	青磁	香炉	11.0	―	(5.1)	素:ホワイト(N9.5) 釉:アイスグリーン(7.5G8.5/2.5)	精良	口縁～体部1/3	
15	9	井戸１	白磁	壺	―	6.3	(6.3)	素･釉:褐灰(10YR6/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	体～底部3/4	
16	9	井戸１	染付	水滴				素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	全体の1/4程度	長(3.85cm)　幅(4.95cm) 高(3.4)cm
17	9	井戸１	陶器	椀	9.4	3.3	6.0	素:灰白(2.5Y8/2)　釉:灰黄(2.5Y7/2) 文:緑(2.5G6.5/10)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2強	
18	9	井戸１	陶器	小椀	6.8	2.4	3.8	素:灰(5Y5/1)　釉:オリーブ灰(10Y6/2) 文:緑(2.5G6.5/10)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	ほぼ完形	
19	9	井戸１	陶器	椀	9.0	4.7	6.5	素:褐灰(10YR6/1)　釉:明オリーブ灰(2.5GY7/1)　文:灰黄(2.5Y6/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/3	
20	9	井戸１	陶器	鉢	12.8	―	(8.8)	素:灰白(2.5Y8/2)　釉:浅黄(2.5Y7/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁～体部1/4	
21	9	井戸１	陶器	鉢	31.2	21.4	17.5	素:灰白(10YR8/2)　釉:象牙色(2.5Y8.5/1.5)　文:深緑(5G3/7)	1mm以下砂粒 長、石少	1/4	胎土に耳残存1個
22	9	井戸１	備前焼	小壺	5.4	6.3	7.3	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	2mm以下砂粒 長、石少	1/3	底面焼成後穿孔1個
23	9	井戸１	備前焼	壺	―	8.0	(8.3)	暗赤褐(10R3/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	胴～底部1/2	
24	9	井戸１	備前焼	瓶	―	10.4	(12.8)	暗赤(10R3/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	胴部1/4底部1/1	底面窯印
25	9	井戸１	備前焼	鉢	5.7	8.0	7.4	暗灰黄(2.5Y4/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	緋襷痕 窯印
26	9	井戸１	陶器	擂鉢	―	14.0	(7.2)	橙(2.5YR6/8)	4mm以下砂粒、礫 長、石、赤少	体～底部1/4	堺･明石系か
27	9	井戸１	備前焼	匣鉢	10.0	11.0	6.75	赤灰(2.5YR5/1)	2mm以下砂粒 長、石少	1/3	
28	9	井戸１	備前焼	甕	22.8	―	(11.5)	暗赤褐(2.5YR3/3)	1mm以下砂粒 長、石少	口縁～胴部1/5	
29	9	井戸１	備前焼	灯明受皿	10.2	―	1.8	暗赤(10R3/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	ほぼ完形	油溝3個 内外面に泥しょう塗布
30	9	井戸１	備前焼	灯明受皿	7.8	―	1.3	灰赤(2.5YR4/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	

掲載番号	図番号	遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調　素:素地　文:文様	胎土 長：長石　石：石英 赤：赤色酸化粒	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高				
31	9	井戸１	土師器	皿	13.2	8.6	1.9	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下砂粒 長、石少	1/4	イトキリ
32	9	井戸１	土師器	皿	7.7	4.2	1.4	灰褐(7.5YR6/2)	1mm以下砂粒 長、石少	3/4	イトキリ
33	9	井戸１	土師器	皿	8.3	6.6	1.4	灰白(2.5Y8/1)	1mm以下砂粒 長、石少	ほぼ完形	イトキリ
34	9	井戸１	土師器	焙烙	35.4	－	(3.3)	黄灰(2.5Y4/1)	3mm以下砂粒 、礫 長、石少	口縁部1/5	
35	10	井戸１	土師器	焙烙	32.0	－	(6.7)	灰黄褐(10YR6/2)	2mm以下砂粒 長、石少	口縁部1/3	口縁紐通しあり
36	10	井戸１	瓦質	火鉢	30.0	27.0	10.0	黒(10YR2/1)	2mm以下砂粒 長、石少	1/3	4本足か
37	12	土壙１	陶器	椀	8.6	－	(4.3)	素:灰白(2.5Y8/1)　釉:にぶい黄(2.5Y6/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁部～杯部1/8	
38	13	土壙２	磁器	皿		5.6	(1.2)	素:ホワイト(N9.5)　釉:パールホワイト(5Y 9/0.5)　文:薄群青(7PB5/12)	精良	見込み3/4	内面赤絵 潤朱(7.5R5/8)、銀が黒色化か
39	13	土壙２	染付	皿	10.4	5.5	2.55	素:ホワイト(N9.5)　釉:パールホワイト(5Y 9/0.5)　文:紺青(5PB3/4)	精良	4/5程度	輪花 内面コンニャク印版、菊花文
40	13	土壙２	染付	仏飯器	7.0	4.0	5.4	素:にぶい黄橙(10YR6/3)　釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:薄花色(2.5PB6.5/5.5)	1mm以下砂粒少 長、石	口縁1/3底部1/1	
41	13	土壙２	染付	水滴				素:パールホワイト(5Y9/0.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3) 文:群青色(7.5PB3.5/11)	精良	4/5程度	長10.75cm　幅6.3cm 高3.6cm
42	13	土壙２	染付	皿	21.0	13.7	2.8	素:アイボリー(2.5Y8.5/1.5)　釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:スマルト(5PB3.5/6)	1mm以下砂粒少 長、石	1/4弱	肥前Ⅳ期18C前半代か 畳付釉剥ぎ、離れ砂
43	13	土壙２	陶器	椀	10.1	4.0	7.1	素:にぶい黄橙(10YR7/3) 釉:暗褐(10YR3/3)	1mm以下砂粒少 長、石	2/3	
44	13	土壙２	陶器	鉢	19.4	7.4	5.6	釉:にぶい黄褐(10YR5/4) 素:灰黄(2.5Y7/2)		口縁部1/3底部完	肥前刷毛目皿　蛇ノ目釉剥ぎ
45	13	土壙２	陶器	鬢水入れ				素:灰白(7.5Y8/1) 釉:灰褐(7.5YR4/2)		1/3	長(6.0cm)　幅(6.7cm) 器高3.7cm
46	13	土壙２	備前焼	擂鉢	(35.3)		(9.4)	外:にぶい赤褐(2.5YR4/3) 内:にぶい赤褐(2.5YR4/4)	1mm以下砂粒少 長、石	口縁部1/8以下	
47	13	土壙２	備前焼	擂鉢	17.9	7.7	6.7	外:にぶい赤褐(5YR4/3) 内:褐灰(10YR4/1)	1～2mm砂粒中 長、石、赤	2/3程度	
48	14	土壙２	備前焼	擂鉢		(21.8)	(8.5)	外:にぶい赤褐(2.5YR4/4) 内:褐灰(5YR4/1)	1mm以下砂粒少 長	底部1/8以下	高台内窯印
49	14	土壙２	備前焼	瓶		12.1	(9.1)	外:暗赤褐(5YR3/3)　内:褐灰(10YR4/1)	1mm以下砂粒少 長、黒色粒	底部3/4胴部1/3	船徳利
50	14	土壙２	備前焼	匣鉢蓋	19.4	15.2	2.2	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	1mm以下砂粒中 長、石、赤	1/3	
51	14	土壙２	陶器	土瓶	2.5	3.2	3.7	素:にぶい橙(7.5YR7/4)　釉:灰白(N8/0)、緑青色(4G5/4)、金色少し含む	精良	注ぎ口のみ欠損	底面墨書「廿三」か
52	14	土壙２	土師器	焙烙	31.2		(6.0)	外:黒(N2/)　内:にぶい黄橙(10YR6/3)	1mm前後砂粒少 長、黒色粒	口縁部1/4	穿孔1個残
53	15	土壙３	陶器	皿	－	－	(2.0)	素:灰白(5Y7/1)　釉:黄褐(2.5Y5/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	底部破片	
54	15	土壙３	土師器	皿	8.3	4.3	1.3	橙(5YR6/6)	0.5mm以下砂粒 長、石少	1/2弱	底部:糸切り
55	16	土壙５	陶器	椀		4.9	(1.95)	素:灰白(2.5Y8/1)　釉:灰白(7.5Y7/1)		高台部	見込み目跡3か所、高台部目上付着3か所
56	16	土壙５	土師器	灯明受皿	11.2	6.9	2.05	黒(N2/)	1mm以下砂粒少 長	口縁端部1/4欠損	内面墨書?、灯芯痕　全体に灰化
57	17	土壙６	染付	碗		4.2	(1.3)	素:釉:ミルキーホワイト(10YR9.2/0.5) 文:群青色(7.5PB3.5/11)	精良	高台部	景徳鎮か
58	19	土壙７	染付	皿		12.4	(2.4)	素:灰白(5Y8/1)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	底部1/5	17世紀代後半?
59	19	土壙７	染付	猪口		(3.5)	(3.8)	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	1/6以下	型押しに濃み　畳付釉剥ぎ
60	19	土壙７	白磁	猪口	5.2	3.0	3.0	素:釉:ミルキーホワイト(10YR9.2/0.5)	1mm以下砂粒少 長、石	1/2	
61	19	土壙７	染付	椀	9.9	3.6	5.2	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:藍色(2PB3/5)	1mm以下砂粒少 長、石	杯部～底部1/2弱	
62	19	土壙７	陶器	椀	(9.2)		(4.0)	素:にぶい赤褐(2.5YR5/3)		口縁部1/6	肥前刷毛目
63	19	土壙７	陶器	皿	10.35	3.5	3.5	素:暗灰黄(2.5Y5/2)　釉:灰白(5Y8/2)		口縁2/3欠、他完存	口縁部折り曲げ1か所
64	19	土壙７	陶器	鉢	3.6	3.3	2.1	素:灰黄(2.5Y7/2)　釉:灰白(5Y7/2)	1mm以下砂粒少 長、石	取っ手以外完形	餌入れ　底面窯印
65	19	土壙７	陶器	瓶		(14.6)	(12.8)	素:灰黄(2.5Y7/1)　釉:灰白(7.5Y7/1)	精良	胴部1/8～底部	肥前　灰釉瓶
66	19	土壙７	備前焼	匣鉢	14.0	13.7	6.9	外:灰赤(10R5/2) 内:にぶい赤褐(2.5YR5/4)	1mm以下の砂粒多 長、石	1/5強	
67	19	土壙７	備前焼	瓶		8.3	(1.85)	外:赤褐(10R4/3)　内:赤褐(10R5/4)	精良	全体の1/2弱	底面窯印?　花立
68	19	土壙７	備前焼	甕	14.4		(9.4)	外:赤褐(10R4/3)　内:明赤褐(2.5YR5/6)	1mm以下の砂粒中 長、石	口縁部1/4	19条の沈線
69	19	土壙７	備前焼	擂鉢	23.6	10.6	9.1	灰赤(2.5YR4/2)	1mm以下砂粒多 長、石	1/4	
70	19	土壙７	備前焼	甕	29.7	18.4	34.9	外:赤褐(10R4/3)　内:赤褐(10R5/4)	1mm以下砂粒少 長	全体の1/3強	取っ手が退化し飾りに　現存1個(左右一対か)
71	19	土壙７	土師器	焙烙	(41.0)		(4.3)	黒(N2/)	1mm以下砂粒少 長	口縁部1/8	
72	21	土壙９	陶器	皿	－	3.8	(2.6)	素:にぶい黄橙(10YR6/3)　釉:灰(7.5Y6/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	底部1/2弱	肥前か　胎土目3個
73	21	土壙９	備前焼	擂鉢	－	－	(6.1)	灰赤(2.5YR5/2)	5mm以下砂粒 長、石少	口縁部破片	
74	21	土壙９	備前焼	擂鉢	－	14.0	(6.3)	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	6mm以下礫　長、石少	底部1/4	
75	22	土壙10	染付	小皿		4.0	1.4	素:釉:ホワイト(N9.5)　文:紺青(5PB3/4)	精良	1/2	
76	22	土壙10	瓦	軒丸瓦				黒(N2/0)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	瓦当部1/4	長(6.9cm) 幅(5.7cm) 最大厚1.8cm
77	22	土壙10	瓦	平瓦				黒(N2/0)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/4	長(12.3cm) 幅(13.0cm) 最大厚1.7cm
78	23	土壙11	染付	碗	12.3	6.4	7.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	4/5	広東碗　畳付離れ砂
79	23	土壙11	染付	碗	11.6	6.6	6.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:藍色(2PB3/5)	精良	1/4	畳付釉剥ぎ
80	23	土壙11	染付	碗	－	6.0	(1.9)	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:藍鉄色(5PB2.5/2)	精良	底部1/3	畳付釉剥ぎ　高台内焼継印
81	23	土壙11	白磁	猪口	5.0	2.8	3.3	素:釉:ホワイト(N9.5)	精良	1/2	畳付釉剥ぎ
82	23	土壙11	染付	碗	11.0	4.2	6.2	素:灰白(N8/)　釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:鉄納戸(10B3.5/2.5)	精良	1/3	畳付釉剥ぎ
83	23	土壙11	染付	碗	10.0	4.0	5.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:藍色(2PB3/5)	精良	4/5	畳付釉剥ぎ　高台内焼継印
84	23	土壙11	染付	碗	－	4.4	(4.1)	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:薄花色(2.5PB6.5/5.5)	精良	杯～底部1/3	畳付釉剥ぎ　高台内焼継印

掲載番号	図番号	遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調　素:素地　文:文様	胎土 長：長石　石：石英 赤：赤色酸化粒	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高				
85	23	土壙11	染付	碗	9.4	4.8	3.8	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:藍色(2PB3/5)	精良	1/2弱	畳付釉剥ぎ
86	23	土壙11	染付	猪口	5.0	2.8	2.9	素・釉:ホワイト(N9.5)　文:藍色(2PB3/5)	精良	1/2	畳付釉剥ぎ
87	23	土壙11	染付	小碗	7.4	4.2	6.7	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:縹色(3PB4/7.5)	精良	ほぼ完形	畳付釉剥ぎ
88	23	土壙11	染付	小碗	7.3	3.4	6.2	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:想思鼠(5.5PB7/5)	精良	ほぼ完形	畳付釉剥ぎ
89	23	土壙11	染付	蓋	8.7	3.3	2.8	素・釉:ホワイト(N9.5)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	ほぼ完形	畳付釉剥ぎ　高台内銘款、焼継印
90	23	土壙11	染付	蓋	8.6	3.3	3.7	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:薄藍(9B6.5/3)	精良	2/3	外面コンニャク印版、手書き　畳付釉剥ぎ
91	24	土壙11	染付	蓋	8.4	3.5	2.9	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:青藍(4.5PB3/7)	精良	ほぼ完形	高台内焼継印　畳付釉剥ぎ
92	24	土壙11	染付	蓋	9.2	3.8	3.9	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:瑠璃緑(6PB3/8)	精良	3/4	畳付釉剥ぎ
93	24	土壙11	染付	碗	—	6.0	(3.5)	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:青藍(4.5PB3/7)	精良	杯～底部1/3	畳付釉剥ぎ　高台内焼継印(赤色)
94	24	土壙11	染付	皿	20.0	10.8	4.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:鉄納戸(10B3.5/2.5)	精良	1/3	
95	24	土壙11	染付	鉢	17.0	9.5	7.3	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:濃藍(2PB2/3.5)	精良	4/5	輪花5単位　畳付釉剥ぎ 高台内銘款、焼継印
96	24	土壙11	染付	碗	15.0	6.0	7.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:群青色(7.5PB3.5/11)	精良	1/2	畳付釉剥ぎ
97	24	土壙11	染付	皿	11.8	8.0	2.3	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/4	蛇ノ目凹形高台　底面焼継印
98	24	土壙11	染付	皿	15.3	9.6	4.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:濃藍(2PB2/3.5)	精良	1/4	口縁端口紅、輪花　蛇ノ目凹形高台
99	24	土壙11	染付	皿	11.7	5.8	2.4	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	1/6	底面焼継印(赤色)
100	24	土壙11	染付	皿	13.8	7.8	3.7	素・釉:灰白(7.5Y7/1)　文:藍色(2PB3/5)	精良	1/2弱	蛇ノ目凹形高台
101	24	土壙11	磁器	蓋	3.0	—	1.5	素・釉:灰黄(2.5Y6/2)	精良	完形	
102	24	土壙11	磁器	蓋	5.4	—	(2.7)	素・釉:灰白(7.5Y8/1)	精良	4/5	
103	24	土壙11	染付	瓶	1.6	3.4	9.3	素・釉:ホワイト(N9.5)　文:藍鼠(7.5B4.5/2.5)	精良	2/3	仏具?
104	24	土壙11	染付	瓶	—	5.0	(9.6)	素・釉:ホワイト(N9.5)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	口縁部欠、他2/3	仏具(花立)
105	24	土壙11	青磁	植木鉢	17.7	10.7	14.0	素:ホワイト(N9.5)　釉:千草色(10G7/2.5)	精良	ほぼ完形	三田青磁　脚3(獅子?) 突起上下各14個　焼継
106	24	土壙11	陶器	椀	10.0	3.5	6.5	素:にぶい黄橙(10YR7/2)　釉:灰黄 (2.5Y7/2)　文:暗オリーブ灰(5GY3/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/4	瀬戸・美濃か
107	24	土壙11	陶器	椀	10.8	4.2	7.4	素:赤灰(2.5YR4/1)　釉:灰緑(1.5G5/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2	
108	24	土壙11	陶器	小椀	8.0	3.0	4.6	素:灰白(2.5Y7/1)　釉:にぶい黄(2.5Y6/3) 文:灰白(2.5Y8/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	
109	24	土壙11	陶器	小椀	7.2	—	(4.7)	素:にぶい黄褐(10YR5/4)　釉:灰白 (5Y8/1)　文:黒褐(7.5YR2/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁～杯部1/2	
110	24	土壙11	陶器	鉢	6.2	4.0	3.2	素:灰白(2.5Y8/1)　釉:灰黄(2.5Y7/2)	精良	3/4	餌入れか
111	24	土壙11	陶器	鉢	6.9	3.8	3.2	素:灰褐(7.5YR5/2) 釉:暗赤褐(2.5YR3/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2弱	餌入れ
112	24	土壙11	磁器	小碗	8.3	3.6	5.3	素:灰白(2.5Y8/1)　釉:灰黄(2.5Y6/2)	精良	3/4	
113	24	土壙11	陶器	小碗	9.2	3.8	5.3	素:灰白(10YR8/2)　釉:にぶい黄(2.5Y6/3) 文:浅黄(2.5Y5/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	畳付釉剥ぎ
114	25	土壙11	陶器	土瓶	7.4	—	(4.5)	素:灰(N6/)　釉:暗緑色(5G3/4)	0.5mm以下砂粒 長、石少	口縁～注口部1/3	注口部内側穴3個
115	25	土壙11	陶器	土瓶	7.2	8.3	14.0	素:にぶい黄橙(10YR6/3) 釉:暗褐(10YR3/4)　文:灰白(2.5Y8/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁～体部1/3	注口部内側穴3個
116	25	土壙11	陶器	蓋	18.0	—	(3.4)	素:にぶい橙(5YR6/4) 釉:明赤褐(5YR5/8)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	上部欠、他1/2	
117	25	土壙11	陶器	行平	15.0	6.0	8.4	素:灰白(2.5Y7/1)　釉:にぶい黄(2.5Y6/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2弱	注口・把手欠損　3足
118	25	土壙11	陶器	鍋	15.2	6.5	7.2	素:橙(5YR6/6)　釉:明赤褐(5YR5/6)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	3/4	双耳
119	25	土壙11	陶器	灯明受皿	8.6	5.5	5.2	素:灰白(2.5Y7/1)　釉:灰黄(2.5Y6/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	ほぼ完形	
120	25	土壙11	陶器	灯明受皿	9.2	3.5	1.7	素:灰白(N8/)　釉:灰白(7.5Y7/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	3/4	内面3条の櫛書文
121	25	土壙11	陶器	鉢	—	—	(4.5)	素:亜麻色(10YR8/2)　釉:灰緑(1.5G5/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁部破片	円形?透かし孔一部残存
122	25	土壙11	陶器	灯明受皿	9.6	5.5	1.3	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2弱	油溝3個、底面ケキリ
123	25	土壙11	陶器	皿	8.0	6.6	0.8	素:にぶい橙(5YR6/4)　釉:暗褐 (7.5YR3/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/3	内面木目、外面布目圧痕
124	25	土壙11	備前焼	皿	—	—	(1.6)	赤褐(10R4/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	破片	
125	25	土壙11	備前焼	皿	—	—	(1.7)	赤褐(5YR4/6)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	破片	
126	25	土壙11	備前焼	人形徳利	1.8	4.8	12.8	暗赤褐(2.5YR3/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	完形	底面窯印
127	25	土壙11	備前焼	甕	8.5	5.2	7.8	素:灰赤(10R4/2)　釉:暗赤褐(10R3/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/2	
128	25	土壙11	備前焼	灯明受皿	7.0	4.9	1.2	灰(5Y7/1)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	底面板目
129	25	土壙11	備前焼	灯明受皿	9.0	5.5	1.5	赤褐(10R5/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	2/3	
130	25	土壙11	備前焼	鉢	26.5	14.45	10.7	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	精良	全体の9/10	内外に緋襷
131	25	土壙11	備前焼	鉢	33.6	21.0	16.8	暗赤褐(2.5YR3/3)	2mm以下砂粒 長、石少	1/3	
132	25	土壙11	備前焼	擂鉢	30.4	17.6	14.0	赤褐(10R3/4)	3mm以下砂粒 長、石少	1/2弱	注口あり
133	25	土壙11	陶器	擂鉢	34.0	17.4	11.3	外:灰赤(10R4/2) 内:にぶい赤褐(2.5YR4/3)	1mm以下砂粒少 長、黒色粒	全体の2/3	堺・明石系か
134	25	土壙11	備前焼	匣鉢	29.0	29.6	10.2	赤(10R5/6)	8mm以下礫 長、石、黒色粒多	1/7	内面煤付着
135	26	土壙11	瓦	軒丸瓦				暗灰(N3/)	1mm以下砂粒中 長、石多	瓦当部ほぼ完形	長(14.9cm) 外径 (13.4cm) 残存厚1.4cm
136	26	土壙11	瓦	軒丸瓦				暗灰(N3/)	1mm以下砂粒少 長、石	瓦当部完形	長(8.75cm) 外径 (13.5cm) 残存厚1.5cm
137	26	土壙11	瓦	丸瓦				灰(N5/)	1mm以下砂粒多 長、石	ほぼ完形	長(22.2cm) 最大幅 12.4cm 最大厚1.8cm
138	26	土壙11	瓦	軒平瓦				暗灰(N3/)	精良	瓦当部完形	長(13.0cm) 外径 (4.0cm) 残存厚1.75cm 瓦頭幅22.6cm
139	26	土壙11	瓦質土器	焜炉	18.5	17.3	16.9	にぶい褐(7.5YR6/3)	1mm以下砂粒 長、石少	1/5	内面カキメ状ナデ
140	26	土壙11	土師器	皿	7.0	4.7	1.2	にぶい黄橙(10YR7/2)	2mm以下砂粒 長、石少	2/3	底部板目
141	26	土壙11	瓦質土器	焜炉				外・内:灰(N4/) 断:灰白(2.5Y7/1) 筒内:にぶい橙(10YR7/2)	1mm以下砂粒多 長、石	約1/4	最大高:27.8cm 最大長:39.0cm
142	26	土壙11	陶器	箱庭道具			(10.2)	文:オリーブ灰(10Y6/2)、黒(10YR1.7/1)、暗赤(10R3/6)	2mm以下砂粒少 石、雲母		推定3足で1足のみ残存

掲載番号	図番号	遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調　素:素地　文:文様	胎土 長：長石　石：石英 赤：赤色酸化粒	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高				
143	27	土壙12	染付	碗	10.4	4.2	5.9	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:青藍(4.5PB3/7)	精良	1/5	高台内焼継印　畳付釉剥ぎ
144	27	土壙12	染付	碗	9.9	4.0	4.9	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/2	畳付釉剥ぎ
145	27	土壙12	染付	皿	13.6	8.0	3.0	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	1/2弱	畳付釉剥ぎ
146	27	土壙12	染付	皿	19.0	12.0	2.9	素:ホワイト(N9.5)　釉:オイスターホワイト(5GY 8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	1/5	輪花16個か　畳付釉剥ぎ
147	27	土壙12	陶器	椀	16.0	5.6	5.1	素:灰白(2.5Y8/2)　釉:にぶい黄(2.5Y6/3)	0.5mm以下砂粒 長、石少	4/5	見込み蛇ノ目釉剥ぎ　刷毛目　裏面墨書　畳付砂目
148	27	土壙12	陶器	椀	13.4	5.2	6.4	素:灰白(5Y8/1)　釉:あまいろ(10YR8/2) 文:鉄納戸(10B3.5/2.5)	0.5mm以下砂粒 長、石少	2/3	
149	27	土壙12	陶器	鉢	－	9.5	(7.5)	素:にぶい赤褐(5YR4/3)　釉:暗赤褐(5YR3/2)　　文:灰白(5Y7/1)	5mm以下砂粒、礫、長、石少	体～底部1/3	内面刷毛目文様
150	27	土壙12	備前焼	甕	6.7	3.5	5.4	赤褐(2.5YR4/6)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/3	
151	27	土壙12	備前焼	匣鉢	10.0	10.8	6.0	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	2mm以下砂粒 長、石少	1/4	
152	27	土壙12	陶器	瓶	－	8.3	(2.7)	素:灰白(2.5Y8/2)　釉:浅黄(2.5Y7/3)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	底部1/4	底面露胎,黒褐色を呈する
153	27	土壙12	備前焼	灯明受皿	11.4	－	(1.8)	灰赤(2.5YR4/2)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/4	口縁黒色付着物あり
154	27	土壙12	備前焼	鉢	19.3	10.0	8.5	赤褐(10Y4/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	1/3	緋襷痕　窯印
155	28	土壙13	染付	碗	－	－	(4.5)	素:釉:ホワイト(N9.5)　文:藍色(2PB3/5)	精良	破片	
156	28	土壙13	白磁	小皿	5.4	2.8	1.7	素:釉:ホワイト(N9.5)	精良	4/5	
157	28	土壙13	染付	皿	－	9.7	(2.3)	素:ホワイト(N9.5)　釉:スノーホワイト(N9.5) 文:紺色(6PB2.5/4)	精良	底部1/4	
158	28	土壙13	磁器	碗	－	4.8	(2.1)	素:灰黄(2.5Y7/2)　釉:灰白(10Y7/1)	精良	底部1/2	
159	28	土壙13	陶器	鉢	－	－	(6.2)	素:灰褐(7.5YR4/2)　釉:黄枯茶(7YR4/3) 文:香色(2.5Y7.5/4)	0.5mm以下砂粒 長、石僅	口縁部破片	肥前刷毛目か
160	28	土壙13	土師器	皿	6.7	4.1	1.2	にぶい橙(7.5YR6/3)	1mm以下砂粒 長、石少	完形	イトキリ 穿孔1個あり
161	28	土壙13	土師器	皿	6.7	4.5	1.1	灰白(2.5Y7/1)	1mm以下砂粒 長、石少	3/4	イトキリ、板目
162	28	土壙13	陶器	擂鉢	22.0	11.0	7.7	赤(10R5/6)	1～7mm砂粒 、礫、長、石少	1/3	堺・明石系か
163	28	土壙13	備前焼	瓶	1.1		(5.7)	外:暗赤褐(2.5YR3/4) 内:にぶい赤褐(2.5YR5/4)	精良	口縁1/2～胴部1/3	人形徳利のミニチュアか外面布袋尊の型押し
164	28	土壙13	土師器	焜炉	26.2	－	(14.6)	外:灰褐(5YR4/2)内:褐灰(5YR4/1)	2mm以下砂粒 長、石少	口縁～胴部1/5	内面に瓶掛剥離痕
165	30	土壙 15・16	磁器	碗		3.65	(3.5)	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	底部7/8程度	色絵磁器 染付の上に色絵(赤、金、黒)
166	30	土壙 15・16	染付	猪口	8.6		(5.65)	素:ホワイト(N9.5)　釉:(外) 明緑灰(7.5GY7/1) (内) オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:紺色 (6PB2.5/4)	精良	口縁部～底部	肥前18世紀後半 染付青磁 四方襷
167	30	土壙 15・16	染付	皿	13.2	7.4	3.1	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	全体の1/4	肥前波佐見 うず福
168	30	土壙 15・16	陶器	椀	9.1	3.8	5.55	素:灰白(7.5Y7/1)　釉:灰(7.5Y6/1)	精良	全体の2/3	信楽　18世紀後半
169	31	土壙18	染付	蓋		3.4	(2.25)	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	見込み部分	瀬戸 19世紀　焼継
170	31	土壙17	備前焼	甕	14.6		(12.45)	外:黄灰(2.5Y4/1) 内:にぶい赤褐(2.5YR5/4)	精良	口縁部～胴部1/4	修復痕あり
171	32	土壙19	染付	碗	8.9	3.4	5.1	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	口縁1/8～見込み完	瀬戸 19世紀前半
172	32	土壙19	染付	猪口	7.7	4.6	5.75	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	全体の1/10程度	
173	32	土壙19	磁器	皿		8.1	(2.4)	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	見込み部分1/4弱	色絵:赤(10R5/6)　内:福 禄寿か 外:虫
174	32	土壙19	染付	鉢	13.4	9.7	3.85	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	1/3弱	肥前18世紀中か
175	32	土壙19	染付	碗	15.25	6.0	8.5	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:群青色(7.5PB3.5/11)	精良	口縁部1/8～残り完	肥前18世紀中か
176	32	土壙19	陶器	小椀	8.0		(5.0)	素:にぶい黄橙(10YR7/3) 釉:(外)にぶい橙 (7.5YR7/4) (内)灰白(2.5Y8/2)		口縁部～体部1/6	
177	32	土壙19	備前焼	瓶		7.8	(11.9)	外:暗赤褐(5YR3/2) 内:にぶい黄橙(2.5YR5/4)	精良	胴部1/4～底部4/5	底面窯印
178	32	土壙19	土師器	皿	8.7	6.9	1.1	にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm前後砂粒中 長、石、赤	完形	底面ヘラキリ、板目
179	33	土壙20	白磁	猪口	4.5	2.7	3.0	釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)		完形	
180	33	土壙20	陶器	椀	8.8	3.15	5.45	素:灰白(5Y8/1)　釉:灰白(5Y8/2)		口縁部1/2弱欠損	信楽 18世紀後半 口縁部に彩色
181	33	土壙20	陶器	灯明受皿	10.65	4.4	2.0	素:灰白(10Y7/1)　釉:灰白(5Y7/2)		口縁部1/3欠損	油溝1個
182	34	土壙21	磁器	碗	10.0		(4.0)	素:灰白(2.5Y8/1)　色絵　赤(10R5/8)		口縁部1/4強	色絵磁器(文様:花) 他色に黒・金彩
183	34	土壙21	備前焼	匣鉢蓋	14.1	8.4	1.65	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	1mm前後砂粒中 長、石、赤	全体の1/6	
184	34	土壙21	備前焼	擂鉢	29.8	10.5	12.3	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	1mm以下砂粒少 長、赤	全体の2/3以上	3破片修復痕あり
185	35	土壙22	染付	碗		4.1	(3.3)	素:ホワイト(N9.5) 釉:(外) 薄緑(1.5G8.5/4) (内)オイスターホワイト(5GY8.5/0.3) 文:紺色(2PB2.3/5)	精良	高台部付近1/4以下	染付青磁　うず福　17世紀中～後半
186	35	土壙22	陶器	椀	11.1	4.0	5.2	素:にぶい橙(5YR6/4) 釉:灰黄褐(10YR5/2)		口縁1/8見込み完	肥前刷毛目　見込みに漆?付着
187	36	土壙23	陶器	盤				素:灰白(10YR7/1)　釉:灰白(2.5Y7/1)	1mm砂粒多 長、石、赤	口縁部含む破片	器高(3.8cm) 残存長(9.45cm)
188	36	土壙23	陶器	椀	8.4	3.5	5.55	素:灰白(2.5Y8/1)　釉:灰白(5Y7/2)		1/2強	信楽 19世紀前半
189	37	土壙24	染付	角皿			(2.5)	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺色(2PB2.3/5)	精良	口縁部破片	
190	37	土壙24	磁器	角皿				素:ホワイト(N9.5) 釉:灰白(5Y7/2)・青灰 (10BG5/1)		口縁部破片	長(5.15cm) 幅(3.5cm) 最大厚(0.75cm)
191	37	土壙24	備前焼	擂鉢			(6.4)	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	1mm前後砂粒中 長、石	口縁部破片	
192	38	土壙25	染付	仏飯器	7.9	4.3	5.6	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	杯部1/2弱～脚部完	
193	38	土壙25	陶器	椀		4.6	(6.6)	素:にぶい赤褐(2.5YR4/3)、 釉:黒褐(5YR3/1)		高台部1/4	
194	38	土壙25	染付	大盤	50.2	4.0	9.1	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスター-ホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	口縁端部1/12、体部～見込みほぼ完	
195	38	土壙25	染付	皿	31.7	14.95	5.85	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:紺色(6PB2.5/4)	精良	全体の3/4強	
196	39	土壙26	染付	小碗	7.3	3.8	5.15	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト (5GY8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	口縁1/4弱～底部完	畳付釉剥ぎ 肥前18世紀後半

掲載番号	図番号	遺構名	種別	器種	計測値（cm）			色調　素:素地　文:文様	胎土 長：長石　石：石英 赤：赤色酸化粒	状態	形態・手法の特徴など
					口径	底径	器高				
197	39	土壙26	染付	碗	10.8	4.35	6.1	素:ホワイト(N9.5) 釉:(内)オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)（外）緑灰(5GY6/1)	精良	口縁1/3～体部1/2	染付青磁　畳付釉剥ぎ 離れ砂　肥前18世紀後半
198	41	土壙28	染付	碗	9.0	3.55	4.6	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	1/3	瀬戸
199	41	土壙28	染付	蓋	8.75	3.2	2.55	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:青藍(4.5PB3/7)	精良	つまみ1/2、体部1/8	瀬戸
200	41	土壙28	陶器	皿	8.75	3.05	1.6	素:灰白(5Y7/1) 釉:灰白(5Y7/2)		2/3程度	灰釉陶器、瀬戸? 見込みにトチン痕3個
201	42	土壙29	白磁	瓶	1.65	4.8	12.45	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)	精良	胴部1/5欠、他完	
202	42	土壙29	備前焼	擂鉢	9.1		(2.4)	外:暗赤褐(2.5YR3/3) 内:にぶい黄橙(2.5YR4/4)	精良	口縁部1/6強	玩具の擂鉢
203	42	土壙29	備前焼	擂鉢		13.8	(5.1)	にぶい赤褐(2.5YR4/3)	1mm前後砂粒少 長	底部1/5～体部若干	
204	47	溝1	磁器	皿	11.7	4.3	3.7	素・釉:灰白(7.5Y8/1)　文:薄花色(2.5PB6.5/5.5)	精良	口縁部1/3のみ欠損	内面蛇ノ目釉剥ぎ
205	47	溝1	染付	蓋	9.15	3.35	2.9	素:灰白(7.5Y7/1) 釉:(外)オリーブ灰(2.5GY6/1)(内)灰白(10Y7/1)	精良	全体の1/3弱	染付青磁 くらわんか茶碗蓋 肥前18世紀後半
206	47	溝1	染付	蓋	6.6		2.3	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	全体の3/4強	基部径(内径)6.6cm つまみ:3.3×0.7cm 帯状
207	47	溝1	染付	皿	14.6	9.2	2.5	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:瑠璃紺(6PB3/8)	精良	全体の1/4以下	
208	47	溝1	染付	皿	12.4	6.9	2.6	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	全体の1/2強	見込みに小鳥3羽　底部釘支え痕　肥前18世紀代
209	47	溝1	染付	皿	11.9	8.0	2.6	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:紺青(5PB3/4)	精良	全体の1/6以下	蛇ノ目凹形高台
210	47	溝1	染付	鉢		7.7	(6.8)	素:ホワイト(N9.5) 釉:オイスターホワイト(5GY8.5/0.3)　文:鉄納戸(10B3.5/2.5)	精良	見込み～体部	溝1A・1B出土が接合
211	47	溝1	陶器	小椀	8.75	4.25	5.5	素:褐灰(10YR6/1) 釉:(内)灰白(5Y8/2)		全体の3/4強	内面化粧土
212	47	溝1	陶器	小椀	9.4		(4.9)	素:灰白(2.5Y8/1) 釉:黒(7.5Y2/1)	精良	全体の1/4弱	瀬戸　天目茶碗
213	47	溝1	陶器	小椀	9.2	3.4	5.55	素:灰白(2.5Y8/2) 釉:にぶい黄(2.5Y6/3)		全体の2/3強	
214	47	溝1	陶器	小椀	9.0	3.2	5.4	素:灰白(5Y8/1) 釉:灰白(5Y7/2)		全体の1/2弱	
215	47	溝1	陶器	蓋	5.45		1.65	素:にぶい褐(7.5YR6/3) 釉:褐灰(10YR4/1)		全体の5/6以上	内面菊花型 上部線刻
216	47	溝1	備前焼	髪油壺	1.7	8.25	4.6	外:にぶい赤褐(5YR4/3) 内:明赤褐(2.5YR5/6)		口縁部1/3欠	底面陶印 外面カキメ27本
217	47	溝1	備前焼	壺	1.7		(3.05)	外:黒褐(7.5YR3/2)	1mm以下砂粒少　長	口縁部のみ欠損	ミニチュア 底面陶印 糸切り
218	47	溝1	陶器	壺	7.9	7.4	12.25	素:灰黄褐(10YR6/2) 釉:灰白(10YR8/1)	精良	口縁部1/6程度のみ欠損	肥前17世紀か　施釉:白泥釉　口はげ
219	47	溝1	陶器	鉢	14.2		(6.2)	素:にぶい橙(7.5YR6/4) 釉:オリーブ灰(5GY5/1)		口縁部1/4と破片	
220	47	溝1	陶器	鉢	6.8	6.65	5.8	素:にぶい橙(7.5YR7/4) 釉:灰白(10YR7/1)	精良	ほぼ完形	
221	47	溝1	備前焼	皿	8.8	4.4	1.4	赤褐(10R4/4)		全体の1/4弱	細かい波状口縁 型押し
222	47	溝1	土師器	灯明受皿	9.7	6.8	1.6	灰白(2.5Y7/1)	1mm以下砂粒中 長、石	口縁2/5程度欠損	底面イトキリ、板目
223	51	溝3	陶器	皿			(2.35)	素:灰(5Y6/1)　釉:灰オリーブ(7.5Y4/2)		口縁部破片	肥前　17世紀前半
224	51	溝3	瓦	軒丸瓦				暗灰(N3/)	1mm以下砂粒少 長、赤	破片	最大厚　2.0cm
225	55	包含層	陶器	瓶	5.2		(5.7)	素:にぶい橙(7.5YR7/4) 釉:黒褐(7.5YR3/1)	精良	口縁部1/8肩部1/6	内面墨書「竹内一郎」
226	55	包含層	備前焼	匙				赤褐(10R4/4)	精良	全体の2/3	長(7.9cm) 幅(4.9cm) 厚0.6cm
227	55	包含層	磁器	水滴				素:灰白(N8/) 釉:パールホワイト(5Y9/0.5)　文:瑠璃色(6PB3.5/11)	精良	完形	最大長3.5cm 最大幅3.0cm 最大厚(0.2cm) 染付「歩兵」
228	55	包含層	土師器	鉢	8.45	3.7	4.8～5.0	灰白(10YR8/1)	1mm前後砂粒少 長、石	ほぼ完形	底面イトキリ
229	55	包含層	瓦質土器	焜炉	16.35	15.1	17.3	外:灰(N4/) 内:灰白(5Y7/1) 断:灰白(7.5Y7/1)	精良	全体の4/5（後面1/3強欠損）	切り株仕立ての焜炉 上から内面穿孔7個、脚3足(2脚残存) 正面ハート型炊き口 木の節のデザイン3か所
230	57	井戸3	土師器	甕	15.0		27.9	灰黄(2.5Y7/2)	1mm前後砂粒中 長、石	口縁1/4～胴部3/4	外面煤付着
231	57	井戸3	土師器	甕	13.6		(24.55)	にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm前後砂粒多 長、石	全体の1/2強	内外面炭化物付着
232	57	井戸3	土師器	高杯	7.9	6.3	5.3	灰黄(2.5Y7/2)	1mm以下砂粒多 長、石、赤、黒色粒、角閃石、雲母	脚裾端部1/2強のみ欠損	
233	58	土壙30	弥生土器	甕			(2.0)	外(煤):黒(10YR2/1) 内:にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下砂粒中 長、石、赤	口縁部破片？	外面煤付着
234	60	溝8	弥生土器	甕			(1.9)	灰黄(2.5Y7/2)	1mm前後砂粒多 長、石、黒色粒、赤	口縁部破片	
235	60	たわみ1	弥生土器	壺	14.4	－	(4.4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下砂粒 長、石少	口縁部1/6	
236	61	包含層	弥生土器	壺	26.6		(2.7)	外:にぶい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4) 断:灰白(10YR8/2)	1～3mm前後砂粒多 長、石、赤、黒色粒	口縁部1/3程度	沈線　円形・棒状浮文
237	61	包含層	弥生土器	甕		5.4	(3.0)	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内・断:にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm前後砂粒多 長、石	底部のみ	
238	61	包含層	土師器	甕			(4.4)	外:灰黄褐(10YR5/2) 内:灰黄褐(10YR4/2)	1mm前後砂粒多 長、石、角閃石	口縁部破片	
239	61	包含層	須恵器	壺	(14.1)		(3.9)	外・内:灰(7.5Y6/1) 断:灰白(10YR8/2)	1mm以下砂粒中 長、黒色粒	口縁部1/8	
240	61	包含層	須恵器	杯		(8.0)	(1.35)	灰白(7.5Y7/1)	1mm以下砂粒中 長	高台部1/8以下	
241	61	包含層	土師器	椀		5.4	(1.5)	外:灰白(2.5Y7/1) 内:灰白(2.5Y8/2) 断:灰白(2.5Y8/1)	1mm以下砂粒多 長、石	高台部のみ	吉備系土師器椀
242	61	包含層	青磁	碗	－	6.0	(4.4)	素:灰白(N7/)　釉:干草色(10G7/2.5)	精良	体～底部1/4	龍泉窯系
243	61	包含層	白磁	碗	－	4.2	(2.7)	素:ホワイト(N9.5)　釉:秘色(2B8.5/2)	精良	底部	
244	61	包含層	亀山焼	甕	(48.6)		(11.6)	外:灰(N4/) 内:灰(10Y5/1) 断:灰(N4/)	1mm以下砂粒中 長	口縁部1/6弱	

土製品

掲載番号	図番号	遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	色調	胎土 長：長石 石：石英 赤：赤色酸化粒 雲：雲母	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
C1	10	井戸1	人形	73.1	41.8	26.7	55.37	内外:灰(5Y6/1)	0.5～2mm砂粒中 赤、長、黒色粒	土製　大黒天
C2	17	土壙6	鋳型	(44.0)	(108.0)	(50.0)	(195.45)	内:褐灰(7.5YR6/1) 外:橙(7.5YR7/6)	2mm以下の砂粒多 長、石、雲、赤	上側の型か
C3	19	土壙7	人形	(59.2)	(29.0)	21.0	(25.6)	釉:暗オリーブ灰(5GY4/1)・暗褐(10YR3/3)素:灰白(10YR8/1)	精良	陶製猿 背面に粘土接合痕
C4	26	土壙11	人形	(76.0)	(72.0)	(4.0)	(42.14)	釉:灰白(7.5Y7/1) 素:灰白(7.5Y8/1)	2mm以下の砂粒 長	陶製僧侶か　左手肩部に穿孔
C5	30	土壙15	人形	(69.2)	(41.8)	23.3	(56.01)	灰白(2.5Y7/1)	精良	土製　裳部分に墨痕か
C6	30	土壙15	人形	(52.3)	49.3	(31.3)	(54.07)	表断:にぶい黄橙(10YR7/4)	1mm前後の砂粒多 長、赤、金雲	土製　烏
C7	30	土壙15・16	ミニチュア					内外:橙(2.5YR6/6)釉:橙黄色(10YR 7.5/10)	精良	陶器 口径：4.5cm 底径：4.6cm 器高：1.6cm
C8	31	土壙18	人形	22.7	13.6	高17.0	2.55	表:浅黄橙(10YR8/3) 釉:褐(7.5YR4/3)など	精良	土製　鳥
C9	31	土壙18	人形	(24.7)	(22.5)	(26.2)	(9.23)	釉:暗赤(7.5R3/4) 橙(7.5YR7/6) 素:灰白(10YR8/2)	精良	陶製 人物頭部（大黒天）
C10	31	土壙18	人形	32.9	21.8	15.8	7.63	内外断:橙(5YR6/6)	1mm以下の砂粒 雲、金雲	陶製 人物（僧侶）焼締め
C11	31	土壙18	人形	(56.7)	32.8	21.1	(26.94)	素:灰白(10YR8/2)	精良	土製 人物　施釉
C12	31	土壙18	人形	(59.9)	(64.1)	(50.3)	(60.15)	内外断:にぶい橙(7.5YR7/4)	1mm前後の砂粒少 長、赤	土製 犬頭部
C13	31	土壙18	紅皿					スノーホワイト(N9.5)	精良	白磁 口径：2.1cm 底径：0.8cm 器高：1.1cm
C14	34	土壙21	箱庭道具	59.0	42.0	16.0	26.60	釉:淡黄(2.5Y8/4) オリーブ灰(10Y4/2) 素:灰白(2.5Y8/1)	2mm以下の砂粒 長、石	陶製 天神様ほこら 透明・緑釉
C15	47	溝1	人形	(118.8)	(68.9)	4.0	(41.14)	内外断:にぶい褐(7.5YR6/3)	1.5mm以下の砂粒 長、赤、雲	土製 大黒天
C16	47	溝1	人形	(58.0)	(27.0)	20.3	(22.28)	内外断:にぶい橙(7.5YR7/4)	雲多	土製 僧侶か
C17	47	溝1	人形	(64.0)	32.0	22.0	(31.57)	釉:灰(5Y4/1) 素:灰白(2.5Y8/2)	2mm以下の砂粒	陶製 僧侶か
C18	47	溝1	人形	(54.6)	(44.8)	(28.0)	(25.07)	釉:灰オリーブ(5Y6/2)オリーブ黒(7.5Y3/1) 素:灰白(5Y7/1)	精良	陶製 瓢箪をもつ猿
C19	47	溝1	人形	(70.4)	(38.7)	(29.7)	(41.22)	にぶい橙(7.5YR6/4)	2mm以下の砂粒 長、雲	土製 猿 背面ハケメ
C20	47	溝1	陽物形	(72.8)	(29.0)	14.3	(22.43)	にぶい黄橙(10YR7/2)	金雲、雲中	土製 尿道に穿孔
C21	47	溝1	面模	55.1	34.5	8.5	19.6	内断:にぶい橙(7.5YR6/4) 外:にぶい褐(7.5YR5/4)	精良	土製 鎧武者
C22	47	溝1	椀					釉:透明、にぶい赤褐(5YR5/4)素:にぶい黄橙(10YR7/3)	精良	陶器　口径：3.8cm 高台径：2.0cm 器高：3.15cm
C23	47	溝1	紅皿					スノーホワイト(N9.5)	精良	白磁 口径：2.1cm 底径：0.7cm 器高：1.1cm
C24	47	溝1	玩具	(43.1)	(55.2)	(19.3)	(14.86)	にぶい橙(7.5YR7/3)	1mm以下の砂粒少 雲、長、赤	土製　不明製品
C25	47	溝1	鋳型	(61.0)	(124.0)	(72.0)	(319.96)	橙(7.5YR6/6)	3～6mmの礫少 2mm以下の砂粒多 長、雲、赤	下側の型か
C26	47	溝1	鋳型	39.5	71.0	16.5	64.39	灰白(N7/)	2mm以下の砂粒多 長、雲	瓦転用 網用の錘鋳型か
C27	51	溝3	玩具	径28.0	つまみ径5.0	10.0	4.65	釉:灰白(5Y7/2) 鉄色(2.5BG2.5/2.5) 素:灰白(5Y8/1)	2mm以下の砂粒 長	陶製 蓋
C28	55	包含層	箱庭道具	(46.8)	(42.6)	14.5	(17.08)	素:浅黄橙(7.5YR8/3) 表:草色(5GY5/5)裏:黒褐(2.5Y3/1)	3mm程の石1個含む、雲	陶製 灯籠の笠
C29	55	包含層	人形	55.8	27.2	高40.0	23.71	にぶい黄橙(10YR6/3)	1mm以下の砂粒少 赤	土製 鳥

金属製品

掲載番号	図番号	遺構名	器　種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	10	井戸1	銭		径23.3		2.70	銅	寛永通寶
M2	12	土壙1	煙管	68.0	16.1	高29.0	9.32	真鍮	雁首
M3	15	土壙４	煙管	(38.1)	8.5		(2.39)	真鍮	雁首
M4	26	土壙11	煙管	112.6	8.3		9.63	真鍮	吸口
M5	31	土壙18	鎹	(101.7)	8.4	高29.1	(14.57)	鉄	片方が折れ曲がる
M6	31	土壙18	環		径58.3	5.2	26.76	銅	
M7	31	土壙18	煙管	25.7	12.3		3.78	真鍮	雁首
M8	32	土壙19	刀子	170.0	18.8		18.44	鉄	柄付
M9	33	土壙20	包丁	(141.9)	22.8	2.6	(22.15)	鉄	２か所折れ曲がる
M10	34	土壙21	煙管	48.4	10.0		4.91	真鍮	吸口
M11	48	溝1	小柄	195.7	14.5	3.5	33.48	鉄	「備前長船」銘
M12	48	溝1	剃刀	176.0	15.0	2.0	20.62	鉄	
M13	48	溝1	包丁	(157.2)	50.8	3.0	(65.04)	鉄	先端・基部欠損
M14	48	溝1	小柄	69.0	13.0	4.0	10.78		柄のみ
M15	48	溝1	鎌	(131.4)	(96.6)	3.0	(109.85)	鉄	先端・基部欠損
M16	48	溝1	鎚	146.9	43.2	39.0	770.87	鉄	穴の中に目釘２
M17	48	溝1	碇	160.0	107.3	12.3	168.78	鉄	鉤４つ　漁具？
M18	48	溝1B	煙管	26.5	10.0		7.31	真鍮	
M19	48	溝1B	煙管	36.9	13.4	高17.1	4.02	真鍮	雁首
M20	48	溝1	釘	左　87.6 右　86.2	左　5.1 右　3.8	左　4.5 右　3.8	18.64	鉄	針金で釘２本緊縛
M21	48	溝1	笄	132.5	4.1	3.6	7.09	真鍮	
M22	48	溝1	簪	(134.6)	4.96	2.0	(6.11)	真鍮	飾り部分欠損か
M23	48	溝1	簪	129.5	6.0	4.3	5.14	真鍮	耳かき付 花の意匠
M24	48	溝1	簪	149.0	8.0	5.0	7.05	真鍮	びらびら簪 コウモリの意匠

掲載番号	図番号	遺構名	器　種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M25	48	溝1	櫛	102.2	46.5	0.4	8.78	真鍮	鏨による打刻、赤色のビーズ付き
M26	55	溝1上包含層	蓋		径67.0	高17.0	27.75	真鍮	花弁つまみ16弁、基部24弁
M27	55	包含層	錐	158.8	7.2		13.9	鉄	

木製品

掲載番号	図番号	遺構名	器種	計測値（cm）			備考
				最大長（口径）	最大幅（底径）	最大厚（器高）	
W1	10	井戸1	杓子の底	7.13	(5.55)	0.25	
W2	10	井戸1	独楽	4.15	4.15	5.7	叩き独楽
W3	14	土壙2	椀	9.6	5.0	3.25	朱塗り　丸に三つ柏
W4	19	土壙7	杓子	8.35	(7.6)	(4.05)	全体黒漆塗り
W5	19	土壙7	杓子	(26.7)	(9.55)	(5.65)	柄と杓の接合は復元
W6	21	土壙9	下駄	19.6	6.8	2.1	歯と本体の接合は復元
W7	22	土壙10	櫛	(3.12)	(4.35)	(0.7)	
W8	26	土壙11		(10.1)	(5.7)	0.65	表赤漆・裏黒漆塗り
W9	27	土壙12		(8.8)	(4.95)	1.2	
W10	30	土壙15	蓋	12.6	3.95	3.1	内外面赤漆塗り
W11	32	土壙19	戸車		5.2	0.9	
W12	33	土壙20	曲物	(12.0)	(6.8)	0.5	底部分のみ
W13	37	土壙24	椀			(3.7)	外面黒漆塗り、丸に変わり散り桜 内面赤漆塗り
W14	42	土壙29	包丁柄	11.12	2.45	1.85	
W15	49	溝1	椀	6.6	3.9	3.1	内外面赤漆塗り
W16	49	溝1	将棋駒	2.05	1.5	0.3	内外面に墨書
W17	49	溝1	匙	(11.7)	(5.55)	0.6	内外面赤漆塗り
W18	49	溝1	下駄	21.5	7.9	2.9	歯を欠く
W19	49	溝1	提灯?	14.2	13.4	0.6	上下部分か、側面に穿孔
W20	55	包含層	下駄	14.3	5.5	2.0	刳り下駄
W21	55	包含層	草履	23.15	6.9	2.4	鼻緒付き
W22	57	井戸３	加工木	39.6	4.6	5.1	
W24		溝1	たわし				棕櫚たわし、写真のみ掲載
W25		溝1	縄				写真のみ掲載

石製品

掲載番号	図番号	遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
S1	26	土壙11	碁石		22.0	3.0	(2.37)		裏面剥離
S2	48	溝1	硯	(53.0)	91.0	(14.0)	(48.16)		海の上側のみ
S3	55	包含層	鋳型	34.0	(50.0)	15.0	44.79		網用の錘鋳型か
S4	55	包含層	硯	91.0	29.0	11.0	53.05		裏面線刻あり、文字か
S5	61	包含層	石鏃	18.0	(14.5)	3.0	(0.78)	サヌカイト	
S6	61	包含層	石鏃	20.5	(16.0)	3.5	(0.98)	サヌカイト	
S7	61	包含層	石鏃	21.5	(17.0)	4.0	(1.60)	サヌカイト	
S8	61	包含層	石鏃	(22.5)	(13.5)	3.0	(0.80)	サヌカイト	
S9	61	包含層	石鏃	(25.0)	17.0	3.0	(1.03)	サヌカイト	
S10	61	包含層	石鏃	(20.5)	16.0	3.0	(1.76)	サヌカイト	
S11	61	包含層	石鏃	27.0	18.0	3.0	1.26	サヌカイト	
S12	61	包含層	石錐	33.5	13.0	6.0	1.13	サヌカイト	
S13	61	溝1上包含層	石剣	(41.0)	30.0	11.5	(22.12)	サヌカイト	側縁に敲打痕、転用か

貝製品

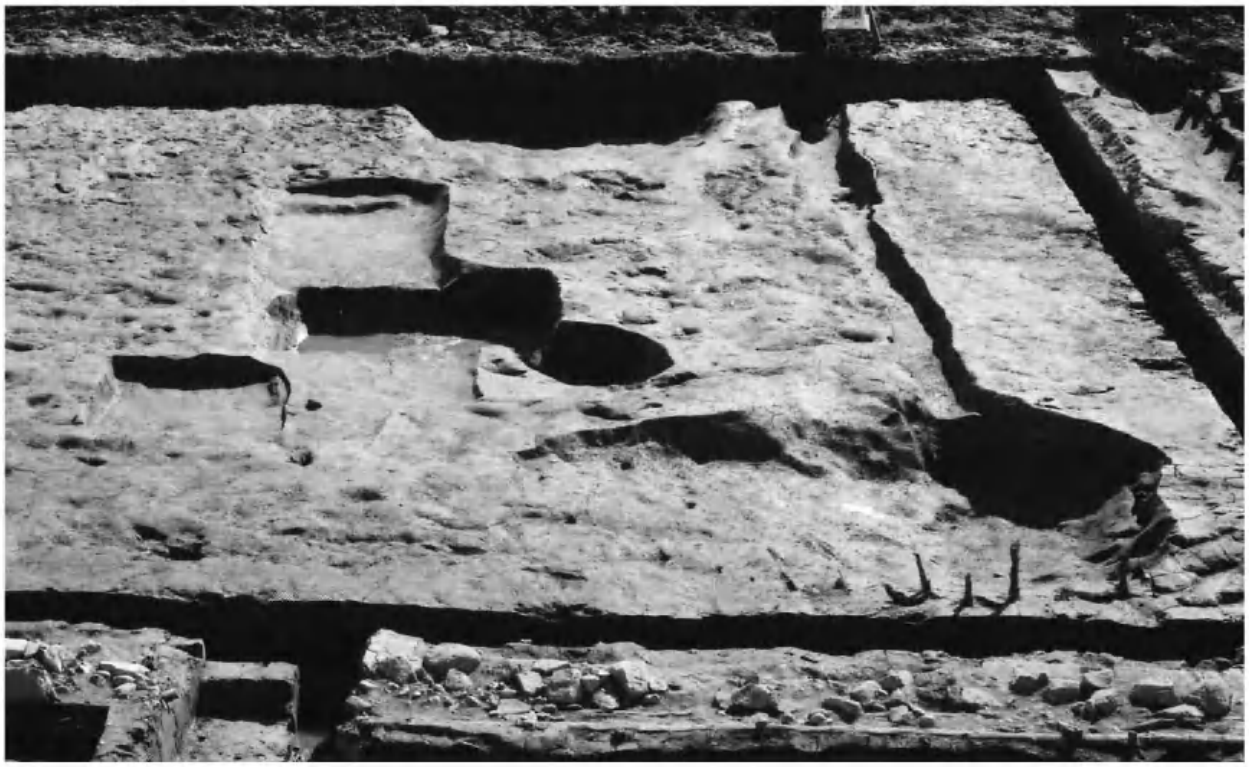
掲載番号	図番号	遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	貝の種類	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
B1	48	溝１	貝杓子	109.65	88.21	1.81	29.87	イタヤガイ	穿孔2つ
B2	48	溝１	貝杓子	73.93	88.47	1.41	19.25	イタヤガイ	穿孔2つ

ガラス製品

掲載番号	図番号	遺構名	器種	計測値（mm）			重量（g）	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
G1	48	溝１	簪	(80.55)	5.68	2.86	(3.80)	透明
G2	48	溝１C	笄	(98.47)	10.57	3.93	(11.31)	中に薄い茶色入る
G3	55	包含層	目薬ビン	60.03	30.17	17.86	23.54	「参天堂薬房 大學目薬」
G4	55	包含層	おはじき		28.82	7.07	6.73	ジェードグリーン（10G5.5/5）、天神様の押印

１　井戸１平面（北から）・断面（南から）

２　土壙４・５・６・杭列１（東から）



３　土壙７～12・溝３（北から）

図版 2

1　土壙 19・20・22・23（北から）

2　土壙 19・22（東から）

1　土壙 25 ～ 28・溝 3（北から）

2　溝 1 北側（北から）

図版 4

溝 1 （北から）

１　溝１南側（北から）

２　溝１北隅部分（南東から）

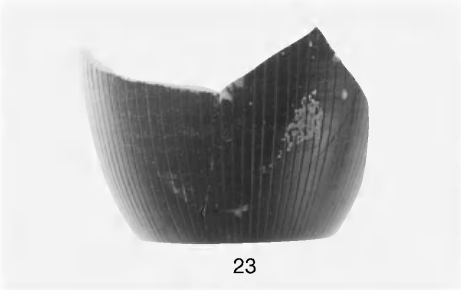
３　溝１北側断面（北から）

４　杭列２（西から）

５　井戸３（北から）

図版 6

20


23

W2

25

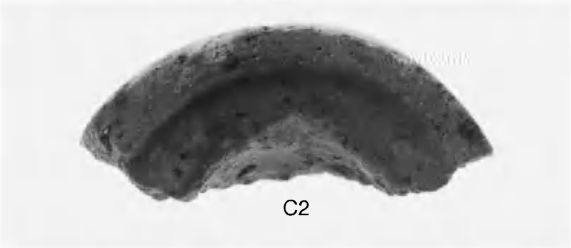
36

M2

W3

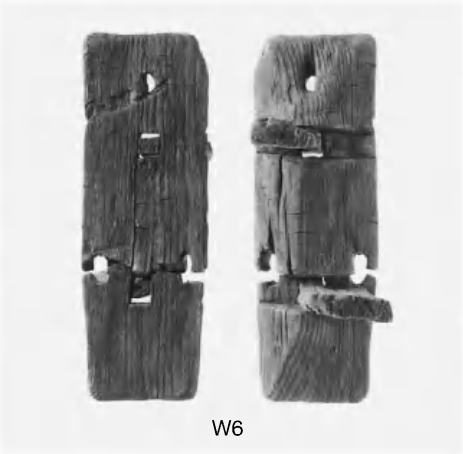
51

M3

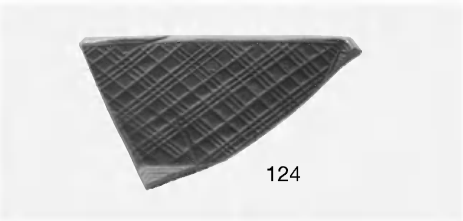

C2

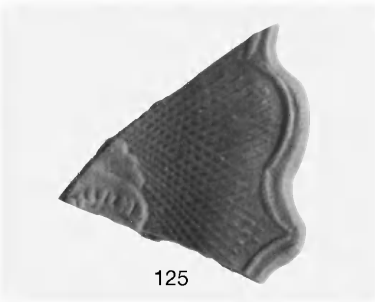
W4

72


W6

118


124


125

井戸１・土壙１・２・４・６・７・９・11 出土遺物

123

126

132

131

133

141

141 側面拡大

139

C7

M4

M7

M6

土壙 11・15・18 出土遺物

図版 8

M8

M9

M10

W11

186

W13

W14

216

220

218

C23

C25

C26

M11

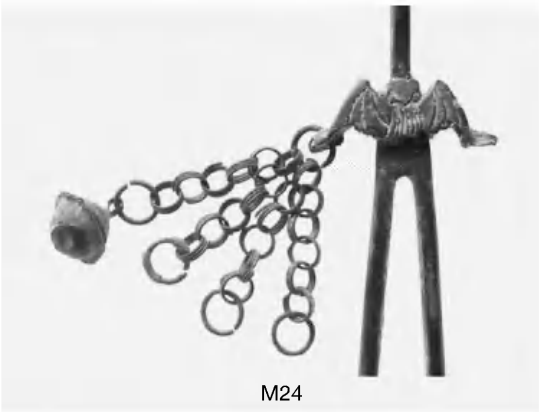
M16

M21

C2+C25

土壙 19・20・21・22・24・29・溝 1 出土遺物

M17


M24

G1

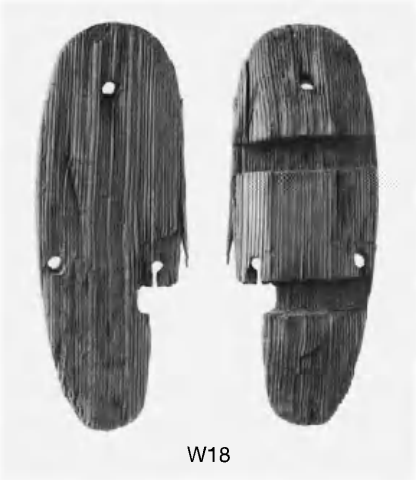
M18

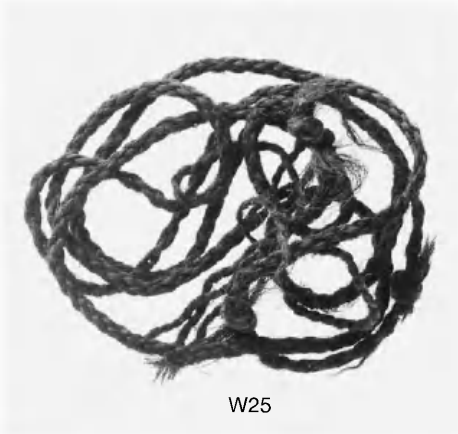
M19

G2

B1

W16


W18


W25

W24

225

226

溝１・江戸時代以降包含層出土遺物

図版 10

229

S4

S3

232

230

231

W22

242

S5

S6

S7

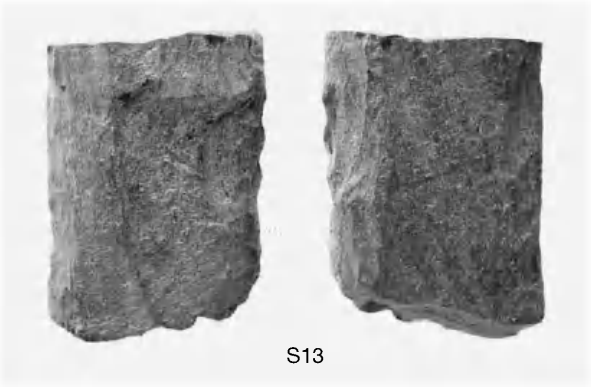
S8

S9

S10

S11

S12


S13

井戸３・包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみかたいせき
書名	南方遺跡
副書名	岡山法務総合庁舎新営に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	234
編著書者名	氏平昭則・柴田英樹・小嶋善邦・光永真一
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3　TEL：086-293-3211 http://pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700-8570　岡山県岡山市北区内山下2-4-6　TEL：086-224-1111
発行年月日	2012年2月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
南方遺跡（みなみかたいせき）	岡山市北区（おかやましきたく） 南方一丁目（みなみかたいっちょうめ） 8-42ほか	33101	332011499	34° 40′ 18″	133° 55′ 29″	20101001～ 20110331	2,161㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南方遺跡	集落	弥生	土壙2基、溝2条	弥生土器、石鏃、石錐、石剣	
		古墳	井戸1基	土師器	
		近世	井戸2基、杭列3、土壙29基、溝4条	磁器、陶器、備前焼、青磁、白磁、土師器、瓦器、瓦、土製・陶製人形、簪、小柄、四つ手碇	江戸時代の絵図と検出した遺構が一致、「三谷様」ヘラ書き焜炉出土

要約	東隣の岡山地家簡裁庁舎建設地点で約180基確認された弥生時代後期の袋状土壙は、今回の調査では調査区南東端と南端に１基ずつ検出し、袋状土壙分布範囲の西端が判明した。また、調査区南東側で古墳時代前期の井戸１基を確認したことから、今回の調査区南側に古墳時代前期の集落が存在する可能性を指摘できる。江戸時代の当地点は侍町の一角に比定されていた。調査で検出した溝１の形状が岡山城下の文久元年（1861年）ごろの絵図「備前岡山地理家宅一枚図」上の水路と一致し、絵図の町割りと遺構の照合が可能になった。さらに、絵図の三谷家の範囲にある土壙から「三谷様」とヘラ書きのある焜炉片が出土した。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　234

南　方　遺　跡

岡山法務総合庁舎新営に伴う発掘調査

平成24年２月17日　印刷
平成24年２月29日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2